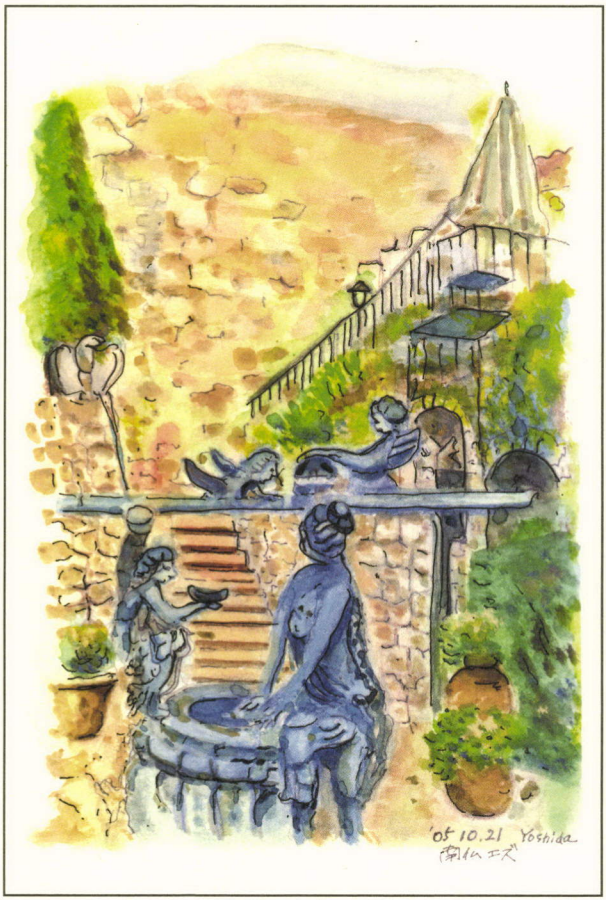
悠　遊　第十三号



企業ＯＢペンクラブ

表紙の絵　南仏エズ村の片隅で

太陽の光がさんさんと降り注ぐ「コート・ダジュール」の中心地ニースから車で約三十分の内陸、高い丘の上にエズ村はある。石畳の路地が曲がりくねり、両側には石造りの家がひしめきあって建っていた。あたかも鷲の巣のようなところから「鷲の巣」村とも呼ばれている。

通りの片隅に置いてあった天使や女性のブロンズ像が古代オレンジ色のレンガとよく似合っていたので、立ち止まって描いてみた。民家というかギャラリーというか、画家や職人たちがスケッチ画、水彩画、油絵をその場で描いたり、工芸品を造ったりして、観光客に売っている。

立ち寄ったギャラリーの主人の画家と、しばし絵談義をしスケッチ画を交換した。紺碧の地中海に青い空、ヨーロッパ中の人々が憧れる観光地も、この時期、十月下旬ともなれば人影はまばらで、静かな佇まいだった。

（吉田邦彦記）

企業ＯＢペンクラブ同人誌

《第十三号》

目次

◇会長挨拶……西川　武彦　4

＝特集　卒サラのＧＮＰ＝
―元気で長生きポックリ―

◇いかに生きるか……松浦　武弘　6
◇ＧＮＰで医療費の膨張に歯止め……中村　將陸　9
◇横出世の心得帳……西川　武彦　12
◇自分のテーマに恋をしよう……森田　茂　15
◇あいつ……安藤　晃二　18
◇出来る奴は行動する……岩崎洋一郎　20
◇人生は七十歳より〈老計と死計〉……上原　利夫　22
◇「そう急がずともよい」……榎本喜三郎　24
◇卒サラのＧＮＰ心得帳……大泉　潤　26
◇見果てぬ夢「ＧＮＰ」……岸本　義生　28
◇秘密結社〝Ｍ５〟……北田　純一　30
◇もう一つの「ＧＮＰ」……金京　法一　32
◇熟女のお説教……関谷　裕彦　34
◇元気で長生きは幸福か……都甲　昌利　36
◇ピンピンコロリ……中川路　明　38
◇長生きできる社会……野瀬　隆平　40
◇それぞれの「ひとり芝居」……平尾　富男　42
◇不意のお迎え……藤岡　豊　44
◇わたしのＧＮＰ……山縣　正靖　46
◇老兵は消え去るのみ……石川　正達　48

＝自由テーマ＝

◇四十年前の東海道新幹線（その三）……大塚　滋　52
◇「英国における日本人社会の歴史」をたどって……大庭　定男　55
◇京都で…再会……清水　勝　58
◇ストレンジ師の実像に迫る……高橋　孝蔵　61

◇ベトナム今昔……中村　爽　64
◇神々は倦めり　お年寄りのための童話―その四　新山章一郎　67
◇戦争と私……吉嵜　清巳　70
◇ヨスとの出会い、リチャードとの別れ　吉田　邦彦　73
◇言葉は人を育む……芦刈　克　76
◇ユダヤとカトリック教徒の結婚……今川　確郎　78
◇会津のみほとけたち……遠藤　俊也　80
◇千曲川源流を遡る……大月　和彦　82
◇私の怨霊史観（その二）……大野　昱　84
◇母の決断……大平　忠　86
◇去年今年……木下　洋介　88
◇日中友好めでたしめでたし……黒崎　昭二　90
◇インドネシアの友人たち……荘司　忠志　92
◇医療データベース作成と公開を……杉浦　右蔵　94
◇私のプロジェクトX・梅毒の内服薬…玉山　和夫　96
◇斎　宮……中洲　靖雄　98
◇「ふらんす物語」と荷風……古川さちお　100
◇手作り旅行の楽しみ……松谷　隆　102
◇一輪車では走れない……小島　博志　104
◇ペン俳句のこの一年、これよりの一年…平間真木子　108
◇三年目の川柳勉強会……平尾　富男　112
◇杉山修一さんを偲ぶ
　さようなら、心の友よ……岩崎洋一郎　116
◇浅野正春さんを偲ぶ
　苦労いとわぬ責任感……中村　爽　118
◇企業OBペンクラブのあゆみ（年表・年史）……平尾　富男　121
◇執筆者名簿……130
◇編集後記……132

表紙の絵　吉田邦彦「南仏エズ村の片隅で」
カット　吉田邦彦（特集）
　　山縣正靖（自由）

外向けチャンネルに努力

会長　西川　武彦

どういう風の吹き回しか、二〇〇六年から二年間会長職をお預かりすることになりました。まずは、八年の長い間クラブを引率し、昨秋には、先導して、「ゆったり生き生き年金暮らし心得帳」なる単行本を出版して花道を飾られた北田さんのご苦労に深く感謝申し上げます。

縦出世から解放されたクラブですから、上座から睥睨し、肩肘張って抱負を語るつもりは毛頭ありませんが、内では、私より有能な皆様から何かとお知恵を出して頂き、それを纏める役に徹したいと思います。

一方、内外での体験、経験を元手に、卒サラが物書き物言うべく集まったクラブですから、寄稿、投稿、出版等で外に発信するため、外向けの顔となって、チャネル開拓に力を注ぎたいと思います。発信手段として、情報収集手段として、あるいはコミュニケーション手段として、ＩＴも最大限に活用すべきでしょう。メール、ネット、ウエブサイト等に不慣れな会員も、ＩＴを使ってクラブ活動を楽しめるよう、出来得る範囲で、配慮したいと思います。

クラブ活動がフラストレーションの種になるなどは論外です。今では長くなった卒サラ人生を楽しみながら、ＧＮＰ（元気で長生きポックリ）の助けになるようなクラブにしたいものです。先人のご努力で企業ＯＢペンに相応しいプロジェクト、勉強会等が数多くありますが、それに飽き足りない方は、ご自分がやりたいプロジェクトを提案し、自ら立ち上げて、エンジョイする場を創って頂きたいと思います。肩が凝ってきました。これで筆を置きます。

特集・卒サラのGNP―元気で長生きボックリ

いかに生きるか

松浦　武弘

我々は、特に定年後については、悠々自適で好きなことをして、元気に生活し、ぽっくりころりと、死ぬことが理想であると考えている。しかしながら、自分の周囲を見回しても、このような理想的な人生を全うする人は極めて少なく、まず皆無に近いのではなかろうか。私の敬愛する小学校の校長先生が、いつもどおり朝起きて、洗顔後炬燵（こたつ）で新聞を読んでおられて「ウーン」と言ったまま亡くなられた。享年八十五歳であったが、かかる大往生を、私はこの例しか知らない。

従って、元気で・ぽっくり・ころりと死ぬということは、いかに健康に注意して、規則正しい生活をして、「いかに生きるか」ということに尽きると確信する。

定年以降がゴールデンタイム

私は家族関係の基本は「一番が妻、子供が二番、親が三番」であると確信している。高齢化時代の今日、定年後の人生こそが自己の総括のゴールデンタイムである。その必須条件は健康であり、前提条件は知的好奇心と若干の経済的余裕であり、ともにシェアする伴侶の存在は不可欠である。商社マンの私は、六十歳の定年時にはボロボロの体になっていた。定年以来、断酒・断煙を続け、妻の協力を得て体重を三十キロ落とすことに成功した。日課として、六時起床の木刀の素振り・打ち込み五百本と、妻との一万歩以上の散歩を励行している。ちょうど十年前に企業ＯＢペンクラブに入会。五十七歳の折、梅原日本学に出会い、私の古代への情熱に火がつき、朝鮮、中国、シルクロードと舞台が広がり、六年目になったヘブライ語の知識が新たな視点を加えている。

毎年の海外旅行と、手作りの国内旅行で、妻と共に喜びを倍加できることに感謝している。（四百字の本稿はアリコ・ジャパンに寄稿したエッセイの入選作である）

継続は力なり

私は定年後、毎朝六時に起床し、まず空腹時血糖値の

測定を行い、その測定表は丸の内病院での毎月定期健診の時に担当医に提出している。その後、木刀の素振り・打ち込み五百本を励行しており、今年の冬は両手の指がかじかむぐらい冷え込んでいるが、それでも素振りの後は燃える体となっている。

朝食の準備と後片付け及び夕食の後片付けは私の担当として継続しており、すでに六年を経過している。午前十時から、妻と買い物を兼ねて、二時間前後の早足での散歩を励行して、自然の移ろいを肌で感じている。三十分も歩くと、体も燃えてきて、冬場でも散歩の後は、シャツを着替えることがしばしばである。

基は食にあり

定年一カ月前に、丸の内病院に検査・教育入院した時は、担当医から「このような生活をしていると五年ないし十年以内には、必ず脳梗塞・心筋梗塞・壊疽（えそ）などになりますが、死ねませんよ。貴方まだ六十歳でしょう」と言われたくらい最悪の状況であった。

三週間の検査・教育入院で、カロリー制限の生活を体験し、退院後も断酒・断煙はもちろんのこと、妻の協力を得て野菜主体の食生活に変更して今日に至っている。

毎月定期健診に通っており、現在は三人目の担当医であるが、担当の先生からは優等生の患者として信頼を得ている。朝食を自分の担当として生野菜を大量に食べることを心掛けている。ちなみに、キャベツ、タマネギ各々半個ずつ、ニンジン一本、ピーマン三個、キュウリ一本にトマトやベランダ菜園のシュンギクやパセリなどである。朝食以外では妻が野菜主体の食事を常に心がけてくれており、加えて大量の寒天を食間に食することを習慣としている。

知的好奇心の追求

定年後始めたヘブライ語は、六年目を終えるのを機会に、三月にはヘブライ語講座研修旅行に参加する。受験英語の悪癖に鑑みて、しゃべれるヘブライ語を目指して、毎日リンガーホーンで磨きをかけており、現地イスラエルでは、実地訓練を楽しみにしている。

昨年三月、三泊四日の諏訪旅行で、以前から参拝した

かった諏訪大社にお参りし、現在の御祭神以前の「ミシャクチ神」に巡りあい、神長官、守矢氏の屋敷跡の資料館で御頭祭の展示物をみる機会に恵まれた。

明治の初めまで行われていた御頭祭の献げ物は、羊が鹿に変わっただけで、現在もサマリヤで行われている儀式と瓜二つであるとのことである。ちなみに献げ物の数は七十五頭の鹿で一頭だけ右の耳が裂けていることまで同じである。「ミシャクチ」という発音は近隣諸国には全然なく、ヘブライ語では「イシャクに由来する」との意味である。神がアブラハムを試すために、子供のイサクを神に捧げるように命じて、アブラハムがモリヤ山に祭壇を築きイサクを献げるために、まさに刀で殺そうとする。これは、旧約聖書、モーゼ五書の「創生記」の二十二章に記載されているが、御頭祭でも同じような儀式が諏訪大社で明治の初めまで行われ、諏訪大社の神体山は旧約聖書と同じ守矢山なのである。

諏訪大社参拝以降、古い神社の言い伝えの中に、日本の古代の証を感じ、日本全国に九十七社ある、一之宮詣でにはまっているが、いまだ半分を残している。一之宮と呼ばれない大社もたくさんあり、例えば宗像大社、熱田神宮、熊野大社等は別格大社なのである。

これら以外にも古い神社が沢山存在し、朝鮮半島から渡来した神を祀る神社も多く、一之宮を含む神社巡りも何年かかるか想像を絶する。加えて、お寺など名所・旧跡も多く、巨岩・巨木まで入れると、日本全国をどれだけ歩かねばならないか分からない。

ヒンズー教徒は、人の人生を「学生期」「家住期」「林住期」「遊行期」と四分割する。私は今まさに、「林住期」たるゴールデンタイムを生きている。「遊行期」を立派に生きることは、私ごとき凡人には到底無理であり、聖人君子にお任せしなければならない。私は「林住期」たる現在を、健康で生き、「遊行期」を限りなく零に近づけねばならないと考える。

人の一生には何が起こるか、予期できないのが常であるが、現在の私の規則正しい生活を続ける限り、敬愛する校長先生のごとく、私は元気で・ぽっくり・ころりと大往生出来ると夢想している次第である。

GNPで医療費の膨張に歯止め

中村　將陸

日本は、世界一の長寿国である。その恩恵を享受しているのは、われわれ卒サラ族に他ならない。誠にありがたいことであると、個人的には素直に喜んでいる。

しかし、国・地方を合わせた長期債務残高が七百四十兆円という途方もない赤字を抱えているわが国家財政は、膨張して止まない社会保障費に耐えられるのだろうか、喜んでばかりもいられない。

特にバブル経済崩壊以降、少子・高齢化が急速に進行していたわが国は、ついに二〇〇五年から人口減少社会へ突入した。年を重ねるにつれてこの問題はますます深刻の度を増していくことになると思う。目下、ポスト小泉をにらんださまざまな財政再建策が論議されているが、医療費の抑制と消費税の引き上げが二つの柱となることは確実であろう。

そこで、われわれ卒サラ族が、元気で長生きし、ぽっくり逝けば、膨張する医療費に歯止めがかかり、財政再建にも寄与できるというのが私の持論である。このために、私が日ごろGNPについて心がけていることを披露したい。

まずは、元気のGから始めよう。

サラリーマン時代は、会社組織の中で、協同作業を通じて成果を挙げることが求められた。したがって時には、組織の目的のために個人を犠牲にすることもあった。しかし、卒サラの後は、そのような制約から開放されるからありがたい。この自由人としての特権を最大限に生かし、健やかな精神をもって、毎日を楽しく生活するようにつとめている。

昔から病は気からといわれているように、元気でいるためには、心の健康が第一である。そのためには、毎日を心底から喜びを持って生きることが大切である。それにはまず、自分が幸運の星の下に生まれつき、その後も恵まれた人生を歩んできたと、心より感謝することである。世の中は上を見てもきりがないし、下を見てもきり

がない。実際には、その中間にいるのであろうが、そんなことを詮索することはやめて、この世で最高の幸せを享受していると、勝手に思い込むことである。

また、人生の節目を祝う還暦や古稀などに当たっては、幸福感をじっくりかみしめたい。こうした節目を迎えられたのは、父母をはじめ、学校の恩師、会社の先輩・同僚など多くの人々に支えられてのことであり、一人ひとりを思い出して深く感謝することである。ここで大切なのは、人生は自分自身で納得することだ。めでたいことを誰憚(はばか)ることなく、大いに寿(ことほ)ぐことによって、幸福感が体全体に広がってくる。こうした、心がけを積み重ねてゆくことによって、実際に体調不良を克服した経験がある。そのとき以来、他人から見たら無意味と思われることにでも納得し、今も元気のGを生きている。

次は、長生きのNについて考えよう。

私ども老夫婦は、現在息子夫婦と二世帯住宅に住んでいる。これが実現した背景には、息子の選んだ連れ合いが、近頃の若い人には珍しく、私どもとの同居に同意してくれたからである。この点、大いに感謝している。

そんな私どもは、内孫二人と、外孫二人の四人の孫に恵まれた。娘も近くに住んでいるので、すべての孫たちと分け隔てなく楽しく付き合っている。片言の言葉をしゃべり始めた頃の孫が最も可愛い。子供の何気ない片言隻語、一挙一動が、周りの大人たちを抱腹絶倒の笑いの渦で包んでくれる。最近医学的にも笑いの効用は評価されつつあり、幼稚園児がケアハウスを訪れて、老人たちと一緒に遊んだりする光景をテレビで見る機会が多い。

私は、今年古稀を迎えたところで、長生きできるか否か分からない。しかし、「一怒一老」、「一笑一若」ともいう。今の生活環境がそのまま続けば、長生きできそうであると勝手に思い込んでいる。

深刻な財政赤字に苦しんでいるわが国政府は、目下のところ増税にしか目を向けていない。そうではなく、二世帯住宅家族に対し、しかるべき優遇策を採るべきだと考えている。膨張して止まない医療費の抑制にこれほど効果的な政策はない。政府の想像力不足のためか、日本人古来の価値観に目が向かないのは、実に嘆かわしい。

最後はポックリのPである。

最近では、世界的に単なる平均寿命よりも、健康で実質的な長寿を享受する健康寿命が重視されるようになった。二〇〇四年における日本人男性の健康寿命は、七十二・三歳であった。同じく平均寿命は、七十八・六歳で、平均寿命から健康寿命を引いた差は六・三年となり、単純計算すれば、この期間を半健康の状態か、もしくは寝たきり老人として、ベッドの上で暮らすことになる。医療費の抑制は、この差を短縮することによって達成できる。また、寝たきりになって、看護を受けなければならないことは、個人の尊厳を大いに傷つけるばかりか、周りの人々に大きな負担を強いることになる。なんといっても避けたい。

寝たきりは、大腿部、腹部、背中、臀部などの大きな筋肉を鍛えることで防げるという。もちろん、指などの小さな筋肉は、頭脳活動と密接な関連があり、認知症の予防にも役立つが、ここでは触れない。

大きな筋肉は、日常生活のちょっとした心がけで、十分鍛えられる。とにかく、日常生活で歩行するとき、目線を水平より高く上げて、大またで速く歩くことである。駅やビル内でも、エスカレーターやエレベーターは極力使わないようにする。こうした心がけを続けるだけで、知らずに筋肉は鍛えられ、九十歳を越えた超高齢者になっても体を支える力がつき、体のバランスを保つことができる。

また、新聞の「追悼抄」の欄に目を通すと、超高齢者のほうが安らかな死を迎えられるようである。周りにいた人は、「眠るようにして死んでいった」と回想する。若死にする人ほど、苦しみながら死んでいく。ポックリ逝くこと、すなわちPを望むならば、われわれ卒サラは、生きている間太い筋肉を鍛えるよう十分心がけることが大切である。

以上、卒サラの一員として、GNPを通じて財政再建に貢献できる方策を考察してきた。しかし、これらは国家財政の問題だけでなく、個人生活における幸福の実現にとっても極めて有効であると確信している。

横出世の心得帳

西川　武彦

十一月半ばから一カ月間、ＯＤＡの仕事を手伝いました。開発途上国から上級文官を十五名招いて、日本の高度成長を支えた官民の人材育成制度を学んでもらうセミナーです。それぞれがお国を紹介する中で知ったことですが、アフリカや中南米の最貧国では、平均寿命は五十歳以下とか。四十八歳の男性が、「私は人生で残業しています」と笑わせます。男性の方が長命という国も稀ではありません。翻って、経済的には超一流国の日本では、男が七十八歳、女は八十五歳と明らかに女性優位です。

どうしてそうなったか？　高度成長を担った働き手は男性サラリーマンです。ラッシュアワーの中、くたくたになって出社する、上司、部下、取引先のプレッシャーにめげず、連日の長時間激務です。かわい子ちゃんに触れればセクハラ騒ぎになるし、「放課後」は、付き合いや接待で、土日を返上することもままあります。終身雇用で、会社という村から抜けられず、ゴマスリ、リストラ、左遷、エトセトラ。左右をうかがいながら縦出世を求めて生きる悲劇、あるいは喜劇といえましょうか。欲求不満を解消すべく深酒しようものなら、ローンに追われる薄い財布ですから、「沈酔し醒めて懐ちと寒し」、「身を沈め様子窺う朝帰り」で、命を縮めます。

片や女房殿は、三種の神器でつらい家事から解放され、マイホームを城に三食昼寝付き。別居する姑から苛められることもなく、子育てが終われば、料理教室などのスクール通いです。その揚げ句、食べ過ぎれば、エアロビクス、テニスなどで汗をかいて健康維持に努める。そんなこんなで長生きするわけです。

筆者も縦出世の波に巻き込まれましたが、表街道を徐々に外れ、裏街道を難儀しながら歩いた長い年月がありました。四十歳半ばから、海外でも国内支店でもトップでなく次席で、しかも広報渉外という専門職的仕事が

あてがわれました。そこで、サラリーマン人生の先が見えたのを機会に、今でいうSWOTという手法で自己分析しました。自分の強み（Strengths）、弱み（Weaknesses）、チャンス（Opportunities）、阻害要因（Threats）を並びあげ、マトリックス化して分析して最善策を探るという手法です。

結論を絞れば、Sは時間・行動が比較的自由、Wは仲間外れになりがちで、社内情報に疎くなる、Oは自分の世界を拓く余裕ができる、社外との接触が多い、Tは、村八分にされ出世と縁がなくなる。こんなところだったでしょうか。

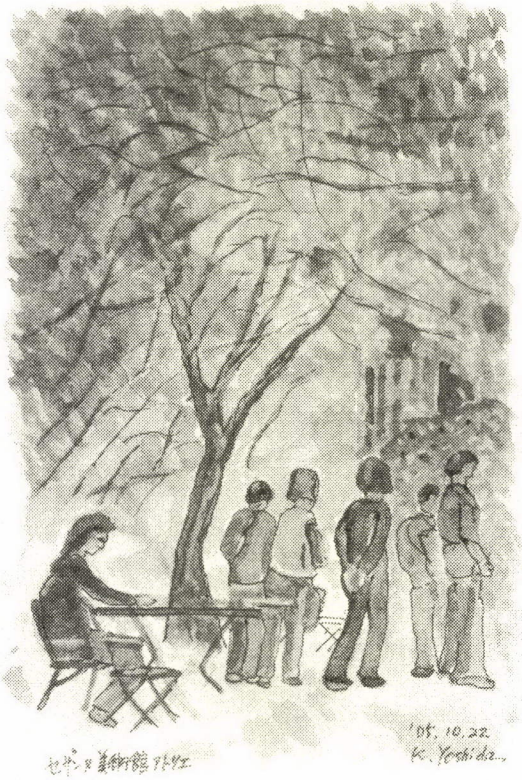
そこで編み出したのが次の事業計画です。①人一倍集中して短時間で業務処理し、残業しない　②最低限ではあるがタイムリーに社内付き合いを維持する　③広報渉外という職務をフルに利用して、交際費を活かし、最大限に社外人脈を広げる、趣味を究める。

その結果、退職後に繋がる人脈が生まれました。人脈というのは、大事にすれば、糸を紡ぐように拡がります。趣味の世界では、テニス、スキー、ボーカルカルテット、物書きなど、鍛錬して人並み以上に楽しめる段階に到りました。現役最後の年には、特別休暇で英国のナショナルトラストのワークキャンプに参加。その体験から、退職金を割いて造った山小屋をベースに、町づくり、景観創造などにもかかわっています。それぞれの分野の団体に所属し、頼まれれば相応の役職も引き受ける。歳をとればお金が掛かりません。借金さえなければ、生活費は年金で何とか賄えます。たまには原稿料が入ることもあります。嫌なこともあるし、打ち込み過ぎれば肉体的にも疲れますが、こんなところが究極の横出世というものかもしれません。

フラストレーションが溜まる頃、ほんのちょっと小遣いが入った夜には、夢の中で、「老いてなお指がまさぐる夢の中」なんてこともありましょう。たまらず、昔の馴染みを携帯で呼び出し、某ホテルで密会する。「再会

し枯れた色香にまた惹かれ」、挑戦しますが、息子の代わりに血管が爆発し、腹の上でポックリ。極楽死かもしれませんが、遺された家族を思うと忍びないですな。横出世しても、その辺りはわきまえなければなりますまい。

やはり身心の衰えを意識しながら、横出世を楽しみ切り、平均寿命を超えてポックリ、それも長年連れ添った老妻とほぼ同時に、というのが理想ではないでしょうか。そのためには、早くから、連れ合いにも自分の世界を拓く自由を与えねばなりますまい。二〇〇七年から団塊の世代が卒サラします。「現役を退いたら直ぐにポックリと」。こんなおかしな川柳で茶化されないよう、お節介やきの先輩が横出世の心得をちょっぴりアドバイスする次第です。



自分のテーマに恋をしよう

森田　茂

退職後の生活のあり方が、健康で元気に暮らし、長寿の末にポックリと逝くことを望みたいが、現実は、病気に悩まされたり、認知症で介護を必要とする姿を見るにつけ、高齢者のこれからの生き方を考えざるを得ない。

二十一世紀のＩＴ社会は情報のもつ価値が高まるばかりであるが、先進国では社会や企業などの競争が激しさを増し、生き残りのためのリストラが進んでいる。そのために、定年退職するときなどは、悲喜こもごもの心情を抱いた再出発となろう。今の日本は経済優先の社会であるから、人々は損得観念に支配されて、感情的にいらいらの多い生活に陥りやすい。健康でまだ働きたくても、専門知識のない人では簡単には職は見つからないからだろうか。高齢者がなんとか年金に支えられ、趣味に生きる生活も可能なのに、それほど精神的にゆったりした社会でもなさそうだ。いい年をして、そんなにあくせくしないでと、世間では思うかも知れないが、まだ元気なのに手持ち無沙汰の高齢者が多い社会は、活力が乏しくなっていくに違いない。

このような社会で、高齢者は何をどうすべきか今ほど問われる時代はかつてなかったように思われる。

私は、高齢者の生活を支える大切な要素として、

①如何に感動をもつか（カ）
②何に興味をもつか（キ）
③どう工夫するか（ク）
④健康に心掛ける（ケ）
⑤恋のロマンを秘める（コ）

五つのカキクケコの要素を心に銘じていけば、まさにＧＮＰの実現になるのではなかろうかと思う。

いうまでもなく、高齢者の生活環境の充実は、健康や経済の健全性に負うところ大であるが、家族や友人との信頼関係も大きな影響力をもっている。そこで社会・家庭教育を、親たちだけに任せるのではなく、高齢者が大

人への道筋を念頭において、大いに親切心を発揮すべきであろう。いまや自己責任を強く植え付ける社会教育や家庭教育が手薄になっているからである。ときには、若者から反抗されることもあろうが、長じるにつれて理解を示し、年長者を敬う気持ちも出てこよう。その結果、若者に自己行為に対する責任感や反省心が強まり、生活の中で前向きの気持ちが自然に起こるようになれば、必ずや周囲との調和が図られよう。

高齢者の中では、一部の有名人の活躍だけが映るけれども、実際には独自の経験と知恵の蓄積を持っている人々がその能力を発揮できずに、サイレント・マジョリティとなっている。そこで過去の蓄積を死蔵させずに生かしていくことができれば、高齢者の幸せな貢献といえよう。社会教育に関して、高齢者の本当の役割はそこから生まれるのではなかろうか。

また生活面での見識のある教育とは別に、高齢者自身の知的才能をどう研鑽するかも意義あることである。

なるほど、高齢者は経験に裏付けられた知識や認識能力を少なからず持っているが、それに拘泥して、変化に応ずる柔軟性に欠けるきらいがある。それを防止するには、情報の収集・分析や発表などの継続的な知的刺激が必要であろう。

新しい時代に合った勉強は年齢には無関係である。若い人々だけでなく、中高年や高齢者でも、ＩＴ情報の知識は仕事に役立つだけでなく、生活そのものを充実させてくれるに違いない。情報化社会では、新聞やテレビなどのマスコミが社会に浸透しているが、ＩＴ情報を通じて自分のテーマを追い求めることをしないと、本当の生きがいが得られないような時代になりつつある。パソコンの有効活用は、高齢者が失いかけている生活の意義を再生してくれるかもしれない。

そのためには高齢者自身が「カキクケコ」のように、自分なりの興味あるテーマをもつことが大事である。そのテーマをどのように解決していくかを工夫していくと、感動を味わう暮らしにつながっていくにちがいない。恋のロマンとは、男女間に限らず、自分の課題に恋するこ

ともできる。

高齢者の生活を充実するためには、心身の健康ほど重要なテーマはない。自身の規則的な運動が必要なことは述べるまでもないが、夫婦の信頼感が持つ影響力をないがしろにせずに、生活の基盤である家庭を大切にする暮らしでありたい。

その上に、高齢者も社会の一員として、その存在価値を表示できるような生活をしたいものである。そんな環境からGNPの芽が生まれてくるのではないだろうか。

あいつ

安藤　晃二

国立から中央線を三鷹で総武線の始発に乗り換えて、東中野の勤め先に行く電車の中で、僕は毎朝ゆっくりとヘラルドトリビューンを読む。ニューヨークタイムズ、ボストングローブの記事が多い。日常記事と経済記事はスムーズに読んでゆくのだが、最も興味深いのは、我こそはという専門家による政治評論や文化関連記事である。その本場の英語表現とボキャブラリーに遭遇し、辞書の引き甲斐を確かめてはほくそ笑む、僕の無類の楽しみの一つである。

あるとき、アメリカでも何かとお騒がせらしいベイビーブーマー世代についての記事が目をひいた。退職年齢に達しようとする世代を観察している。彼らは絶対に自らの老いを認めようとしない、ましてや死ぬことなど問題外なのである。そんなファッションで生き続ける彼らに、ある日突然垂れ流し、徘徊が襲って来ることが理解されていない、とその筆者は言う。この独特の生き方をする世代への、ある皮肉を込めた論評がテーマであった。何やらこの国の「団塊の世代」の在り様と符合する印象である。彼らの行動様式には常に唖(あ)然とさせられる、ちょっぴり旧世代の僕にとって、「我意を得たり」の代弁者出現に大いに溜飲を下げたものであった。

既に行く先が見えていても、人は誰もそのことを実感として捉え難い。何とかG元気でN長生きしたい、その上Pポックリ逝けたら幸せである。現実は国民医療費年間二十九兆円の三分の一が老人医療費で、老人たちは医者へ医者へと通う。かく言う僕も数年前に老化と因縁浅からぬ病気に襲われた。帯状疱疹が出て、本人が辛い以上に周りも心配した。免疫力の異常低下がその原因であれば、重大な病気の前触れではと考えるのも当然で、密かに家人と親戚との間で電話が飛び交ったとは後で聞いた話である。

びりびりという例えようも無い痛みに悩まされながら薬を携行しつつ西安の大雁塔に登ったりしていた。「いまの時代のことですから」と、妙に説得力のある理由付

けで中国出張を許可した女医先生のところに五年経った今も僕は通っている。「帯状疱疹後神経痛」というやっかいな「あいつ」が待っていた。一年間手を尽くして治療にいそしみ、鋭意克服を目指した。喉仏(のどぼとけ)への注射による神経ブロック、レーザー鍼灸等等、終には抗鬱剤までトライした揚げ句すべて諦めた。原因不明の痛みに何十年も悩まされながら克服した柳沢桂子のストーリーを知ったのもその頃で、何か仕事を片付けるがごときやり方で、病気に立ち向かっている自分の愚かさに気がついた。

痛みの現実は神の摂理のようなもので、人間には抗(あらが)い難いものなのだ。時折の痛みにより、冷えの感覚、パニックが全身に広がる。制御不能、明らかに自律神経に問題が起きているのだ。そんな現象も徐々に少なくなり、今では先ず起こらなくなった。しかし、その部位には痛みが常に控えていて、ストレスを感じたり、多忙時にはひりひりと正確に反応するのである。女医先生は決してそれを治そうとはしない。その術が無いのだ。僕の話を聞いてくれて、時々睡眠導入剤のような薬が出る。そして安心の日々が続く中で、僕はこの病気とはもう訣別することにした。

「あいつ」が同居しているのは間違いないのであるが、ハンドルできる、確信にも似た境地である。老後の健康とはこのようなものであろう。いまでは臆面も無く青年たちに交じって、四十五年ぶりのオーケストラ活動までやっている。二十代前半から七十代までの文字通り老若男女が毎週末の練習に励む。手心なしの要求度に緊張する時間は若き日と全く変わらない、集中度の高い至福のひとときである。バイオリンを弾く僕に対し、「あいつ」は実に行儀がいい、というより熟睡の体なのである。

老人健康指南の先達には驚かされる。貝原益軒の昔に遡らずとも、九十四歳の某病院理事長に至っては今なお現役なので、多忙ゆえに昼間は軽食にしているのだとおっしゃる。「団塊」諸氏も真っ青に違いない。僕の場合、GNPのGで躓いたり、諸先生流の健康術優等生に加わることなど及びもつかない。皆夫々の道を行くしかないのである。ポックリ病を電子医学辞典で引いて見た。十五歳から三十歳の若者に起こるとある我々には端から資格がないことが分かった。

出来る奴は行動する

岩崎　洋一郎

サラリーマンを卒業すると、生活のリズムが一変する。定時に起床して、ネクタイを締めて、決まった電車に揺られて出勤するというルティーンが、一挙に消滅する。服装も、トレーナなどの略装で事足りる。朝、寝過ごしても、なんら支障がない。家庭の生活環境も変わっていることに、改めて気付かされる。子供たちは、もう一人前に育っていて、家庭には妻しか居ない。

男どもは気が付きにくいが、夫が定年になると、妻にも大きな影響がある。つまり、一日中、男が家にゴロゴロいることになり、妻たちの行動に制約が加わる。例えば、夫の昼食という新たな負担が増えることになり、今までのように家を自由に留守にしづらくなる。下手すると、熟年離婚の遠因になりかねない。

生来、私には怠け癖がある。従って、外からの締め付けがないと、だらけてしまいそうになる。だから、卒業にあたり決めたことは、サラリーマン時代と同じような服装と生活テンポを維持することである。そして、毎日、外に出ることである。幸い失業保険も、約半年いただけるので、友人の事務所の一隅を借りて、コンサルタント業を始めた。私の時代でも、もう第二の就職先の斡旋は難しくなっていた。まして、私のような外国の会社との折衝で、新規事業を開拓するような仕事は、滅多にあるものではない。救いの神は、アメリカの企業であった。それまで、「敵方の手ごわい奴」とみなされていたのが奏功して、いっぺん使ってみてやろうと言う会社が出てきた。それで、事務所の経費を賄うことが出来た。

それだけでは、時間が余るので、世話役を買って出た。同級生は、当然同じ年代であるので、定年を迎えた人がほとんどである。社友会やクラス会などの幹事役は、積極的に引き受けた。そうしてパソコンで、名簿つくりや宛名書きの術も覚えた。幹事であるから、みなの消息や趣味も分かる。

趣味も、忙しい現役時代には、暇がなかったが、今や、大手を振って没頭できる。私の場合は、ジャズだが、楽

器は素養がないので敬遠し、ヴォーカルに取り組んだ。ここでも楽しい若い仲間が出来てきた。

昔、読んだバーナード・ショウの言に、「出来る奴は行動し、出来ない奴は評論する」と言うのがあった。正にこれである。高齢になると、知識の集積は多大なものがある。しかし、大それた政治経済談義や、持病のことを、恋々と論評するのは止そう。そんな時間があったら、何かを始めよう。それが、精神的にも、肉体的にも、若さを維持する秘けつである。

私は、今、ケアマンションに住んでいるが、外に出ないで、他人とも交流のない人は、老け込むのが早い。動けるうちは、動こう。九十歳以上にもなると、足腰は衰え、動けなくなる。八十歳半ばまでは、十分に動ける。それが元気の基である。

ぽっくり死にたいが、こればかりは、自分で決められるものではない。それまでは、先ず動きだすことで、はつらつと生きてゆこう！！

人生は七十歳より〈老計と死計〉

上原　利夫

百七歳で亡くなるまで仕事をした木彫家の平櫛田中（ひらぐしでんちゅう）は、「人生は七十歳より」と言っていたらしい。平櫛田中記念館（東京都小平市）に「七十歳にてお迎えあるときは今留守と言え、八十歳にてお迎えあるときはまだまだ早いと言え、九十歳にてお迎えあるときはそう急がずともよいと言え、百歳にてお迎えあるときは時機を見てこちらからボツボツ行くと言え」の書きものがあった。

人間は百二十歳まで生きられるという。実際は、不摂生により心身のどこかが傷み、百歳ぐらいがやっとだ。しかし、わたしは百二十歳を目標にしている。わたしの父は八十二歳で亡くなった。かねがね父は、八十歳まで生きた祖父より長生きしたいと言っていたが、その通りになった。

父は七十八歳のとき危篤となった。当時海外勤務中のわたしは、父は死なないと信じつつ一時帰国した。予想どおり父は回復していた。しかし八十二歳で危篤のときは、わたしは観念した。このとき以来、自分の寿命は自分が決めるらしい、と思うようになった。

長生きの効用は、苦しまずに天寿をまっとうできることだ。わたし自身、いつ死んでも悔いはないが、痛みと苦しみは嫌だ。これを避けるには、健康で長生きすることだ。

しかしながら、生きている以上、生き甲斐を感じなくてはつまらない。そこで自分探しが始まる。わたしの場合、企業を卒業してから、縁があって監査役の研究に取り組んだ。これはなってみないとわからない役職だが、退任すると在職中の不満はどこかへ消える。だからこの制度はなかなか改まらない。それならわたしが改めよう。「人の行く裏に道あり花の山」の心境で、実務家も学者も踏み込まない領域に入り込んだ。

おかげさまで六十七歳のとき、法学博士号をもらった。

この論文が世の中で受け入れられるとしても、まだ先のことである。その後三年経っても、追随する研究者は現れない。このままでは、わたしの研究は埋もれてしまいそうだ。それでは、わたしの力が及ぶ八十五歳までは頑張ろう。

なぜ八十五歳か。かれこれ十年も前のこと、わたしは八十代になったらボランティアをすると占い師は言った。その後、自分のライフサイクルから八十五歳を導き出した。

ところが、七十歳から何をするのか、占い師は触れなかったので、謎である。六十代の十年は過去とのつながりが指摘されたが、あれこれ想像した。いま振り返って見れば、占い師は当たっていた。その後の十年は白紙状態であるが、八十代のボランティアに繋がるとすれば、七十代に何か予想のつかないことを始めることになる。

わたしは七十歳になって身辺リストラを行った。一戸建ての自宅は長男一家に住んでもらい、わたしは賃貸マンションへ引っ越し、かつ、個人会社を設立した。中身はこれからだが、それは知的財産の活用に関連するように思う。会社は克己心の後ろ盾である。

狭くなる住まいへの引っ越しは、過去との惜別を伴う。将来に必要なもの以外は処分しなければならない。ところが自分の将来が漠然としていると、ものを捨てきれない。一回も目を通していない本を二束三文で処分するのは忍びない。洗濯済みの背広も胴回りが合わなければ燃えるゴミである。好きな服だったのに・・・。

人間死ぬとき、あの世へ何も持って行けない。裸で生まれて、なぜこんな物持ちになったのだろうか。持たないでも満足できる仕組みがよい。持つならば、人が魂を込めて作ったものに限定したい。

わたしは八十五歳で事業を引退したあと、自分史を書きたい。中国に「五計」があるという。生計、身計、家計、老計、死計である。いまわたしは、死ぬ準備と生きながらえる準備を進めているが、これが老計と死計というものだろうか。

（二〇〇六・一・八）

「そう急がずともよい」

榎本　喜三郎

どこで求めたものか定かではないが、私が常用している、やや大型の湯呑みに、次のような長寿者の心得が書かれている。

『九十歳でお迎えの来た時は〝そう急がずともよい〟と言へ』『百歳でお迎えの来た時は〝頃を見てこちらからボツボツ行く〟と言へ』

この長寿者なかなか意欲的である。すでに私は最後の文句に近い年頃になっているのだから、ぼつぼつこっちから出向いて行く用意をしなければならないのである。

男性七十七歳、女性八十四歳が平均寿命と聞く。女性が男性を七歳も超えているのはちょっと疑わしいが、周囲を見回したところ、どうやら女性の方は平均してしぶといらしい。近所の長寿者を考えても、女性の方が男性より長寿を保っている人が多い。それも二歳や三歳でなく、とっくの昔に旦那を送り出して、あとは独り身となって時々遊びに来る娘やら、連れて来る孫やらを相手に、楽しい時間を存分に過ごしている。

どうやらこんな風景が我が家の女房殿の目にはうらやましく映っているようだが、そうそう急がずともよいだろうと、私は肚の中で答えている。

ところで、「悠遊」第十三号の募集要項を見ると、特集テーマは『卒サラのＧＮＰ――元気で長生きポックリ』とあるが、この文句に必ずしも共感しない。まず、元気で長生き、をポックリから引き離して観賞する。

この一文が活字になる頃には私も元気なら既に九十二歳になっている訳で、男性の平均寿命を十数年超えているはずである。私よりほぼ十歳若い家内も女性の平均寿命を数年超えており、夫婦揃って超えているのである。

こう考えてくると、老夫婦揃って親からもらった健康な肉体を保ち、今日までさして病気らしい病気もせずに元気で長生きして来ているわけで、まことに有難いことだと、改めて感謝している次第である。

さて、テーマの最後にある〝ポックリ〟はどうか。普段口に出して話し合ったこともないが、この上はさらに

叶うならば、老夫婦二人揃って何年でも健康で長生きした上で、なるべく二人が接近した時点にポックリとまではゆくまいが、せめて残る家族にあまり長い看護の日時を必要としない間に「さようなら」を決めたいものだと願っている。ポックリといえば何か少々賑やかに軽音楽の伴奏でもあればなお結構だろうが、そうは参らずとも、夫婦揃って、残る家族たちに、看病もほどほどにしてもらった上で、手を携えて、「ではさようなら」と逝けたら、冥加に尽きると思っている。

だが実際問題としては、そう望み通りにはことは運ぶまい。いまのところ私も家内もともに壮健で、持病らしい病気をもっていない。しかし、これから先二年、三年と年を重ねたらどっちか一人が病の床に就くことになろう。そうなると、もう一方が看病に回るわけだが、考えてみると、結婚してからすでに六十年を超す長い月日がある。結婚当時は、まさか我々夫婦が、これから六十年余り一つ屋根の下で暮らすとは考えもしなかった。イギリス、タイ、インドなど数カ国の外国暮らしの十数年も含めて、二人は離れることなく共同生活を送って来られたのだから、まことに予期しない長寿の共同生活を楽しんで来たことになる。なんともありがたい話である。

ところで、看護生活というと、すぐに湿っぽい、嫌な情景が思い浮かぶが、私は必らずしもそんなものではないと思っている。さてどんな看護生活ができるか、せいぜい私自身健康に留意して、六十余年ただ一人の伴侶だった家内と最後の何年かの共同生活を濃密に送りたいと願っている。

卒サラのGNP心得帳

大泉　潤

人生をトラック競技にたとえれば、就学勉強の時期が第一コーナー、サラリーマン下っ端の時が第二コーナー、管理職が第三コーナー、卒サラが第四コーナーとなる。第四コーナーとなった今、まずは健康、ボランティア活動で社会参加、知的刺激、余裕をつくり自己実現の事業挑戦を試みている。

一　一橋植樹会

ボランティア活動に参加すると、気力が充実し、気品を持って動き回るグループと出会い、元気を注入される。母校キャンパスの環境整備に向けてOBも動き出した。数十年の間、無目的に植樹され、草木の生い茂るに任せて、ジャングルと化したキャンパスを整備するべく大学も重い腰を上げた。東京農工大学植物学の泰斗福嶋司博士の指導を仰ぎ、キャンパスを庭園、植栽、武蔵野、自然林、草地の五ゾーンに分け整備作業を行う中期計画を作成した。武蔵野の立地を生かし、都会の騒音から離れ、教育、研究にふさわしい環境を取り戻そうとの計画である。心ある教官とOB、学生が話し合いをして、二年前から月に一度作業を行うこととなった。毎回、教職員、学生、OB計約六十人が集まる。OBの平均年齢は六十五歳を超えている。大学の集会所に集まると、まずは久闊（きゅうかつ）を叙し、近況報告して、作業服に着替える。参加者の会費の拠出と大学で準備した草刈鎌、のこぎりなどを持って、作業場所へ移動する。けがの予防に準備体操を十分に行い身体をほぐす。雑草の除去、いたずらに長い枝の伐採、ゴミの収集を行う。刈り取った枝葉は積み上げて堆肥にする。大きな幹は切り取ってベンチに、木っ端はぬかるみにまき、歩きやすくする。作業を始めると、気性がよく分かる。気力充実し、ゆったりしたグループは作業がはかどる。歌を口ずさみながら鎌を振るい、見る見るうちに奇麗になってゆく。刈り取った草も枝もきちんと積み重ねられている。作業の合間に汗を拭き、周囲を見回すと、春は桜、秋は紅葉、ススキを愛で、池に憩うカルガモに目を細め、ある時は奥深く自生する自

然薯を掘り出し、反省会の乾杯のつまみに取っておく。汗を流した後は缶ビールで乾杯をし、談論風発となる。海外旅行、健康、孫の話題に尽きることがない。

縁あって一橋植樹会の役員の末席を汚し、作業班長を務めることとなった。約十万坪のキャンパスとそこに生える雑草の生命力とは長い戦いになると思いつつ足を運んでいる。

二　人工芝ラグビー場

私はラグビーと深くかかわってきた。ラグビーは格闘と高度の身体能力、技術を必要とし、節度と犠牲的精神を培う団体スポーツであり、堂々たる社会人にふさわしいスポーツであると信じている。大学、会社、オール三菱のチームでプレーし、会社卒業後は日本ラグビー協会で事務局を務めた。国の内外に素晴らしい友人を得たし、ラグビーインフラの整備も、いとぐちができた。幸い辰巳練習グラウンドの建設、秩父宮ラグビー場の電光掲示盤が完成した。その経験を生かして、母校ラグビー場の人工芝設置に取り組んでいる。英国で十九世紀前半に発祥したラグビーは本来芝生でプレーするものである。スクラム、タックル、セービング、スワーブなどの基本技は芝生の環境を必要とする。だがコスト高で天然芝グラウンドは一部有力チームに限られていた。一般チームは土のグラウンドで、雨で泥田、風で砂漠の環境であったが、五年前に人工芝が開発され、普及し一変した。ビッグであるが、ＯＢ五百人が浄財を持ち寄れば手の届くプロジェクトである。発議した縁でプロジェクト委員長を務めることとなった。数年後に整備されるであろうグラウンドを脳裏に描き、東奔西走している。

三　その後

また知的刺激も欠かせない。歴史書の読書はゲームの謎解きに似て面白い。メディアの報ずる世界の事象を理解する時に、地理、歴史の知識があると知識の空白が埋まって行く。

死ぬ時は、禅寺の高僧がおっしゃるように、安らかに行きたい。天命を感ずるときに食を断つそうである。迷惑を掛けず、家族に見守られて眠るが如くに息を引き取りたいと念じている。

見果てぬ夢「GNP」

岸本　義生

私は現在、胃がんの経過観察中です。昨年十二月の老人健診で、いつものようにバリウムを飲み、異常はないということなので安心して帰宅した。このホームドクターは、某大学病院の消化器外科の出身で私も信頼を寄せており、何でも話し合える間柄です。

ところが年末ぎりぎりになって、ドクターから呼び出され、出来上がったフィルムを見せながら、「異変がある」と指摘された。前年のものと比べると、一カ所が白くなっており素人が見てもおかしい。大学病院は正月休みだし、とにかく年明けまで待たねばならない。正月の祝いもご馳走も砂をかんでいるようなものであった。もし、ガンならどうしようかとの思いが駆け巡る。

年明けを待ちかねて大学病院で胃カメラ検査を受けたら、正真正銘の胃がんであった。幸いなことに一センチあまりの初期がんで、しかもまだ胃の粘膜内にとどまっているらしく、開腹せずに内視鏡で摘出することになった。医学的には「内視鏡的粘膜切除術」と呼ぶそうです。

入院後、他の部分への転移のあるなしをはじめ、いろいろと検査をされた後に、摘出手術を行い十日後に退院した。ただ取り残しがあるかなどの細胞検査を行い、それから以降も六月、十月に胃カメラ検査を行いました。

いまのところ異変はないとのことですが、検査は来年も定期的に続けるので、その都度、「大丈夫かな」と当分の心配は消えない。私は親父を胃がんで亡くしている。親父は手術を拒否して薬物療法を続けたが、三年で終焉を迎えた。その時の苦しみの様子は大変なものであった。

この一年の間に乗物でよく席を譲られるようになった。今までは席を譲られないのは、自分が元気に見えるからだと納得していた。ところが最近は、別に日本の公共道徳がよくなったとは思えず、自分が第三者から見て弱々しい年寄りになった証拠かもしれない。

どうも弱気になったせいか、新聞の死亡欄に必ず目が行く。六十代や七十代前半では早死にと思い、八十五歳ぐらいで仕方がないかなと考える。日本人の平均寿命は

年毎に延びて、もはや八十代でなければ、後期高齢者と呼ばれない世の中がそこまで来ているように思えます。

さまざまな死因の中で、いわゆるポックリと旅立った人もいるだろう。私の周辺でもポックリなくなった事例は十指を超える。このような最期を迎えることは万人の望むところではありますが、希望してかなえられるものではありません。

それにしても、認知症だけにはなりたくない。テレビなどで紹介されている状態を見ると実に厄介なものです。本人は自覚がないから楽かもしれないが、世話する人の苦労は計り知れない。これを避けるのは、脳に刺激を与えることらしいが、とにかく囲碁をやったり、また俳句、川柳なども一つの方法かもしれないと、ペンクラブの厄介になっている。いずれにせよ、何時、終末を迎えてもよいように遺言は書いた。

私も七十八歳を迎えた。この十二年の間に喉頭がん、狭心症などの難病とつきあってきたが、今度は胃がん。前世の悪行の報いかも知れない。それは別にして、最大の理由は現役時代が健康に恵まれたため、数々の妻の警告を無視して無茶をやった結末でありましょう。

しかし、日本人男性の平均寿命近くまで生きて、人生を楽しんできたのも、よくよく考えると、すべて妻の犠牲や苦労の上のことなのです。自分が働いてきたから、今日があるという思い込みは虚構でありました。今回の胃がん騒動で妻とはよく話し合える機会が増えたし、本当に頼れる者は妻しかいないことが分かった。

妻はマイタケを毎日食べていたら胃がんが消えた、という話を友人から聞いてきて以来、毎日のようにマイタケを買ってきてくれるのには頭がさがる。何でも「任せた。任せた」と気楽に過ごしてきたが、これでは責任を負わされた妻は、たまったものではありません。妻は永遠の部下でもなければ、壊れない洗濯機ではないとの言葉が身にしみる。

この年になってこのようなことに思いを致すのは、恥ずかしくもあり情けないことではありますが、もつと妻をいたわり、妻の負担を軽くして余生を過ごしたいと思う。これが私のＧＮＰであります。

（二〇〇五年十二月記）

秘密結社〝M5〟

北田　純一

ポックリ死は神の領分、ゲンキで長生きも幸せでなければ意味がない。

昨年九月、わたしは満七十七歳を迎えた。息子夫婦、娘夫婦、それに孫たち、家族全員そろって喜寿の宴を祝ってくれた。息子からはJTBの旅行券、娘は宮内庁ご用達の老舗に特注したという炊き立ての赤飯と銘菓を持参してくれた。孫たちからは花束をもらった。店のオーナーも気を利かして従業員にハピーバースデイを合唱させ、バースデイ・ケーキを贈呈してくれた。

帰宅後、妻がしみじみ言った。

「あなた、わたしたち幸せよ。子供は二人ともゲンキで親孝行、孫も五体満足、成績がいまいちらしいけど、そのうち欲が出て大化けするわよ。わたしもゲンキ、みんなそろって大ゲンキ。〝しょぼくれ〟はあなただけ、もっとゲンキ出して安心させてくださいな」わたしは言いようのない幸福感に浸りながら答えた。

「まったく同感、そのとおりだ。万病のつど面倒かけて済まなかったね。これから気をつけるよ。しかし、手遅れかな。飼い主さま」

ペンクラブの俳句の会は神田の学士会館で開かれ、そのあと斜め向かいの如水会館で反省会を楽しむのが通例になっている。昨年十二月の会では、わたしが話の種に重粒子病院での肺がん治療の結末を報告した。

「十一月に一年半目の精密検診で一泊二日の入院をしました。昨日はその結果を聞きに外来に行きました。むかしは看護士が検査データを持って来たものですが、いまは先生がパソコンで壁面パネルに呼び出します。先生はデータを示しながら

『よかったですね。骨転移なし、脳転移なし、血液検査値も正常、CT写真も右側の治療前と比べてごらん。がんの陰は消えました。ちょっともやもやしているのは病巣周辺の肺炎のあとです。しかし、これで完治とは言えません。現在の医学では細胞単位の転移までは発見出来

ませんから、あと二年、できれば五年ぐらい様子を見て、それで転移がないようなら完治でしょう。とにかくおめでとう』

『ありがとうございます。しかし、おめでとうと言われても、わたしも歳ですから年々衰えます。がんがなくても五年は危ないですよ』

『それは心得違い、君は研究費つまり国費て治療を受けたでしょう。五年は生きてくれないと生存率データがとれません。国民の税金を使った以上、もう五年ガンバルのは善良なる国民の義務です』

なんて言いくるめられて、もう五年を義務にされちゃいました・・・」

これを聞いた俳句の平間先生がすかさず

「そうですよ、北田さん。わたしはもう八十一歳ですが、九十まで、できれば百まで生きるつもりよ。あなたも五年ぐらい頑張らなくっちゃ」

というわけで、帰途、神田一橋の橋上、改めて平間先生と握手を交わし、秘密結社〝M5〟（もう五年長生き商会）を結成する羽目になった。

この顛末を重粒子病院のことでいろいろ世話になった小川君（ペンクラブ元会員）に話したところ

「それはよかった。あの病院は初めから五年は生きられそうな患者を選んで治療しているそうだから、当然と言えば当然だよ。つまり君の〝M5〟は義務であると同時に国家保証ってわけさ」

と勇気付けてくれた。

国家保証つきなら何とか平間先生との約束を果たせそうだが、それにしても八十歳を過ぎて斗酒なお辞せず、句会と聞けば日本はおろか世界中を飛び回るゲンキな婆さまには参った、まいった、脱帽のほかはない。

ところで、〝M5〟は秘密結社だから、もちろん会員名簿も会則も公表しません。それでも入会したい方は自分で勝手に「もう五年は生きる」と心に誓ってください。きっと神様がお認め下さるでしょう。

もう一つの「GNP」

金京　法一

最近「老人の3K」なる話を聞いた。3Kとは「固執する・きれる・キタナイ」のことだそうである。年金でのんびり暮らせばよいのに、いつまでも現役気取りで、仕事らしきものを追いかけたり、作家気取りで物を書くだけでなく、なんとか出版をと相手かまわず押しかけてゆく。金に絡むことを取り仕切っているのは現役世代で、弱い立場の老人達は最初は頭を低くし、以前身につけた営業笑いを振りまいてやってくる。しかし具体的なことになると執拗に自己主張を繰り返し、意見が通らないと突然怒り出し、暴力の一つも振るわんばかりの剣幕であったりする。年金生活者ゆえ、やや古ぼけた身なりは仕方がないとしても、久しく洗濯していない、臭そうな衣服をまとい、登山帽子に汚れたスニーカーでやってこられると、同室の人々の目が何となく気になり、応対する方が肩身の狭い思いをすることもある。しかも、お金にキタナイ。現役世代からこんな話を聞こうとは思わなかった。すべて老人が悪いなどということではなかろうが、現役世代の世界に割って入ろうとする老人達が煙たがられたり、疎んじられるということであろう。

「卒サラのGNP—元気・長生き・ぽっくり」というテーマが与えられた。最後まで元気で暮らし、ある時ぽっと消えて亡くなる人生は大方の人にとって一種の理想的なスタイルかもしれない。長患いをしなければ家族や周りのものも助かる。しかしちょっと意地悪な見方をすると、これは現役世代側の「平均寿命が延びて長生きされるのは仕方がないが、死ぬまで自分のことは自分で始末し、若い世代には迷惑をかけないで欲しい」という残酷で卑劣な願望を、また老人側の「どうせ現役世代にとって老人は厄介者であり、あんな連中の世話にはなりたくない。自力で生き続けてある日突然消えてしまいたい」というやけっぱちな願望を表わしているのではなかろうか。しかし「元気で・長生き・ポックリ」などという生き方は願ってもめったにかなえられない。そうでないの

は困るといわれても困るのである。多様な生き様死に様があるのは人類誕生以来のことであり、人間の生きる権利の問題でもある。

同じＧＮＰでも「頑固・のーてんき・パラノイア」はいかがであろうか。人間は本来自己中心的な存在である。ただ生存のためには他者との関係を断ち切るわけにはいかず、その限りにおいて自我を抑制しているに過ぎない。働かなくても年金で生活できるようになると、他者や自分に無関係なことには関心が薄れ、その分密かに得意だと思い込んだり誇りに思っていることに執着する。現役時代のことをいつも自慢したり、下手の横好きなどその類であろう。

今から二十年以上前、浅田　彰の『構造と力』という本がベストセラーになった。大学新入生向きの教養本として書かれたのであるが、哲学の解説書としても面白い。結婚したら一生連れ添い、一つの事に全力を注いでその道で大成することこそ美徳とされるが、こんなパラノイア的（偏執狂的）な生き方はどこかおかしい。世界もそこに住む人間も差異と反復の流れの中にあって刻々と変化して行き、決して一カ所にとどまらない。この世界でふさわしい生き方はこうした変化に敏感に対応したスキゾイド的（精神分裂症的）な生活パターンであると。

卒サラといえども、スキゾイド的な生活態度は必要かも知れない。しかし、しんどい話でもある。パラノイア的だと揶揄されようとも、何か一つの事に執着している方が安心である。ただ３Ｋ老人などとは言われたくないが、こっちの方は社会性を失わないように心掛ければ何とかなる。その上で頑固といわれようが、のーてんきといわれようが、パラノイアといわれようが、自我を押し通して生きてゆこう。精神的に満足感のある生活を送れば、案外「非常に元気で、うんと長生きし、最後はポックリ」かも知れない。

熟女のお説教

関谷　裕彦

定年、イコール卒サラになったのは六十歳になった十三年前、そこであまり深く考えずに、自分の長年いた業界から飛び出して、新しいところへ飛び込んだのがいわば苦労の始まりだった。

三十五年十カ月という外資系海運会社勤務は確かに短くはない。なにかこの機会に新しい事をという冒険心もあった。仕事を離れたのが月末の金曜日、送別会をすまして、月曜日から新しい仕事に出かけた。

出来たばかりの小さなマンションの一室。従業員は三人。海外留学生相手の紹介業務。いろいろ話は舞い込んでくるが、なかなかものにならない。肩書きだけは、社長、常任理事などと体裁はいいが、たいした仕事もない。それでも半年もやっていたら、少しずつ目鼻がついてきたから妙なものだ。湯島のビルに新事務所を借り、それがちょうどサリン事件の当日で、危うく巻き込まれるところだったのを間一髪で逃れ、結構広いワン・フロアに五・六人のナースを集めて電話の医療相談をやる事になった。これはそこそこ面白かった。ちゃんとした医者が交代で出て来てかなりしっかりした組織になった。毎月少しずつ相談員がふえ、関西にも出店、相談員も二十人を超えた。一年に二回ぐらい温泉へ社員旅行で出かけることも出来るようになった。その間健保組合の役員などもやったので、いくらか余裕も出来、まだ六十代半ばだったから、体力もあった。人生バラ色とまではゆかないまでも、そこそこ楽しかった。

だが、それも七十になるまでだった。正直言って、私にとって「七十歳を超える」ということは、格別どういうことはないと、自分では思っていた。

同じように夜が明け、前の日と同じように勤めに出て、体調も変わらない。どうという変化は全くないのである。他人がいろいろ騒ぐのがおかしいと思った。

意外に山っ気が多くて、人のやらないことをやってみたくなる。外国勤務の経験もあるだけ、外国で暮してみたいとも思った。その辺で精神的に回り道をしたかも知

れない。昔流行(はや)った梅干の歌ではないが、「皺がよっても若い気で」と浮かれていたのが、いけなかったのかも知れない。

七十歳を過ぎ、しばらくすると、周囲の状況が徐々に変わって来た。まず長年関係していた健保組合から追い出され、老人健保に移された。

さらに勤め先の法人の監査がいろいろ厳しくなり、「いつまでも年寄りが役員として居座っているのは好ましくない」などというようなアドバイスがあったらしい。年寄りなんていやな言葉だが、自分がそう呼ばれていることには気がつかなかった。「冗談じゃないよ。日本はこれから高齢者社会に向かっているんだ。どんどん高齢者がふえてゆくのに。ぜんぜん分かってないんだなあ。まったく目先でばっかり動くんだから」と憤慨しても、どうしようもない。

さらなる問題は異性の友人たちであった。皆調子はいいのだが、なんとなくよそよそしくなって来た。まず若い女性が飲むのに付き合ってくれなくなった。年寄りと飲んで、ころっといかれたら困るということらしい。なぜ六十九歳がよくて七十歳がだめなのかとぼやいても仕方がない。

私には、年上の熟女の友人が結構いた。だがこちらの方は先方がつつましやかに身を引き、「あなた、もう七十におなりになったんだから。いつまでお若くはございませんのよ。お気をつけあそばせ」と説教される羽目になった。これには正直参った。

別に「それがしは七十歳でござい」と看板をぶらさげているわけではないのだが、どうもなんとなしに知れ渡るらしい。事業を計画しても、銀行がこちらの年齢を聞くと、いい顔はしない。このへんが日本の妙なところだ。自分が死ぬということは、ほとんど考えたことはない。もちろんいま流行のゾンビ的よみがえり術にこっているわけではないし、明日なにが起こるかも分からない。それでも別にこわいとは思わないし、どうしようという気にもなれないのは不思議である。

長年志した中学、高校生への英語教育に力を注ぎ、長生きして、後はピンコロリとあの世行きだ。

元気で長生きは幸福か

都甲　昌利

このテーマは私たちのような高齢者が理想の生き方あるいは死に方を取り上げていると思うが、それ以上にさまざまな問題を含んでいると思う。

先ず第一に、こんなことを考える人々はたぶん恵まれている老人だと思う。大地震や水害にあった大勢の老人たち、あるいは貧しくて働かなければ生活できない老人は「元気で長生きしてそしてポックリ死にたい」などと考えるだろうか。彼らは、元気で長生きどころか、ある日突然、自分の意図しない死に直面してしまっているのではなかろうか。そういう人々は「現在をいかに生き抜くか」という発想しかしない。彼らは元気で長生きをしたいのであるが、客観情勢がそうした生き方を許さないのである。安心して長生きできる環境がなければ、長寿社会は意味がないといえる。

そういう人々に思いを馳せるとき、私の周囲にいる者たちの現在の生活がいかに恵まれ、また日本という国がいかに豊かで平和なのだろうとつくづく思う。

その恵まれている高齢者の私自身は健康ではいたいと思う。しかし、いつまでも元気でいたいと毎朝早く起きてトレパンをはいてウォーキングやジョギングをしたいとは思わない。医師の勧めや自分の信念から、忠実にそれを行った友人がいる。数年前、がんにかかり養生を続けていたが、遂に今年二度と戻らぬ人になってしまった。彼は確実に九十歳くらいまで生きるだろうと思われていたのにである。元気で長生きはいくら努力しても出来るものではない。

元気で長生きできる老人はほんの一握りに過ぎず、多くの老人は貧苦と病苦にあえいでいるのが実情だといえないだろうか。

老人が長生きして喜ぶのはだれだろうか。だれも喜ばない。川柳で「年寄りは死んでもらおう国のため」とあったが、これは我々年金世代を支えている若年層の皆が思っている本音だろう。しかし、こんなことを言ったら

「非情な人間だ、思いやりがない、老人を敬う心が欠如している、人命軽視だ」と非難されるので、マスコミは言わないだけなのだ。

もしも現在六十五歳以上の老人がいなくなったら、日本の年金制度や医療問題、あるいはまた介護の問題は解決するだろう。政府の呼びかけにもかかわらず、若者の年金未納者が増加して年金制度は崩壊しようとしている。健康保険料の払えない階層の増加で政府は毎年五十数億円もの税金をつぎ込んでいる。

冒頭に「元気で長生き」は数々の問題を含んでいると述べたのはこういうことなのだ。

ならば「元気で長生き」より「出来るだけ早く楽に死ねる方法」を考えるべきだと思う。現在の日本や世界は長生きに値する世界かと問いたい。ますます暮らしにくくなる。SARS、鳥インフルエンザ、医療事故、狂牛病肉、水汚染、旅に出れば航空事故や鉄道事故、それに増税、そんな世界に住みたくない。若者たちが暮らしやすいようにしてやるべきだ。人の価値は長く生きたからで決まるものではなく、生前世の中にどれだけ貢献したかで決まるものだと思う。

楽に死ぬ方法はあるのか。ポックリ死ぬにはどうしたらよいか。前の晩は元気だったが、次の朝死んでいたという話を聞く。これはまれなケースで万人には当てはまらない。

最近読んだ書物の中に禅宗では「座脱立亡」という理想の死に方があるという。「座脱」というのは座禅をしたままずっと息を止めてこの世を去ることで、「立亡」とは立ったままで息を止めてこの世を去ることだという。昔の高僧は死が近づくと自ら薬も食事も水も断ち静かに死んでいったという。

悟りを開けない私のような凡人は果たして出来るか。出来ないとなれば、あとは安楽死か、尊厳死だ。日本ではまだ認められていない。どうすれば楽にポックリ死ねるのか。

ボケ老人になり介護施設で介護師に殴られ椅子に縛られたり、病院でたくさんの管を体中につながれて苦しんで死ぬようなことには絶対になりたくない。

ピンピンコロリ

中川路　明

喜寿間近の級友数人と昼食会を終え、珍しく早く家路についた。まだ陽は高い。

「お天道様が西に沈む前に、仕事をやめると、罰が当たる」。悠々自適のいまの身に、親の教えは遠い昔だ。

十年ほど前までは、持ち前の好奇心で前だけを見据えていた毎日だった。最近は孫の来訪も次第に途絶えがちで、余った時間に「そろそろ身辺整理かな」と気になりはじめた。山積みの書類、いつか役立つかと集めた資料、棄てずに並ぶ本、部屋を見回すとゾッとする。

そのとき、ある高僧の法話を聴いた。「命が尽きたときに、身の回りがきれいなようにと、後片付けをする人がいます。だんだん残りが少なくなってきた大切な時間に、後ろを振り向くのはもったいないです。それまで蓄えてきた自分の力を、最後の日まで前向きに発揮することが最高です。他人に迷惑を残してはいけませんが、余ったものは全部焼いてもらえばいいのです」。

迷いから覚めた。ピンピンコロリだ。いつまでも元気で、病まずにコロリと死ぬようにと、昭和五十四年に、伊那にある日本一の長寿村ではじめた運動である。長生きが当たり前で、いかに上手に死ぬかが心配になった今日、全国的に広がっている。

死ぬだけではない。山あり谷ありの人生で、努力しても突然目の前に遮断機が下りる挫折もコロリと考えた。思いっきりやって、潔く終えるコロリを、私はこれまで二度経験した。

元気に育つかと幼児期心配されながら、学校に上がってラグビーにめぐり合った。熱射で倒れてやかんの水を浴び、頭を激突し記憶喪失で夢遊しても、球を追う悔いのない日を送った。五十歳を迎えて、軽い運動のテニスに転じたある日、突然心臓欠陥を指摘され、運動一切を禁止される。半生築いてきたスポーツの楽しみが消えた第一のコロリだった。

病魔なんかに負けるものか。フィットネスクラブでのリハビリが有効だった。新規まき直しと、日本初のタッ

チパネルの開発に専念した。現在では、銀行のＡＴＭをはじめ、販売機などあらゆる分野で盛んに使用されているが、当時は電機機器会社にセールスに行っても、価値が理解されず相手にされなかった。夜打ち朝駆けの売込みで、徐々に新しい用途は広がったが、基本的な特許が取れず、後発の安売りに押され利益が出ない。

「化学会社にエレクトロニクスは無理だ」と、上層部は事業を断念した。社長だけが理解を示し、「お前に自信があるなら、事業性が見通せるまで別会社に分社してやってみんか」とチャンスを与えてくれた。

脚光を浴びるパソコン用に集中することとし、画期的な技術を開発、昼夜の別なく世界中を駆け回った。自転車経営を続けながら、研究所の試作から育てた事業を、終生の仕事と頑張る。ただ残念ながら還暦も過ぎ、取り戻した健康にも限度がある。ようやく日本のパソコン業界が黎明期を迎え、この分野に明るい後輩に思い切ってすべてをゆだねた。終わってみると、第二のコロリだ。

「もうサラリーマンは結構だ、研究や開発の技術とも離れよう。まだ手がけていない日本語の道にチャレンジしよう」。三度目は定の目と言うではないか。

早速、「話す」はＮＨＫ話し方サロンに、「書く」は企業ＯＢペンクラブに入り、先輩の後を追った。話し方サロンは十人ほどの仲間で、「こんなことがありました」の一分間スピーチ、「男と女」、「子どもの教育」などのコラムと、各人の個性溢れた会話が楽しい。ペンクラブは海外経験豊かなＯＢたちの各世界にわたる多面的な話題、面白話に花が咲き、エッセイ作りの発想の泉となる。

世の中に少しはお返ししたいと、年金コンサルタントの奉仕を始める一方、リハビリとピンピン維持のためのスポーツ・ジムを加え、最終ラウンドの方向は決まった。適度な活性化の刺激を受けながらの気ままな毎日は、無理がなく体力相応である。悩みと言えば、有用性を増すパソコン利用に追随できない不甲斐なさである。

息子夫婦はもちろん、孫もすでに先を走っている。後は迷惑をかけないように、ピンピンコロリの日まで好きな道を走り、頓死することを願うのみだ。高齢女性を一挙に舞い上がらせた「冬ソナ」のように、今年は高齢男性の好奇心を掻き立てるときめきを期待している。

長生きできる社会

野瀬　隆平

「目指せGNP大国日本」。といっても、今よりも経済大国になるべきだと主張しているのではない。ここでいうGNPとは、いわゆる国民総生産のことではなく、シニアの人たちが理想として掲げている元気（G）で、長生き（N）そしてぽっくり（P）のことである。

シニアの人たちが、理想としてこのGNPを望むのは、しごく当然である。一方、日本の社会全体から見るとどうか。「GNPも良いけれど、少子高齢化が進む日本において、長生きされるのは大いに問題である。むしろG、H（はやく）、Pの方が良いのだが…」という次世代からの本音とも思える陰の声が聞こえて来そうだ。

では、個人としてGNPを追求することが、健全な社会のありようと本当に矛盾するのか。お互いの存在を必要とし合う、良い関係を築き上げることはできないのか。そのような社会の仕組みは可能なはずであり、何とか実現したい。最初に掲げた命題は、このような社会に構築し直して、世界に誇れるような日本を目指したい。そんな思いを込めたものである。

さて一つ目の元気であること。これは議論するまでもなかろう。健康でいることは、膨張し続ける医療費の削減に寄与するだけでなく、介護などで社会に迷惑をかけずに済む。個人と社会の利害が一致するところだ。

問題は長生きである。確かに社会保障費が増大するなかで、これ以上長生きするとさらに負担が大きくなり、今の制度のままでは立ち行かなくなる。

しかし、人が長生きすれば、健康である限りそれだけ社会に貢献できる時間が長くなることを意味する。新たに生み出される膨大なシニア層の力を、大いに活用しない手はない。少子化が進み人手不足が予測されるこれからの日本では、ますますその必要性が増してくる。彼らが社会で活躍しやすい環境を整え、これを促進することが肝要である。少子化対策もさることながら、即効性があるこちらにこそ、もっと力点を置くべきだ。シニアの側から見ても、働く場に生き甲斐を見いだし、元気をも

らうことができる。正に社会とシニアとの間に、共にメリットを享受し合える良い関係が保たれる。

具体的なアイデアとして、例えば、今盛んにいわれている小さな政府を実現するにあたり、公務員を削減して代わりに退職後のシニアを活用してはどうか。フルに働くのではなく半日、あるいは週に二、三日、半分ボランティア的に仕事をしていただく。高度な専門知識が必要な職務は別として、短期の研修でできる仕事を、体力と適性に合わせて選択する。それは、役所の窓口業務かもしれないし、作業現場での技能を生かした仕事かもしれない。税金を支払う代わりに、このような形で社会への義務を果たすという方法があっても良い。

話は少々脱線するけれど、国民皆兵制ではなく、「国民皆公務員制」を導入し、若いときにpublic servantとして、国や地方自治体で一定期間働く制度を提唱したい。こうした体験は、若者に社会を学ばせるだけでなく、将来シニアになって、社会奉仕をする際にも役立つ。

さて、最後のP（ぽっくり）は難題である。健康を保ちつつ長生きすれば、結果的にあまり迷惑をかけずにぽっくり逝ける確率が高くなるとしかいえない。

このぽっくりで思い出す出来事が一つある。その人は、六十歳代のなかば、ちょうど今の自分と同じくらいの歳であった。定年退職後、元気に自由を謳歌していた。夫婦で海外旅行に行くこともしばしば。事件はツアーの途中、ハンガリーの首都ブダペストで起こった。一日の観光を終えてホテルで会食中のことである。急に心臓が苦しくなり倒れた。すぐさま救急車で病院へ。診断の結果、「すぐ手術をしなければ助からない。ただ、手術して助かるという保証もできない」との医者の宣告。同行していた奥さんとしては、「手術をお願いします」というしかない。残念ながら結果は凶に。数時間前まで元気に旅を楽しんでいた人が、あの世に旅立ってしまった。奥さんが語学に堪能で、商社勤務の長男もアメリカから駆けつけ、何とか面倒な事後処理を終えることができた。

その人とは、実は私の兄である。その年頃になって、自分もひょっとしたら、とそんな情景が脳裏をかすめることがある。多分一緒に旅をしているであろう家人には、大いに迷惑をかけるかも知れぬが。

それぞれの「ひとり芝居」

平尾　富男

「八十は老いの序の口冬若葉」は、九十八歳まで生きた島田正吾が傘寿のときに詠んだ句である。

この新国劇の大御所が、九十六歳で突然脳梗塞に倒れたのは平成十四年のことだった。八十五歳になってから始めた「ひとり芝居」シリーズを新橋演舞場で演じていた頃のことである。その二年後に亡くなるまでの間自宅でずっと療養・リハビリを続けながら、「ひとり芝居」は九十九歳まで続けると言って、台本を書いていたという。さらに百歳からは新作にチャレンジしていこうとの熱意を持ち続けていたというから驚きだ。「生きているだけでめっけ物」というような人生ではなかった。何時までも芝居をやるつもりだったのだ。羨ましい人生である。芝居は「ひとり」で演じても、多くの観客を得て、一緒に人生を共有できたのであるから。

普通のサラリーマン卒業生は、何時までも現役であり続けた舞台俳優の島田正吾を手本にするわけにはいかない。彼らの多くは、大勢で演じる仕事（芝居）がすべてに優先された。家庭のことは奥さん任せ、趣味や息抜きも会社の同僚や先輩・後輩と一緒だった。だから、定年で会社（舞台）を離れると途端に自分の居場所がなくなってしまう。

まだまだ若い気でいるから肉体的には元気なのである。毎日が日曜日、時間はたっぷりある。ところが、何か無駄に一日一日が過ぎていくような気がしてならない。会社に縛られない自由な時間を与えられているのに、その自由を自分のものにできていない。特に為さねばならないことがない毎日が始まって、家庭の中でもただ食べて寝るだけの無用な人間になったような気がする。

こうなったら、一見元気そうな身体でも長い間無理を重ねた肉体だから、些細なことから病気に負けてしまう。目的のない人生、共通の話題を持った仲間が傍にいない生活を送るうちに、心身ともに活気が失われていき、誰も観てくれない空虚な「ひとり芝居」が始まるのだ。

日本人の平均寿命は男女ともに世界一というから、定

年後の人生もきわめて長いわけである。私の周りにも、あちこちの肉体部分の綻(ほころ)びを繕いながら、長い定年後の生活設計に苦労している友人・知人が多くいる。

人は誰しも元気で長生きをしたいと願う。丈夫な身体を親からもらい、これまで大きな病気一つ経験しなかった友人たちの訃報を突然知らされると、明日は我が身かと思わずにはいられない。定年後数年で「ひとり芝居」を演じる間もなく終える人生もあれば、家族や周囲の人の世話になりながら病床で、何時終わるとも知れない「ひとり舞台」を送る人生もある。長く生きながらえる人生か、突然に召される人生のどちらかを、人は自分で選ぶことができないので、与えられた余命を、どのように生きるかの覚悟ができているかが問題なのだ。

「友人は三人いれば十分」と欧米人は言うようだ。べったりとした人間関係を好む日本人に対し、家族の中でも常にある程度の距離を置く彼らの生き方には「個」が確立しているので、日本人よりも孤独に耐えられることが多いのであろう。そうはいっても人間にとって、特に齢を重ねていくうえで、最も避けねばならないことは孤独だと思う。それは鬱病をもたらし、見物人の居ない「ひとり芝居」の中で、ボケを早めてしまうだろうから。読書や音楽鑑賞なども孤独から逃れる方法だという人もいる。しかし、それらから得る楽しみを「人」と分かち合う、そのために多くの仲間と係わり続けたいと思うのが自然ではないだろうか。それも男女を問わず、あえて老若も問わないで。

サラリーマンは、そのときが来れば否応なく自由という名の空虚の中に放り出される。もちろん、来るべき定年に備えて早くから準備をした人たちも多くいる。この人たちは、定年以降の人生こそが、本当の人生とばかりに、充実した時間を謳歌している。何時死んでも良いと思っている。余命の中で「自分の書いた芝居」を演じ、そして観てもらっているという自覚があるから。

それぞれの「ひとり芝居」を一緒に演じる仲間を持つこと、観てもらえる場を作ることに成功した人々の中に卒サラの生き方の理想を見ることができるようだ。ただし、心身の健康に恵まれる努力をしての話である。

私の「ひとり芝居」はどんな幕切れとなるのだろうか。

不意のお迎え

藤岡　豊

井田君がこの世を去ったのは今から二年ほど前、折しも桜の散りかけた四月下旬のことである。中学、高校を通じて同じ学校に通い、一緒に遊び続けた私にとって、まことに辛い別れであった。

電機会社を定年退職した後、彼は暫く東京に住んでいたのだが、その後は故里の神戸に戻って自適の生活を送っていた。何年振りかでその地を訪れた私は、彼の笑顔の写真を霊前にして思わず息を詰まらせる。そして息子の康夫君から次のような話を聴かされて、まさに驚きいるばかりであった。

というのは、彼は肺がんに冒されていたのである。そして家族は医者からこれを告げられた。奥さんにとっては大変な衝撃であったと思うが、それを表に出すことなく、泰然としていたそうである。医者の判断によれば、彼の余命は長くて二、三年、早ければあと数カ月しか持たないとのことであった。

しかし、本人には伏せられていた。これを告知するとショックを与え、死期を早めることになりかねない、というのがその背景にある。とは言っても、周りの様子から彼は察していたようである。

病院は治療を続けたが、彼はこれを「延命治療」と判断していたらしい。特に気にしていたのは、意識がはっきりしている間はまだよいものの、これがいずれ失われ、今後何カ月も、あるいは何年もの間、意識のないまま生かして置かれるのではないか、という懸念である。例えば、一人で食べることもできないばかりか、呼吸することも排泄することもできず、意識のないままただの植物人間として生かしておかれるなど、到底受け入れる訳に行かない。

また別の見地からすれば、医者はこの植物人間を実験として扱うのではないか、という見方もある。つまり医学の向上のために患者を「生けにえ」にしている、とも言えるのではなかろうか。そんな扱いを受けるくらいなら、とっくに死んでしまった方が、早くお迎えに来ても

らった方がまし、と思うのも当然である。

そこで彼は医者に言った。

「治療はもうやめてくれ」

しかし、医者はいうことを聞かない。というのは患者が何と言おうとも、少しでも長く生かしておくのが医者の使命と考えているからである。

他方、家族の方はどうであったか。奥さんや子供たちは交代で病院を訪れる。しかし、患者の意識は日ごとに薄れ、相手の顔を見極わめることもかなわず、そしてろくに会話もできなくなってきた。治る見込みもない以上、こんなことなら、本人の希望通り命を亡くさせてあげればと思いたくもなる。口には出せないが、入院費用だって少なくはない。

しかし、実際問題として、家族としては治療を止めてくれ、とは言えないのである。駄目とは分かっていても、「出来るだけのことはしてやってください」と医者に頼むほかはない。結局彼は長い間病院で寝かされ続けた揚げ句の果てに、息を引き取ったのである。

この次は私の番である。あと何年先か、あるいは直ぐなのかは分からない。また病院でなのか、それとも自宅でなのかも分からない。いずれにしても、家族や友人たちに迷惑だけはかけたくない。そのために自然な、思いもかけないポックリ死、あるいは「尊厳死」の手立てを考えているこの頃である。

井田君の遺体は岡山にある墓地に葬られた。ご冥福を心からお祈り申しあげる。

わたしのGNP

山縣　正靖

GNP！　懐かしくも愛しいこのGNPは、家庭をも顧みずに頑張った日本のお父さんたちの働きを象徴する言葉ではないか。しかし、いまは経済用語でもGNPは使われない。GDPに変わったころから日本経済はかつての輝きを失い、経済まで齢をとった。

今やGNPは「元気で長生きポックリ」だそうである。われらご同輩は打ちそろって「年を経し糸の乱れの苦しさに衣の館はほころびにけり」妻よこれまでのご無沙汰を許しておくれの心境とあいなった。

しかし、考えてみると、このGNPは随分と高い願望ではないか。元気でいたい、が、病気はお構いなしにやってくる。長生きしたい、が、この齢になると明日も知れず。ポックリ往きたい、が、そうはいかんの何とやら。ポックリ講でご詠歌を詠うか。さる高僧は、こんな高望みに掛けるとはまだ悟りが足りないと説かれている。

そこでわたしのGNPは「グルメで仲良し　Pass Away」とは発しました。

グルメのG、元気の源はうまい物を食うことなり。うまい物をどう?と誘えば誰でもよろこんで乗ってくる。あの大谷崎の瘋癲老人日記には瘋癲と称するご老人がお気に入りの若い嫁をつれて天下の名割烹をグルメして歩き回る場面がでてくる。ご老妻もお相伴にあずかるわけで、ぶつぶつ言いながらもついてくる。その名割烹もいくつかは今もやっているようで、この原稿を機に罪滅ぼしでサイと一緒に回ろう、と決意いたしました。

三文グルメも良い。粋なパリジャンは生牡蠣の店にぶらりと入り、キリッとしたシャブリを一杯、牡蠣の半ダースもスイッと平らげてフッと店を出る。東京でもうれしいことに三文、三千円でこれを楽しめるようになった。小生八十歳まで現役のスポーツをやろうと、このところアーチェリーを毎日曜日にやっているが、自分へのご褒美に弓の帰りに牡蠣をやることにしました。

仲良しのN、長生きはしたいが、まあこの齢ともなると神様の思し召し次第では急拳ご転勤ということもあり

うる。

つらつら思うに、人間、生きていることの証しは縁あってお知り合いになれた仲間に仲良くしていただくことではあるまいか。グルメ良し、ペンクラブ良し、前の会社の戦友も良し、生きている間は皆さんと仲良くつるんでいるのが何よりである。卒サラ後は面倒を見てくれる部下はいないから、誰も自分の楽しみを持つわけだが、仲良くやれば楽しみは深くなる。われと来て遊べや親のないすずめ。老人どうし仲良くやっていて、それで何時かお呼びが掛かったなら、お蔭様で長生きしましたと。

さて、Pass AwayのP。どうもポックリいくというのは実は結構珍しいものらしい。ポックリ講に入ってもなかなかそうはいかない。わたしとしては、一番良いのはPass Away. Pass Away to the better land I know. である。

次の世はどんなに旅の好きな人も、ここだけは旅したことがない。　ただ、あの世の寸前から逆帰りした方から直接うかがったのは、一面に黄色、赤色の花咲き乱れる花野の真ん中にいて、気持ちが良いなあと　ふーっとまた眠って気がついたら病院で家族に取り囲まれていたそうである。

また、古今東西の神話では三途の川を歩いて渡る。向こう岸に懐かしい人たちがおいでと声をかけてくれる。ただ途中で川の流れが急になる前に、こちらの岸から行くな、かえっておいでの声に気づいて帰ってきた話もよくある。

まあ　あの世への通過儀式は人さまざまにしても、ありがたいことに当人はその時点ではもう花野の中か、三途の川を懐かしい人たちの声を頼りに渡っているようだ。これがわたしのPass Awayである。ただ意識のあるうちは痛いのがきらいだから、ここは盛大にモルヒネでもアヘンでもご馳走して下さい。

今回のお題は　はからずもわたしの未熟なGNP観を書くことになりました。これぞ何でも書こうの極みではないか。

老兵は消え去るのみ

石川　正達

「いい加減に次の人にお願いしたら?」

ここ数年、「悠遊」の編集が始まり、ゲラ刷りに朱筆を入れていると、きまって妻が言い出す言葉である。八十歳を過ぎた男が、よたよたと人さまの原稿に手をいれているのが様になっていない、と思っているようである。

もう十三年も前になる。企業ＯＢペンクラブの同人誌を作ろうという声が高まって、誌名を募集したところ「悠々」「悠悠」が多い。それに私が遊びを加えて「悠遊」と決まった。

さて、どんな形の同人誌にするか。同人誌なるものを書店、図書館などで色々と調べ、新聞のＯＢ仲間が作っている同人誌を参考に「悠遊」の形を決めた。亀戸にある電子組版システムを掲げる小さな印刷所を紹介してもらった。ワープロのフロッピーを持ち込むと安くなる。いまはパソコンが普及しているが、創刊当時はワープロさえ持っている人は少数派であった。書き原稿が多い。

わたしの家の近くに地区センターがある。元小学校長の所長さんがワープロを始め文章を打ちこむのを趣味にしていると聞き、書き原稿の打ち込みをお願いした。創刊号の筆者は三十四人。うち二十四人が退会、もしくは鬼籍にはいられ、残っている会員は十人に過ぎない。

創刊号は数人の編集委員のお知恵を拝借して編集方針を決め、三枝亨さんと相談しながら、実際の編集作業は、ほとんどわたし一人でやっていたように記憶している。第二号からは新聞仲間の林篤二さん〈故人〉、第七号からは小島博志さんと共に編集に当たってきた。最近はほとんどを小島さんにお任せで、わたしは少しばかりお手伝いをする程度となっている。

新聞社の現役時代は二十年近く新聞の編集整理を職として、出稿各部から出される記事原稿の価値判断、添削に当たってきた。「悠遊」を編集して、ひとの原稿を添削することも、苦にならない。若干楽しくさえあった。

この「悠遊」も第十三号を迎えた。わたしの書棚には第十二号まで、同じような姿で並んでいる。創刊号から

変わらぬスタイルを貫いた。あるいはそれが、マンネリのように見えるかもしれない。しかし、例えば市販の総合雑誌「文藝春秋」や「新潮」など何十年もスタイルを変えずに発行されてきている。これを見習いたい気持ちもあった。「悠遊」は企業ＯＢペンクラブの歴史を刻んでいる。大切なのはその中身である。

「悠遊」はいま批判に曝されている。経費面を含めて更なる充実を計ろう、ということで、わたしたち二人は、この第十三号をもって「悠遊」編集を下番することになった。来年の第十四号は新しい編集スタッフが担当される。第十四号が、これまでの「悠遊」の欠陥を克服して、すばらしい、ひと味違った同人誌として創出されることを期待している。

これから「悠遊」編集に当たられるお二人は、会員各位の書かれた原稿を編集されることになる。だが、完全原稿を求めることは至難だ。現代の新聞・雑誌で使用されている日本語の表記法について、しっかりと勉強されるようお願いしておく。

ダグラス・マッカーサー元帥が軍歴を閉じようとした時に語った言葉が、ふと甦る。

「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」

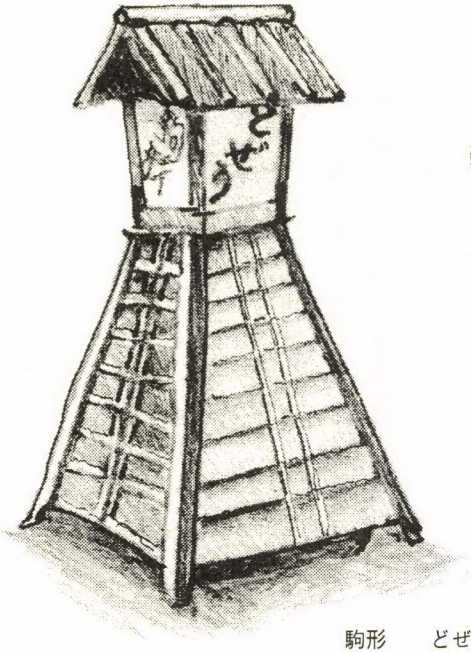
マッカーサーは朝鮮戦争をめぐり南北統一を主張してトルーマン政権を激しく批判、一九五一年四月に解任された。その時、上・下両院の聴聞会に出席しての大演説を、士官学校時代に歌った民謡の一節を引用して、この言葉で締めくくった。時に七十一歳であった。

わたしはことし六月には満八十五歳を迎える。マッカーサー元帥がこの言葉を述べた時よりも十歳以上も年上である。とっくに消え去ってよき老兵であろう。

さて、消え去って以後、いかに過ごすべきか。そうだ「ＧＮＰ」があるではないか。幸いにして、この「悠遊第十三号」の特集テーマは「卒サラのＧＮＰ―元気で長生きポックリ」である。これこそ、これからの生きる目標となろう。「老兵は死なず」なのである。

高等学校卒業のころ三十人近くいたクラスメートはいま八人しかいない。わたしはさまざまな病気を経て、いまは元気だ。あと何年―。元気を保ってポックリ逝く日を待つとしよう。ＧＮＰ万歳。

自由テーマ



駒形　　どぜう

四十年前の東海道新幹線（その三）

大塚　滋

今回は昭和三十九年開業の前後に起こった事件、秘話を紹介しよう。

○モデル線で行った各種試験テストは優に二百項目を超えている。わざとブレーキ力を過大にして滑走させ固着検知装置の性能を調べたり、車輪にフラット（滑走で出来るきず）をつくって軌道と車両の両方に与える影響を調査したり、バーナーで熱してレールを狂わせるなど試験線でなければ到底不可能な試験も数多く行われた。面白いところでは線路の置き石をはね飛ばすため先頭車のスカートに付いている排障器の効果を確かめようと、人家の全くないところを選び、わざと置き石をして時速二百キロで走らせようとしたが上司の許可が出ず、一計を案じ石の代わりにジャガイモを使い、大中小で色分けしてはね飛ばした。よく飛んだがイモは砕けて失敗であった。昭和三十八年七月八日の話である。最も恐ろしい事故を想定して、わざと脱線させそのままトンネルの入り口の壁にぶっつけるテストを提案したが、許されるはずもなかった。

○昭和三十八年三月十八日、前夜からの雪による吹き溜まりに突っ込んでスカートを破損した。スカートは改造し強化したが、思えばこれが現在まで続く東海道新幹線と雪の苦闘の幕開けであった。営業開始後、日本海からの風が吹き抜ける関が原付近の積雪区間走行によって床下機器や窓ガラスが破損することは報告されていたが、当時の列車課長が「天下の新幹線が雪ごとき負けてたまるものか、走れ、走れ」と徐行を許さなかった。被害は増加し、二年後には床下に付いた雪の落下によってはね上げられた道床の砂利が沿線の人家に飛び込み、枕元の目覚まし時計に当たるなど、四十一年の十二月には雪害によって運休、事故が続出した。その後の経緯はご承知の通りで現在でもスプリンクラー、雪落とし、徐行で対処している。当時の列車課長とは、かく言う私で、威勢

はよかったが、時速二百キロと落雪の恐ろしさを知らない浅慮だったと反省している。これも時効と許していただきたい。

○国鉄の技術屋は土木、工作、電気それに運転の四系統に大別される。最も技術屋らしくないのが運転屋だ。文字通り列車を安全に定時に走らせるのが仕事で、大学では決して教えてくれない分野である。モデル線での運転屋の仕事は試乗列車の整備と運転、車両の検査と保守。さらに建設、保線、信号、電車線、車両などハード陣が設計し、建設し、製作し、取り付けたものに対し、その性能を判断するのに必要な速度、ブレーキ、地点などを指定されての運転操作や種々の走行条件を要求通り提供することであった。前号の（その二）で述べた出縄トンネル内の定点で列車をすれ違わせるなどはその一例である。またこうした過程において部内の最終ユーザーである運転屋の意見、希望、時には改造要求などを主張することも少なくなかった。この点に関し（山之内秀一郎著「新幹線がなかったら」東京新聞出版局）には「新幹線のような新しい大プロジェクトが成功する際には車両や設備を設計製作する技術者だけでなく、こうした新しい製品を使いこなし、多くのトラブルを乗り越え、技術の改良と保守のノウハウをつくる技術者も欠かせない。こうした人材が育っていたことも新幹線を実現に導いた大きな力となった」とあり、表舞台に登場することの比較的少ない運転屋の業績に言及している。

○東京・新大阪間の線路がつながり、昭和三十九年七月二十五日初の通し運転が行われた。十時間を予定していた。保線と電気の資料に従い、私が運転士に細かく速度の指示をする「人間ＡＴＣ」といわれる運転である。順調に走っていたが琵琶湖の東岸、愛知川付近で寸前まで作業していた保線屋が線路上に放置していたガスボンベをはねた。ボンベは口金が破損し、吹き出す高圧ガスによってロケットのように推進され、東の方はるか彼方に勢いよく、飛んで行った。映画の一場面のようだった。後で聞いたら田んぼに無事着地したそうで、けが人も壊れたものもなかったらしい。

○モデル線の最寄り駅は東海道線の鴨の宮で、当時は全くの田舎町、旅館は「藤加」というのが一軒だけ。試験が二日、三日と続いたり、打ち合わせが遅くなったりした本社、技術研究所、メーカーなどの連中はここに泊まるしかない。この旅館、もとはと言えばご同伴用、そのため悩まされて、寝られなかったという話をよく聞かされた。しかし試験が最盛期になるとモデル線専用となり夜ここで打ち合わせや、宴会をすることが多くなった。麻雀で夜更かしや徹夜組も後を絶たなかった。

○営業開始直後、昭和四十年五月七日下り、十五日上りでお召列車が運転された。下りでは両陛下が運転台を御覧になり、東海地方を走っている時、沿線の山の名前を添乗の新幹線支社長にお尋ねになり、無線で東京の指令室に聞いてきた。沿線の地図で調べて連絡したが、その時列車はその山が全く見えないところを走っていて返答に困ったという。食堂車ではバナナを召し上がったが、前例がないことと話題になった。十五日の上り列車は小田原通過で五分前後遅れており東京定時到着が難しいと思われたので、指令室にいた私は無線で運転室に乗っていた指導運転士に「お召しを遅らせることはできない。責任は私が持つからＡＴＣを開放して時速二百十キロを超えてもいいから東京に定時に着けろ」と指示した。列車はキッチリ定時に到着し、指令室には思わず歓声が挙がった。運転屋冥利に尽きる瞬間だが前代未聞の違反指令、あの頃はこんなこともできたのだが、これも時効。

○モデル線の二年間と営業開始前後には、まだまだ多くの事件、珍事があった。熱気にあふれたつわものどもが〝夢の超特急〟実現に賭けた壮大なドラマの連続であり、それがあったからこそ、二十世紀の歴史に残る新幹線成功の礎を築くことができたと自負している。そしてその組織の一員であったことを誇りに思っている。モデル線は昭和三十九年四月二十一日その使命を終え、今は保線の基地となっているが、その一隅に「新幹線発祥の地」の碑が建てられている。

「英国における日本人社会の歴史」をたどって

大庭　定男

私が英国における日本人社会の歴史に関心を持ち始めたのは在英中の一九八〇年代、戦時中にロンドン大学で行われた日本語特訓を調べ始めた頃からであった。その頃、一九一〇年の日本博覧会に出品された東本願寺勅使門のレプリカ建造に加わった宮大工がその後も残留して維持管理に当たり、英国に骨を埋めたという話を聞いて男のロマンを感じた。幕末以来、お雇い外人をはじめとして日本近代化に貢献した英人は数多く、その研究もかなり詳しく行われている。反対に、英国に来た日本人でここに骨を埋めた人もかなりいるのに、一部を除きどんな人生を送ったかについての調査研究がほとんど行われていないのは何故だろうか。英社会への貢献はなかったのか。

このような問題意識のもとに調査を始めたが、それは海図なき航海に等しかった。参考とすべき体系的な本がない。片々たる情報を集めて自分で組み立ててゆくしかない。そこで、まず日本で出版された日記、旅行記にでてくる日本レストラン、土産物店、旅館、便利屋を調べ、ロンドンのトテナムコート・ロード駅の南、デンマーク・ストリートに二、三軒あったことを確かめ、現地調査をしたが、それらしい跡はまったくなかった。

次に調べたのはロンドンで発行された邦字紙。邦字紙が継続的に発行されるようになったのは、少数ながら日本人社会が形成され、日本人旅行者も増えてきた日清戦争の頃からで、日英実業雑誌(一八九三年より)、日英商業雑誌(一八九八年より)、日英週報(一九一〇年頃より)という月刊新聞が相次いで出たが、内容は英企業の広告が大部分で私が求めるような情報はほとんどなかった。一九三六年に出た「海外邦字新聞雑誌史」によれば「日英新誌」という月刊新聞が出ているという。それが何処にあるかを調べているうちに、偶然会った英人から「ウオタルー駅に近いBritish Library別館にある」とのことを聞き、急いで行ってみると、これこそ私が求めているものであった。

一九一五年創刊のこの月刊新聞には、英国の日本人社会についての記事がかなりあった。英国が国運を賭して戦っている第一次大戦中に多額の戦時国債を買い、表彰された実業家、常に羽織袴で出歩き、一流紙に投稿、日本文化についての本を出版した詩人などの誇るべき日本人、反対に密輸、売春宿経営、果ては英将校夫人と不倫し、夫に訴えられて高額の弁償金を支払った日本人医師などの話もあった。さらに日本人会、同胞会、日本人キリスト教会などの動き、一九三〇年代半ばからの日英関係の悪化に伴う在留邦人への影響なども分かって、得るところ大であった。この新聞は有料だが広告収入で成り立っていたため、これが減った一九三八年、ついに廃刊となった。

第二次大戦の開戦にいたる日英関係のもっとも切迫した三年間の日本人社会の状況は、他の方法によらざるを得なくなった。助かったのは完備したインデックスを発行していたThe Timesであった。国立公文書館（Public Record Office,現在のThe National Archive）にはよく通い、英国籍を取った日本人の数のほか、太平洋戦争関係の資料を調べた。現在でも旅行のたびに通っている。

インタビューも数多く行った。戦前、戦中、戦後を生き抜いた数少ない日本人の中には、英国船の船員になるため英国籍をとり、乗船中にUボートに撃沈されて捕虜となり、北ドイツの収容所に抑留された人がいる。「同盟国の日本人である」と主張したが、釈放されなかった。

日系二世との接触にも努めた。ここで感じたことは、日系二世は日系であることを隠し、英人社会に同化し、日本人との接触を避けたいと思っている傾向があった。インタビューが難しいだけでなく、いったん知り合ってもそれ以後が続かない人が多かった。米国や南米の日系二、三世が日本人としてのアイデンティティを求めて日本、日本人に親近感を持って接触してくるといわれるのとは対照的である。

英国には日系二、三世の数が少なく、相互間の連絡もなく、さらに決定的なことは太平洋戦争前からの反日感情、黄色人への差別が英社会にあったためで、日系であることを知られたくなかったからであろう。

一九九五年帰国後、まず外交資料館での調査を始めた。明治以来、ロンドン領事館（後に総領事館）からの報告によると、在留邦人の出生、結婚、死亡などに関する情報が盛られている。また、昭和になってから、内務省の外事警察が発行した外事月報によると、太平洋戦争中、Isle of Manに抑留された邦人の状況を知ることができた。

さらにリバプールにも小規模ながら日本人コミュニティがあったことが知られていたが、何処にあったのか確認できなかった。ところが、英国船で働いていた日本人船員二名が開戦時ニューヨーク港で抑留され、翌年、交換船で帰国、その住所が揃って同じstreetなので、そこに日本人が住んでいたことを確認することが出来た。

以上の調査結果を二十年来、ロンドンの日本クラブの機関紙「びっぐ・べん」、ミニコミ紙「Journey」などに寄稿してきた。幕末に亡くなった留学生の墓に顕彰碑が建つなど、在英日本人社会の歴史に対する関心も深くなりつつある。二〇〇四年、在英日本国大使館より「長年にわたる英国滞在中、日英関係史、特に日英経済関係史、在英日本人社会などの研究、調査を進め、一般に紹介した功績大」として、大使表彰を受けた。思いもよらない喜びであった。

京都で…再会

清水　勝

懐かしい人からの突然の電話はうれしいものだ。酒井に電話をしてきたのは静岡支社時代に親しくお付き合い頂いたA社の小柳支店長だ。今は京都支店長だという。

「何かと忙しいでしょうが、酒井さん、来月の十四日と十五日の二日間空けていただけませんか」

というものだった。何でも『桂離宮』の参観を申し込んでおいたとのことだった。定年後の自由な身でありスケジュール的には問題ないので、了解した。

そして小柳支店長と再会できる楽しみの六月十四日、久し振りに「のぞみ」に乗車、一路京都に向かう。途中、何度か親しい仲間がいる京都支社に寄ってみようかとの思いが生じたが、いやいや定年退職した身なんだから、止めようとの意を強く持った。以前だったら厚かましくも立ち寄っていたことだろう。

さて、宿舎に指定されたのは祇園に近い石塀小路（いしべいこうじ）にある「田舎亭」。事前に調べてみたが、ここは非常に人気のある旅館で予約を取るのが大変らしい。それもそのはず部屋数は五つしかなく、以前は映画監督や映画スターが利用することから、一見さんお断りの旅館だったようだ。さらに場所柄から「片泊まりの宿」とのことで、朝食のみ。夕食は京都の味を好きなところで自由に召し上がってくださいというわけだ。

酒井のような東京人には京都は憧れの地であり、同時に畏怖の念が生ずるところでもある。それは日本人の故郷との思いがあるからかもしれない。歳を取ると京都へ無性に行きたくなるもので、小柳支店長はそのあたりを心得て、声を掛けてくれたようだ。家内には申し訳ないが、今回は男の再会であり、留守番をしてもらった。その代わり、「次回は私も連れて行ってよ」と約束させられてしまった。

京都駅ビルはとても近代的で、まずは屋上に上がり京都の街を眺めてみた。東寺の五重塔、西・東の本願寺の大伽藍が目に飛び込んできた。古い京都と伊勢丹の入居しているこの巨大な駅ビルが共存している不思議さを感

じた。

訪ねた石塀小路には驚いた。実は入り口が分からず、ようやく「石塀小路」と書かれた看板を見つけて、「ここなのかな？」と思いながら入ってみた。そこには敷き詰められた石畳、石の垣根そして木造家屋の街並みが現れ、全く違う世界に来たような錯覚が起こった。そんな一角に行灯（あんどん）に「田舎亭」と書かれた落ち着いた玄関を見つけ、格子戸を開けた。支店長が迎えに来るまで、苔むす坪庭をぼんやりみながら至福の時を過ごした。

やがて玄関に懐かしい小柳支店長の声がした。

「まずは食べて飲んで語りましょう！」と連れ出され、これまた京都情緒たっぷりの「花見小路」を一回りしながら案内してもらった。紅柄格子に竹矢来、赤い提灯のお茶屋さんや料理屋さんが並んでいる。その奥に「都をどり」で有名な祇園甲部歌舞練場があった。

そうした中で案内された料理屋で、まずは再会を祝して乾杯！程なく女将が現れ、ご挨拶。カウンター席にはどこかで見たことのある、そうだ、テレビでよく見るタレントさんだ。

すっかりミーハー気分ながら、そこは熟年二人組。経済・景気のことを話し終えれば、各々の家庭のことと、これからのことを話す。支店長も次の異動で関係会社に出向することが確実の様子だった。

「最後の勤務が京都だったのが何よりでした。日本の伝統・文化、四季の美しさなどを確認させてもらえ感謝しています。定年後にも毎年一度は京都に来るつもりです」と、熱く語っておられた。

旅館に帰る途中、「ちょっとだけ覗いて行きましょう」と、お茶屋さんに入った。支店長は馴染みの様子で、

「昔、お世話になった友達が来ているので、ちょっと見学させてや」

と、上がっていく。そこは舞妓さん・芸妓さんの休憩部屋の感じで、お蔭様で身近にお会いさせていただき、少し話をさせてもらった。

「お姐さんはゴルフもしゃはるんどすえ」と、京都の柔らかい話し言葉には、参った！参った！という感じであった。すぐに失礼したものの、席に着いたらどれほどの費用なのだろうと根っからの貧乏性が顔を出した。

翌日は目的の『桂離宮』。ここは『修学院離宮』『仙洞御所』とともに宮内庁京都事務所に参観願を出し、抽選でようやく見学できるそうだ。京都にいる支店長ですら初めて見学するという。酒井は、そんな貴重な場所へ行く相棒として自分を選んでくれた小柳支店長に感謝感激するとともに、得もいわれぬ深い友情を感じた。

緊張感を持って、御幸門での説明と注意事項を聞いた。写真撮影の出来るところが一部あるが、大半は禁止ということだった。この桂離宮は建築家ブルーノ・タウトが絶賛し、一流の建築・庭園づくりを志す者は必ず訪れるという。特に遠近感を意識した配置や黄金分割比（縦・横の比が0.618：0.382）で創られた前庭は見事で、計算され尽くした美的効果が、素人ながら美しい！と感心してしまう。とりわけ「松琴亭」の大柄な市松模様の襖（ふすま）は現代にも通じるものだし、「月波楼」の窓から眺める庭園の美しさは何とも言い表せない素晴しさだ。

ここで一日ゆっくりと過ごして、昔の貴族の気分を味わいたいと思うものの、案内役の職員に従っての見学で、当然ながら時間も制限されている。それでも貴重な日本文化に触れられ、大いに満足できた。

その後は、嵐山に向かい、渡月橋を渡り、屋形舟に乗り込んでの保津川舟遊びとシャレてみた。

小柳支店長には、二日間すっかりお世話になり、お陰で、京都っていいなあとの思いが一層増したように思う。支店長の言ったように、酒井もこれからは毎年、京都を家内とともに訪れようと思った。桜の京都、新緑の京都、祇園祭の京都、大文字の京都、紅葉の京都、新年の京都、雪の京都等々四季を通じて、社寺仏閣に恵まれ情緒深いたたずまいの中で時を過ごせば、心の安らぎが得られるように思う。

酒井は妻へのみやげに「京つけもの」「京豆腐」「八ツ橋」「五色豆」を買った。そして、『修学院離宮』と『仙洞御所』の参観願をすぐに出してみよう、次は家内と見学させてもらおうと思った。

小柳支店長が東京に戻ってきた際には東京的なもので歓待するとしても、すぐには思いつくような場所がない寂しさをいま酒井は感じている。

ストレンジ師の実像に迫る

高橋　孝蔵

予期はしていた。日本に近代スポーツを導入した東京英語学校（後の旧制一高）教師ストレンジの調査が難航している。百三十年ほど前の昔の話だからである。

ロンドン大学やその予科であったユニバーシティ・カレッジ・スクール（UCS）は書庫から古いカートンボックスをいくつも取り出し、どうぞ見てくれとオープンであった。しかし、核心に触れる資料にはなかなか出会えない。

日本では英国大使館、陸上競技連盟、横浜ヨットクラブ（横浜アマチュアローイング・クラブを吸収）が古文書は全くないという。頼りにしている東京大学からも関係書類が見つからないとの中間報告である。ストレンジ雇用申請書さえも紛失したとの連絡を受けた。

実はこの書類こそすべての混乱の始まりと推理する。一八七五年四月の東京英語学校長肥田昭作から文部大輔田中不二麿宛の雇い入れ伺い書には「ストレンジはオックスフォード大学を卒業し、その卒業免状も所持している」と明記してある。しかし、オックスフォード大学の卒業者名簿にはストレンジの名前はない。このためか、ストレンジは自分の身の上を語ることがなかった。

彼の死後、彼の教え子や研究者達が発表したストレンジ像は幅が広い。生年は一八五〇年から五五年まで幾つかの説がある。生まれ故郷はデヴォンシャー州かドルーンシャイア州かロンドン。出身校はオックスフォード大学かケンブリッジ大学かイートン校か、あるいはイートンを経てオックスフォード大学またはケンブリッジ大学となっている。

現段階ではデータがまだ不十分だが、推理を交え、実像にできるだけ迫ってみたい。

ストレンジは一八五三年十月ロンドン大学近くで生まれた。多くの学説がデヴォンシャー州生まれとしている。だが、彼はそこに住んだことすらない。父の死後、一家はデヴォンシャー公爵が領有していたロンドン西の郊外

チジウイックに移り住んだ。彼の漕艇クラブはデヴォンシャー・ボートハウスに所属した。

父方の祖父は画家、母方の祖父はジェントルマン。恵まれた家庭だった。父はプトニー土木工学専門学校数学教授を勤めたことがある。ストレンジが生まれた頃は、教職を辞め、ワインの商いをしながら、大学正門近くでマルボロ・アームズというパブを経営していた。なかなかの商売上手で、かなりの財産を残した。

十九世紀半ばにもなると、英国は産業革命を終え、世界の工場といわれ、経済的に豊かになった。何故、そこを飛び出して、海外に出なければならなかったのだろうか。それも攘夷運動の激しかった日本に。あるいは、何も知らないから来日できたのではなかろうか。

意外と思われるが、ザ・タイムズはかなり頻繁に日本を取り上げている。彼も事前に知識は得ていたと思われる。幕府の武士百五十名が護衛していた東禅寺の英国公使館が浪士に襲われ、公使はほうほうの体で逃げた。公使館襲撃は二度もあった。横浜の生麦では薩摩藩の大名行列を横切った英国商人リチャードソンが斬殺された。これがきっかけとなり薩英戦争が始まり、イギリス艦隊は鹿児島を焼き払った。砲台だけでなく、市街も砲撃したので議会ではやりすぎと論議を呼び、新聞はこれを詳細に報じている。

当時、野心的なイギリス青年にとって、インド、カナダ、オーストラリア、アメリカなど魅力的な国は数多くあった。その中で日本を選んだ人は多くはないが、少なくもなかった。横浜市史によれば、一八七八年末の横浜在留英人は五百十五人を数える。

ストレンジの場合、幕府留学生との出会いに触発されたところが大きいと思われる。ストレンジと十一名の日本人留学生のUCS入学は一八六八年一月である。UCSは英国国王・女王の来訪のある名門のパブリック・スクールであるが、小さな学校である。数学、地理など同じクラスに配属された可能性が高い。菊池大麓（後の東大総長、文部大臣）をはじめ留学生達はクラスの上位に入っていた。ストレンジもできる方だったので、お互いに刺激し合うところが多かったに違いない。

その後、幕府は崩壊し、幕府留学生は帰国するが、菊池は明治新政府からも選抜され、再度ＵＣＳに入学、今度は同校を首席で卒業した。在学中はラグビー、ファイブズ、陸上競技などスポーツにも熱中した。ケンブリッジ大に入学すると、ボートクラブに入った。在学中はコックスを勤めた。

菊池は学者というよりか、有能な教育行政家として大成していく。彼なら人を作るには勉強だけでなく、スポーツも必要だということを痛感していたのではなかろうか。留学当時、英国ではパブリック・スクールにラグビー、サッカー、ボート、テニス、陸上競技などの近代スポーツが盛んに取り入れられた時期である。しかし、明治初期にはスポーツ指導家を招聘する余裕はない。彼がスポーツマンのストレンジに声を掛け、英語教師として日本へ行くよう促したのではないだろうか。多くの学説は菊池がストレンジを誘ったと主張する。それにはそれなりの理由があっての話だ。

留学生のうち開成所出身は菊池を含め九名もいた。開成学校（前開成所）がベースとなり、東京大学が設立され、講義の大半が英語で行われるはずとの情報を菊池はつかんでいただろう。そのために開成学校の語学生が中心となり、東京英語学校が作られることも分かっていたはずだ。

菊池はケンブリッジ大学を卒業後、東京大学最初の日本人教授となり、エースになっていくことが期待されていた。彼がストレンジを推薦し、旧開成所仲間に協力を要請したと推理する。ストレンジはＵＣＳに二学期間は在学したことは判明している。それ以上の学歴は分からない。なかった可能性さえある。しかし、仲間は菊池の意を汲んで、ストレンジの就職を確実なものにするため、政府がお気に入りのオックスフォード大卒としたのではなかろうか。

就職の経緯はどうであれ、ストレンジは漕艇や陸上競技を日本に根付かせるべく、抜群の貢献をする。しかし、スポーツマンシップを尊重する彼には雇用申請書は心に重くのしかかったことだろう。

ベトナム今昔

中村　爽

昨年六月、久し振りにベトナムを訪れた。観光旅行というよりも、この機会に南北統一三十周年を迎えたこの国の今をこの目で確かめたかった。二十八年前に見たベトナム戦争直後の混乱の極みにあった旧南ベトナムの姿が今でも頭を去らなかったからだ。

五十年近い昔、商社の駐在員として当時のサイゴンでフランスの影響を色濃く残すエキゾチックな空気に浸って数年を過ごした私は、この国に特別の親近感を持っていた。その後も何度か訪れ、発展の有様を目にしてきた。しかし、一九七五年に長期にわたったベトナム戦争が南の敗北に終わり、北が主導する国家統一が実現すると旧南ベトナムは苦渋の道を歩まされた。共産党政権が「解放」の名のもとに急激に推進した社会主義化政策が社会的混乱を引き起こし、かつて盛んだった経済活動は停滞する一方だった。この状況下にあった一九七八年、上司に随行して統一ベトナムを訪問する機会があった。

当時、日本から直行の航空便がなく、わずかにバンコクかプノンペン乗り換えで、北部の首都ハノイに到達できるのみだった。初めて訪れたハノイの印象は、「古い町」という一言に尽きた。空港からの道路は舗装が悪く、狭かった。途中で渡った鉄道併用橋はかなりの時代物と見えた。街の中心部には古びた低層の建物が並び、人々の服装は質素でアオザイも見当たらず、長年の戦争状態がまだ続いているという感じだった。ここで一週間以上かけてサイゴン訪問の許可をようやく取ったが、われわれ二人に政府関係者三人が付き添いとして同行すると告げられた。彼らが監視役であったことを後で知ることになる。

こうして、やっとたどり着いたサイゴンには、かつての華やかさとは打って変わった陰鬱な空気が漂っているようだった。車やバイクの姿がすっかり消えた街は異常に静かで、多くの商店が鎧戸（よろいど）を下ろし、昼間でも閑散として暗い雰囲気だった。休日には少しは人出が増えたが、店舗やレストランが閉まった目抜き通りでは、人々は放

心したような表情で、ただあてどもなく歩いているように見え、まったく活気が感じられなかった。ホテルはまずまず以前のままで、フロントにアオザイ姿の女性を見つけて、ようやくほっとしたのを覚えている。

外出は自由だったが、付き添いの同行者から毎日の行動内容を何気ない風に尋ねられ、不快に感じていた。ある日、外国人国外退去勧告に反してサイゴンに残っていた知人から電話を受け、会うことにした。「監視の目があり、ホテルまで出向けない。旧日本大使館で落ち合おう」と言うので、ホテルの前にいたシクロ（輪タク）に乗って出かけた。ところが、明くる朝、同行者から「昨晩あなたが会った人は昔のお友達ですか」と聞かれ、驚いた。昨夜の行動が監視されていたのだ。外国人が宿泊するホテル近辺にたむろするシクロは、政府お抱えのスパイだと聞いた。電話も盗聴された可能性がある。社会主義体制の怖さを知り、昔の自由なベトナムがひたすら懐かしかった。

南政府の元高官の多くは思想改造学習キャンプに強制収容され、国営企業では北から乗り込んできた連中が主導権をにぎり、南の元幹部が平に格下げされるのは日常のこと。政府の資本家排除指令で小商店主のような零細自営業者までが資本家と見なされ、商売が出来ないという。経済は停滞し、消費物資は極度に不足していた。多くの市民は収入の道がなく、売り食い生活の状態だった。耐え切れずに小船で海を渡り国外脱出を求めるボート・ピープルと呼ばれた人も多かった反面、船が沈み命を落した人も少なくなかった。南時代からの長年の知己で、技術者として国家の電力開発に携わり、後に公共事業大臣から上院議員まで務めたO氏もそのひとりで、同伴の家族とともに海に沈んだと知り胸が痛んだ。

どん底の状況にあった南部ベトナムを見てから二十八年が経った。この間、ベトナムはカンボジア侵攻、中越戦争などの強硬路線で国際的に孤立した時期を経て、ようやく一九八〇年代後半に「ドイモイ（刷新）」政策で経済の開放を明らかにし、国際社会への復帰を果たしていた。外国からの経済援助や投資が活発になり、日本企業の進出も続いた。その目覚ましい経済発展や日本のベ

トナム観光ブームの様子についてはしばしば報道されたし、昔の仲間たちからもよく聞いていた。私は今度の旅でその実態を見るべく、期待を胸に日本を出発した。

ホーチミン到着後、空港からホテルに向かうバスの窓から眺めた町並みは昔の記憶とうまく重ならず、時の流れを実感した。驚いたのは、ひっきりなしにバスの脇をすり抜けて驀進するバイクの大群だった。町の中心部に近づくと、かつては見られなかった新しいホテルなどの高層ビルが立ち並び、建設中のものもいくつも目についた。だが、嬉しいことに、この街で最古のコロニアル様式の老舗ホテルがある通りの近辺は、昔と変わらぬたたずまいを見せ、緑の葉を茂らせた街路樹が涼しい陰を落としていた。街は路を行く人々で込み合い、市場や店舗には物が溢れ、明るくてエネルギーと喧騒に満ちている。一見して、この国の経済が急速な成長過程にあるのが感じられた。私の記憶に残っていた前回訪問時の、暗く、活気のなかったこの街の印象が、あっさりと払拭されてしまうほど、その変貌ぶりは予想を超えていた。

ホーチミンから中部にある阮王朝の旧都フエを経て、商工業都市ダナンに足を延ばした。フエには昔ながらの静謐（せいひつ）な空気が漂い、古き良きベトナムの姿が印象的だった。一方、ダナンでは経済援助や外資により港湾施設や工業団地を含む大規模な開発が行われ、町中が活気に溢れていた。ここでもホーチミンと同じに無数ともいえるバイクが轟音をまき散らしていた。

今回の旅では、開放経済政策を採るベトナムが順調な経済発展を続けているのが見聞できた。ただ、その一方で政治体制は統一以来、共産党の一党独裁だ。旅行の間、以前のような精神的抑圧は感じなかったし、交流したベトナム人は、いずれも昔どおりに陽気で率直に見えた。しかし、この体制下、果たして南部の人たちは、思想や言論の自由を享受できるのかという疑問が残った。グローバルな情報化の世界に生きる若い世代の国民は、いずれこの国にふさわしい体制を求めて行くのではないだろうか。今後もできるだけ見続けたいと思う。

神々は倦めり　お年寄りのための童話―その四

新山　章一郎

最近、日本そして世界各地で起きている事件を見ますと、なんだか世の中どこか狂ってきた、人としてあるまじき欠陥人間が多すぎるというような気になって参ります。このことは我々人間をお造りになっている天界でも問題となり、一部では神様方の製造者責任を問う声も上がって来ました。

そこで天帝は直属の調査委員会を招集され、同委員会は、神様方が我々人間を実際にお造りになっている人間工房の抜き打ち査察を決行されました。その結果判明した天界の人造り現場における衝撃的な実態を、我が天界TVでは現地報告を交え、スタジオの人間大学G教授のコメントとともにお伝えいたします。

キャスター「委員一行はいま、人間工房に到着されました。工房は天界中心部よりかなり遠い、人里、いや神里離れた須弥山（しゅみせん）の谷間に、神様方の優雅な日常を憚るようにひっそりと建てられております。『G教授、人間工房はかつては花形産業、一等地に威容を誇っていたと聞いていたのですが、今はかなり辺鄙な所にあるんですね』」

G教授「いやあ、私もちょっと驚いているんですよ。これを見ますと『人間を造る』という仕事は、天界ではもはや日の当たる産業ではないようですね」

キャスター「では、委員の神様方は今回の査察に、どのような感想をお持ちでしょうか。まずVTRをどうぞ」

《VTR》

委員1「まあっ、人間というものはこのような所で造られているのですか」

委員2「そう、それもほとんど神とはいえない最下層カーストの神たちによってだそうでございますよ」

《テロップ　天国では神様方は女性言葉で会話されます**》**

委員3「左様でございますよ。あれらが無数に繁殖するお陰で近頃の地上界の汚れようといったら」

委員4「そう。その上、あれらは他の動植物を根絶やしにするばかりか、共食いを好むそうではございませんか」

キャスター「いやあ、これは…。人間の評判は余りよくないようです。それにしても人間工房はかなり古い建物のようです。万物の霊長たる人間を造るのですから、相当立派な施設をイメージしていたのですが」

G教授「本当ですね。これではちょっと山奥の古い塵芥処理施設といった感じですね」

キャスター「工房の責任神様によれば、人間は外形部が組み立てられた後、知能と心部分が注入されて出来上がります。その仕事は何千年来変わらぬ勘と経験による手作業で、最近、知能部分は大幅に改良されたものの、心部分などの装置・製法は大昔そのままだとのことでした」

リポーター「ただいま我々は、製造工程の完成ラインにまで参りました。ここでは組み立てられた人間の小さな原型が、錆びた鉄製のかごに詰め込まれ、土間に積み上げられています。作業員の神様方はそのかごから一体一体、原型人間を、脂で汚れた粗末な木の作業テーブルの上につかみ出しておられます。ここで神様は人間の首根っこを抑え、頭頂部をカッターで切り取り、脳を入れ、切り取った頭頂部でカパッと蓋をされます。それから胸のところにあるハートマークにふっと息を吹き込まれます。すると、今まで三十センチくらいだった人間の原型がポンと原寸大に膨れ上がり、むくっと起き上がって完成品ゲートに向かって自力で駆け出します」

G教授「製品規格も完成テストもないのがミソですね」

キャスター「いわばここは工房の最重要工程です。ここで働かれている神様方の服装は…と、特に決められた作業衣などはないようです。太く長い袖の付いたムームーのようなもの、あるいは祭り半纏（はんてん）のようなものなど、皆様それぞれ勝手な格好です。サンダルをつっかけた方もおられます。あっ、あの神様は鼻をほじくった指でそのまま作業をされています。こっちでは長いぼさぼさの髪をぼりぼりと掻（か）きながらの神様も。これはひどい。」

G教授「ちょっとお粗末ですねえ、これは。なぜかな」

キャスター「あちらでは、前の人間に使われた材料が汚れた作業台の上に白くこぼれました。あ、いま神様がちょっと唾（つば）で濡（ぬ）らした指でそれを拭き取って…、次の人間の頭に頭蓋骨の縁で擦り取るようにして入れてしまわれました！　こっちでは、だらりと垂れたムームーの袖に

作業台の黒いほこりが…。あつ、神様がそれを指の先で払い落としたら、出来上がった原料の中に飛び込みました。それを神様は平気で人間の頭の中に」

G教授「いやあ、何とも無神経なやり方ですね」

キャスター「これは、これはショックです。我々人間は、いや、私自身も、こんな状況の中で、こんなずさんな造られ方をしてきたのでしょうか。これでは頭の、そして心の中のどこかにとんでもない暗い陰が宿っている異常な人間ができても仕方ないとも言えます。何とも投げやりな仕事のなさりようです。『G教授！』」

G教授「さっきから考えていたんですがね。私は今まで、我々人間は万物の霊長、この地球上のすべての生物に君臨する者として選ばれ、創られたと思っていたんですよ。しかし、もしかしたらそれは我々人間の思い上がりだったのかも知れませんね。まあ、人間は初めから数々の誤りを犯して来ました。それに対して神はたびたび警告や怒りの試練を与えて来られた」

キャスター「ノアの大洪水のような」

G教授「しかし、人間は愚行を止めなかった。世界各地での戦争、部族間の抗争、殺し合い、そして個人の犯罪による殺戮、非道、その他もろもろの蛮行。神様もいい加減嫌になったのではないかとね」

キャスター「考えれば、人の歴史は愚行の歴史かも知れませんね」

G教授「最初神様は戯れに人間を創った。しかし、後で『これは大変なモノを創ってしまった』と思われたのかもしれません。今や人間は自分自身が棲む地球環境そのものを破壊しようとしている訳ですからね。もしかしたら我々人間は、神にとって最初から余り歓迎されない存在ではなかったのか。そして神は今や我々人間を造るのが嫌になってきたのではなかろうか。人間工房の老朽化といい、人間のお粗末な造り方といい、そんな神様のご意志を表しているのではないのでしょうか」

この調査結果は直ちに天界に報告されました。しかし天界の反応は冷めたもので、天帝はなぜか証人の喚問など徹底した調査には消極的で、いまだに有効な方策をお示しになってはおられません。

戦争と私

吉嵜　清巳

父は百年前、明治三十七、八年の日露戦争に出征、乃木大将の旅順二〇三高地の攻撃に参加した。多くの戦友は敵の機関砲と地雷により吹き飛ばされ戦死した。父自身もここで死ぬと、両親に心で伝えたという。突入してきた敵兵は、戦友の銃剣に刺され、ロシアの大男は顔をしかめて倒れた。父は「戦争とは殺し合いだ、よくぞ生きて日本に帰れた」と酒を飲みながら語っていた。

小学生時代は満州事変。灼熱酷寒の中国・東北の地で戦う兵士の苦労を先生から聞かされた。「今日も学校に行けるのは兵隊さんのお陰です。兵隊さんよありがとう」と私ら小学生は歌っていた。小学五年の一九三六年、二二六事件のあった日は寒かった。三重県伊賀出身の民政党川崎代議士を担いでいた父は、軍のクーデターに驚き、軍の政治介入が強まるのを危惧していた。

案の定、日中戦争は拡大していった。戦死者の市葬は盛大に挙行され、市長を先頭に行列は町を進み、市民、私ら中学生は整列して英霊を見送った。国に尽くした名誉をたたえ、大きな墓石が建てられた。隣の博さんは上海戦線で左肩に貫通銃創を受けた。洗濯屋を営む彼は、寒い時傷が痛むと嘆く。サッカー監督の数学の館先生は、下腿部に銃創。気の毒にもサッカーの指導はできなくなった。私らは学業のかたわら出征兵士の農家に行き、田植え、草とり、稲刈の農作業をしていた。

四一年十二月八日、三重県の旧制中学五年生は軍事演習中であった。私らは三八式歩兵銃を携帯して北軍と南軍に分かれ、翌朝の遭遇戦に備え、霜降る夜の伊勢平野に展開していた。折から民家のラジオから流れる米英と開戦したニュース、軍艦マーチに続いて大本宮発表、真珠湾攻撃の戦果、マレー沖英艦撃沈に、「やった、やった」と歓声をあげて喜んだ。

父は家業の「魚徳」を営み、後継者は私と決めていたが、それは無理であった。一億総動員で戦う時代である。兵役前の若者は軍需工場で働く、中年の商人は国に徴用され、九州の炭坑で強制労働させられた。

私は、手榴弾投げ、二千メートル走力など、体力検定は初級であった。戦時であっても、四二年夏のインカレ水泳は開催され、背泳の私は配給米を持って、神宮プールに出場できた。

しかし、戦況は悪化して、山本連合艦隊司令長官は戦死した。四三年秋は学徒出陣となる。旧制岐阜高等農林は農学と林学科の学生が徴兵された。学業半ばで出征する友は、「浪人までして、やっと入学できたのに、兵役とは」と、涙を流す。農芸化学科は徴兵猶予になった。私ら三十九名のクラスの中には、私大の文系を中退して入学してきた兵役逃れの奴もいた。さて、東京の学徒出陣壮行会の模様は、ときどきテレビで放映されている。東条首相の甲高い声の演説、神宮外苑の壮大な雨中行進。それに反して私らは寂しく、出征学生の武運長久を祈り送り出すのみであつた。

東京・大田・南六郷にある関西ペ・東京工場は、軍需塗料を生産していた。若者は軍に入隊して、残った男は年輩と病弱者で、これに女子従業員と家庭婦人の挺身隊が加わって働いていた。夜間の警備は守衛さんと独身の私らが担当した。私は三日に一度は工場に泊まった。

四五年三月十日夜の東京大空襲は、技術課の山口君の命を奪った。まだ十八歳だった。技術課主任は、水とおにぎりを持って江東に行ったが、山口君の行方はわからなかった。帰社した主任は「これは地獄だ。焼き芋のような黒焦げの人間が、ごろごろと転がる。橋の袂に小さな子供の血の足跡を見たとき、鬼畜米英への怒りで身体が震えた」と青ざめて語った。

三月十日夜、私は品川・大井の独身寮で寝ていた。夜中、ブン、ブンと低空で飛ぶB29の大群、ドスン、ドスンと爆弾の音、対岸は真っ赤、大火災だ。強風も吹き荒れてきた。危なくなったら、大井海岸に逃げようと、寮生は相談、夜明けまで震えていた。

軍の命により、工場内にあった可燃物ドラム缶は、多摩川の川原に疎開してあった。しかし、塗料工場は燃え易いから心配だ。三月下旬の夜、南六郷が攻撃された。焼夷弾の直撃にあった民家の主人は爆死。火災は住民のバケツリレーで消し止められた。焼夷弾の大部分は川に落ち、工場は助かった。

四月、まだ夜間は寒かった。結核を病む技術課長の西川さんと私は工場を巡回中、突然ザアと音がした。危ない！と叫び、二人は防空壕に飛び込んだ。地下水が溜まり、ずぶ濡れだ。昼間は艦載機の機銃掃射、夜間はB29の空爆。飢え。毎日生きた心地がしなかった。

赤紙がきた。私は四月十六日金沢の工兵隊に入隊することになった。西川課長は「お前も行くのか」と落胆。工場の出征兵士壮行会、技術課を代表して石黒さんの新宿駅見送りと、あわただしく。東海道は軍専用のため中央線を経由して、本籍伊賀市に立ち寄った。遺髪を残し、休む間もなく「勝ってくるぞと勇ましく・・・」の市民の歓呼に送られ、市の応召係に連れられて入隊した。

工兵隊では、上等兵や古兵のいじめ、戦車攻撃、鉄舟漕ぎ、穴掘りの厳しい訓練にあっても、三度の食事をいただき、夜は寝られた。東京の生活とは、段違いに軍隊の環境は良かった。八月十五日終戦。「私ら兵隊はどうなるのか」。数日後、見習い士官から「新兵は復員する」との説明があった。「復員てなんだ。家に帰れるのだ」と皆は喜ぶ。沖縄陥落後、軍は本土決戦だといきまくが、私は日本の敗北に、なぜか悔しい感覚はなかった。

九月中旬になっても復員の命令はでない。同郷の池田一等兵は「俺たち若い兵は敵方に捕らえられ、使役に使われるらしい」と心配そうに言う。彼は「隊の倉庫から大豆を盗むから、それを食料に逃げよう」と誘ってくれた。その心配はなく、間もなく二人はフリーになった。

「魚徳」は魚の入荷がなく休業である。伊賀のマツタケは店頭に積み上げられるほどよくとれ、安価であった。私はリュック一杯に詰め、国鉄の闇切符を買って東京工場に出かけた。十月の中頃というのに、年輩の従業員は焼け残った鉄骨の建物のなかで焚き火をしている。皮膚炎になった人もいる。皆は「マツタケ」を見て喜んだが、マツタケより栄養のあるイワシの煮干しの方がよかった。西川課長、若い八木、村上の両名は結核で死に、石黒さんは負傷。戦争の犠牲者である。私ら軍隊帰りは、焼跡整理を始めたが、また、空腹に耐えねばならなかった。

A級戦犯、絞首刑になった東條首相が戦時中に提起した「大東亜共栄圏」は今、平和的手法でASEAN+日中韓にインドが加わった形で進んでいる。

ヨスとの出会い、リチャードとの別れ

吉田　邦彦

平成十七年も押しつまった暮れの二十九日、一通の英文手紙がオランダから届いた。

この半年、たまたま私が入院、通院の状態にあったので手紙もメールもやりとりしていなかった。十月に旅先のフランスから絵はがきを出したが音沙汰もなく、クリスマスカードもこの日まで来なかった。そのまま忘れかけていたところへ、その手紙はついた。

手紙には頼んでおいたリチャード家の庭の四季の写真が九枚と長女エリザベスの説明文があった。続いてもう一枚はリチャードの妻コーリーからのものであった。

コーリーの手紙は私の絵はがきや手紙に対する返事が遅くなったことを詫びるとともに私の素人絵のお世辞を言ったり、フランス旅行が楽しかったことに大変喜んでいるとしたためてあった。

二枚目の出だしが妙であった。「私たちにとって今年はいつもと異なる年でした。そのことを今まで話さないで申し訳ありません。実はリチャードがこの春病気になりました。彼は高熱を繰り返しました。それはひどい高熱でした。血液がんでした。なす術もなく、とうとう七月二十八日に亡くなりました。私たちにとって彼がもう決して戻らないことを悟らなければならないのです。クリスマスには、エリザベスとカロリーヌ、そしてヨスが私の所へ来ることになっています。そのあと一緒にザイストに行き、フィギ家一族が例年の通りホテルに集まってクリスマスを過ごすことになっています。これから私たちはリチャードが一緒にいた時と同じように生き、クリスマスを過ごそうと思います。それが彼を懐かしむ一番の道と思います。（以下省略）」

私たちとリチャード家との付き合いはまだ日が浅い。一昨年、オランダの地方都市ザイストからヨス・ルイジスというホテルマンがオーストラリア出張のついでに、知り合いの留学生の紹介で東京に立ち寄った。彼はザイストでフィギという名の由緒あるホテルを経営してい

る。客室は百室近くあり、世界の王室や歴史上の政治家が宿泊した写真が館内に飾ってある。

彼の二日間の東京滞在中、一日目は私が横浜、鎌倉を案内し、二日目は一人で観光バスによる都内見物をした後、夕食をともにした。彼は日本語はまったく出来なかったが、気さくで親切であった。横浜では同業のホテルを紹介し、特にニューグランドではマッカーサーの部屋や中庭のパテオに興味を示して案内の支配人にいろいろ尋ねていた。

短い滞在だったので自宅に招く時間がなかったが、逆にザイストに来ることを約束させられた。

翌年の六月、私と妻はザイストを訪ね彼のホテルに十日間ほど滞在した。ザイストはスキポール空港から車で小一時間ほどであるが、出迎えてくれたヨスはホテルまであちこち寄り道をしては、運河、風車そしてのどかな牧場や田園地帯をガイドしてくれた。

彼は私達に南部のマーストリヒトに住む姉コーリー夫妻と長女エリザベスに会いに行ってくれるよう事前に手はずを整えていた。

ザイスト滞在四日目に私達は列車で一時間半位離れたマーストリヒトにでかけた。マーストリヒトの手前三十分位前の駅で降り、出迎えてくれたコーリーとエリザベスの車でヨスと同じように回り道をして、マース河や運河を観光ドライブしてくれた。

コーリーの家は中世さながらの都市マーストリヒトの旧市街地にあった。石畳の道路に面した鉄扉の門を入ると、リビングやキッチンの奥に広い庭があった。そこはいろいろな花木や草花があった。初めて夫のリチャードに訪問のお礼やら挨拶を述べ、リビングでお土産や写真を交換して紅茶と、庭でとれたというブルベリーを乗せたケーキを頂いた。コーリーとエリザベスには庭を案内してもらい、庭木や草花に興味があったので、一本一本詳しく説明を聞いたり、写真を撮ったりした。リンゴ、洋ナシ、ブドウ、サクランボ、イチジクなどが植わっており、実をつけたりしていて彼女らにとって自慢の庭だった。

二人は要塞跡のレンガ壁沿いに旧市街地を一時間ほど

歩いて案内してくれた。聖セルファース会、聖母教会など中世ヨーロッパの名残りを今に残している。この間、リチャードは家に残り昼食の用意をしていたようだ。コーリーが案内の途中で携帯電話をかけ、料理が出来上がったようなので家に戻った。

彼は歓待の証しとして大切そうなワインを丁寧に説明してくれたが、いかんせん私達は詳しくないので猫に小判だったかも知れない。私は昼間だし、酔っ払うからと言い訳して二杯で勘弁してもらった。彼は新鮮なニシンの酢漬けと野菜サラダ、牛肉を挟んだサンドイッチをたくさん作ってくれた。私と家内は日本の食事、季節、観光地のことを話題にし、彼らはカロリーヌという次女がミラノでデザイナーの勉強をしていること、エリザベスは来年ベルギーの獣医大学に入る予定とか、自分ら二人は秋に建築学会のツアーで日本を訪れる予定などを話してくれた。私達は秋の再会を約してリチャード家を辞した。

オランダ建築学会のツアー一行はその年の九月に二週間ほどの日程で日本にきて、東京、横浜、仙台、松本、京都などの代表的な建築をみて回った。その合間を縫って一日、東京国際フォーラムで待ち合わせ、青山や六本木ヒルズに案内した。二人とも日本は初めてなので、原宿駅界隈の雑踏にはさすがにビックリした様子で、しきりにカメラを向けていた。

六本木ヒルズでは、時間をずらして昼食をとろうとしたが、それでも混んでいて私が困っているのをみて、リチャードはサンドイッチやマックの立ち食いでいいからと私をかばってくれた。

我が家にはまだ明るいうちに二人を連れて帰り、近所にある弁天神社を見せに行った。リチャードは珍しそうにコイや亀のいる池や本殿の造りを盛んにカメラに収めていた。

家では家内がてんぷら、すしをメインに和食を手作りで用意し、ワインの代わりに吟醸酒で乾杯、二人をもてなした。

さして歳の変わらないリチャードとは、むしろこれからの付き合いと思っていただけに残念で悲しい別れとなった。

言葉は人を育む

芦刈　克

文章を書いていくと、どうしても一方的になる。読む人にどのような興味を持って読まれるのか、できるだけ役に立つような内容にしたいと心掛けている。その意味で私の心の中は相互交流をイメージしている。しかし、実際の作業になると、ほとんど一方的に自分の考えを伝えるような形になってしまう。

それでは寂しいし不安でもある。一人ぼっちの感覚がどこか付きまとうようだ。やはり人間は直接に気持ちを伝え合うことが大事だと感じている。言葉を組み立てる途上、初めて明らかになる瞬間があるように思う。言葉と言葉の新しい繋がりの中にこそ、物事の新たな見方、考え方が宿っているのだ。

言葉は人間の知恵と英知を積み重ねながら力を持ってきた。私たち人間の読み、書き、話し、聞き、見るというコミュニケーションはすべて言葉の力によって貫かれている。対話は、そうした言葉によって成り立つもので、人間が生きる上でとても重要である。だから言葉から離れられないでいる。

過日、四歳になったばかりの孫の女の子が、絵描き道具を両手に抱えて小走りに近寄ってバランスを整えようと、「おっとっと」と言って、リビングのテーブルに両手を着いて立ち止まった。

そこに居合わせた大人たちは、その仕草の滑稽さにどっと笑い出した。その中の母親で、私の娘は、「萌花はどこで、おっとっとなどの言葉を覚えたんだろうか」とちょっと驚きながら笑っていた。私はとっさに、「誰でも何かをやるときは意識しなくとも言葉で行うよ」といったら、傍らにいた友達は、「そうだよな」と返した。

翻って考えてみると、心ゆくまでしっかりと目でとらえ、耳を澄まし、匂いを嗅ぎ、舌で味わい、手に触れ、そうやって体得したもろもろが五感の深いところから生

まれ、そうして感じたことが言葉になることを思い浮かべた。大概の人はその言葉を直ぐさま誰にも語らず、文章にも書かないで自身で呟きながら考え方、生き方、在り方を立ち上げていく。

そして、私は友達の何気ないふうに言った語に継いだ。「何事かに遭遇し『どうするか』と逡巡する。その言葉は迷う心の代弁だ。『分かった。こうしよう』と心を決めた時、その定まり方を『分かった』という言葉がしっかりと立ち上げていくんだ」

「そう、しっかりだよ」と彼は顔をしゃくり上げるようにして言った。そして「失敗し落ち込んでいる子供や大人にも、『こんな失敗ばかりしてたら、先の見通しは立たないぞ』などというのは、不安を増殖させるばかりだ。逆に『ひとつ二つの失敗を乗り超えれば、後はうまくいくもんだ』との声をかけてやれば、失敗を悔やむより、次の成功を夢見る心を立ち上げていくもんだよ」と、その功罪を実体験をもって語った。

一つ一つの状況の中で、それに丁寧に寄り添う言葉がいかに大切なことか。懐かしくも楽しくもあったひと時だった。

常日頃、言葉は生き方そのものだと思っている。言葉を通じてその人の人生が浮き彫りになる。言葉は言葉だけで存在しない。心と内容がそのまま言葉に表れる。

こうした経過からも、言葉は単なる過去の記憶の取り出しではない。口にすることによって、いま生きている自分の意識の中に甦らせている。我々は可能な限り多くのことを言葉にして経験や記憶を蓄えていこうとしているのであって、それは今をよりよく知り、よりよく生きるための不可欠な要素だ。もともと便宜的な記号でしかない言葉だ、などといわず、それらを鍛え世界を押し広げていくべきではないだろうか。

「心で見る」力が衰えてしまうと、すべてを「目に見えるもの」で判断しがちになる。それが恐い。この平凡な日常の繰り返しこそ貴重である。

ユダヤとカトリック教徒の結婚

今川　確郎

キリスト教、ユダヤ教、イスラム教は、源流は同じといわれている。しかし、十字軍時代、中世、近世のみならず、現在においても、これら宗教はそれぞれの大義のもと、殺し合いをして対立、抗争を繰り返している。仏教はより寛大な宗教と思われるが、僧兵といわれたように、異なる宗派間で殺戮を起こしたこともある。

特定の宗教に属していない無宗教者ともいえる私には、西欧の歴史を読むたびに、宗教のもつ独善性と排他性とを痛感する。現在でもイスラエルでは、イスラム教徒とユダヤ教徒の間で、また、北アイルランドでは、最近までプロテスタントたる英国国教徒（アングリカン）とアイルランド人のカトリック教徒との間で、血を流しての報復争いを何十年と続けてきた。旧ユーゴスラビアで発生した民族間のむごたらしい殺し合いも、宗教が深くからみあっている。

平和な時代においても、宗教のこだわりが強い。イタリアにおいては、ユダヤ人の結婚はユダヤ人の間でのみ行われているのが通常である。

私が責任者として駐在した四十年ほど前のミラノ店には、国際取引にたけた若いユダヤ人男性が、現地社員として勤務していた。彼は、毎夏バカンスでイタリアに遊びに来ていた、デュッセルドルフ店の、カトリック教徒のドイツ人女子社員とねんごろになり、結婚を決めた。

ところが、彼の両親は純粋で正当なユダヤ教の家系だったので、「長男が、カトリックのドイツ人女性と結婚するとは！」と、特に男まさりで頑固な母親は猛反対した。オフィスにまで押しかけて来て「何とか二人の仲を切り離してくれ」と、無茶な依頼をする有り様だった。

戦後二十年の頃ヨーロッパでは、六百万人もの同胞を抹殺した「ナチス・ドイツ」への恨み、憎しみが、ユダヤ人の体にしみこんでいた。ナチスとは関係のない戦後生まれのドイツ人に対しても「許せない」との感情を抱いていたようだ。一方、彼女は、典型的なドイツ人の性格で、強烈に自己を主張するタイプだった。二人の頑固

な女性が、オフィスに来て言い争った時は、一生忘れ難いほどのものすごさであった。

ドイツ女性は日本商社に勤務していただけに、英語力は抜群で、立板に水を流すようにしゃべりまくった。一方、彼の母親は、家族、親戚の間でフランス語でしか話さないので、英語はあまり上手ではなく、また五十代の年配者だったので、どうみても押され気味だった。

現地社員には休みの、土曜の午前のことだった。彼の母親が息子と共にオフィスに来て、「彼女と縁を切らないなら死んでやる」と叫び、五階のベランダの端に足を乗せ、今にも飛び下りそうな格好を見せた。「本当だったら大変」と、あわてて母親をフェンスから引き離した。息子の方は、このような母親の脅しには慣れているのか、「大丈夫だよ。気にしないで」と言いながら、平気な顔でタバコをふかしていた。

種々、いきさつがあったようだが、一年後には彼女の方が（表面的とは思われたが）ユダヤ教に改宗したので、彼の両親も折れてきて、ユダヤ教の儀式で簡素な結婚式をあげることになった。

宗教上、中立な立場にある私に、結婚式での立会人となってくれるよう、両者から強く要請された。私の置かれた立場もあり、さらにはまたとない経験と思い、快く引き受けた。立会人といってもユダヤ教徒と同様に、小さい円型の帽子を後頭部に乗せ「花婿、花嫁が、私の前で宣誓したことに間違いありませんね」という、（前もって教えられた通りの）質問をしただけだった。両者とも「ハイ」と返答するのみで、何となく「拍子抜け」の感じがした。

ユダヤ教は「救い主（メシヤ）はまだこの世には来臨していない」として、キリストが神の子であることを否定している。私は、この点がキリスト教との根本的違いであるとの漠然とした理解しかない。二千年も続いた両者の争いが、現在このような形で解決（?）されていることが、人類には至って幸せなことだと思われた。

その後、彼等は二人の娘に恵まれ、幸福な生活を送っている。形式的であったにせよ、「立会人」を仰せつかった者としては、何より祝福すべき現実と感じている。

会津のみほとけたち

遠藤　俊也

会津というと、たいていの人は維新戦争の時の鶴ヶ城、ないしは白虎隊の飯盛山を思い浮かべるにちがいない。

わたしもそうだった。それが、ことし五月、古寺巡りのツアーに参加してみて初めて、この会津地方がかつては北国の仏教の中心地だったことを知り驚いてしまった。平安初期から鎌倉時代にかけて造られた優れた多くの仏像にお目にかかれたのだ。

案内役にも恵まれた。仏教美術の研究者で福島県立博物館の学芸課長を勤める若林繁氏だ。最初の訪問先は、磐梯町の慧日寺跡だった。最盛期には寺僧数千を数えた大伽藍で、現在国の史跡として発掘調査中であり、やがては金堂と中門の再建が計画されているとのこと。寺跡の奥には「徳一廟」が残っている。

南都で修行したというこの法相宗の高僧徳一が、会津の地に根付き、慧日寺をはじめ多くの寺をこの地に開創、薬師信仰を広めた。この徳一大師がなかなかの人物だったようだ。

空海とも接触があったらしいが、最澄とは反りが合わず、数年にわたり激しい論争を続けた。最澄は晩年、代表作「法華秀句」を著したが、この著作が徳一との論争の最後となって翌年五十六歳で世を去っている。絶え間なく続いた徳一との論争のおかげで最澄は自らの思想を形成していったのだと説明する学者もいるくらいだ。

話を仏像に戻そう。

会津の仏像の代表格は、何といっても湯川村勝常寺の本尊の国宝薬師如来坐像である。今は他の諸仏とともに、新しく造られた収蔵庫で拝観できる。高さ一メートル四十。平安初期の傑作である。都の一流仏師の手になるものに相違ない。よく拝観しているうちに、かつて訪れた京都高雄山神護寺の本尊薬師如来を思い出した。同じ頃の製作のせいか風貌がそっくりなのだ。柔和な面立ちの中にも威厳があり、肉厚でどっしりとした体躯は頼もしい。衣文にも大波小波が交互に漂う翻波式が見られる。

両脇には日光、月光両菩薩がたたずんでいる。円満な

顔、優美な体の線が印象的だ。同じ一堂に並ぶ聖観音、十一面観音、地蔵菩薩、四天王等、みな平安の作で国の重文である。

先に触れた徳一大師の木彫り坐像がここにあった。長い年月のせいか縦に深いひび割れが無残に残る。その不敵な面構えを見ていると、彼が強烈な個性の持ち主だったことがうかがわれる。

勝常寺の近くに、上宇内（かみ）の薬師堂があった。見逃しそうなくらいの小さなお堂だ。堂守りに来てもらって中を拝観できた。結構大きくて堂々とした薬師如来坐像である。これも平安期の作で重文だが、先に観た勝常寺のそれに比べると見劣りがする。左右やや不均等で稚拙さが見え隠れしている。案内役の若林さんの話では、土地の仏師が勝常寺の薬師を手本にして造ったのでは、と。また、この種の平安から鎌倉期にかけて造られた薬師如来像は会津地方にはかなりあるとのことだ。

あと特に印象に残ったのは喜多方市にある新宮熊野神社だった。長床（ながとこ）と呼ばれる国の重文の細長い拝殿は鎌倉初期の造営であり、規則正しく並べられた四十四本のケヤキの円柱は見応えがあった。また、地元の人びとによって建てられた立派な鉄筋の宝物殿には、獅子に乗った文殊菩薩像が陳列されていたが、平安末期の作品だけあって定朝風の端正かつ円満な顔立ちは見ていて飽きがこなかった。

今回わたし達は見切れなかったが、この他にも優れた仏像が少なくないとのことだ。会津大仏と呼ばれている願成寺の木造阿弥陀仏坐像、田島薬師寺の薬師如来立像など鎌倉期の作品はいずれぜひ観てみたい。

（二〇〇五年十二月記）

鎌倉寸景

千曲川源流を遡る

大月　和彦

秩父山地の高峰甲武信岳に源を発し、長野、新潟二県を貫いて流れる日本最長の川、千曲川（信濃川）の源流を訪ねようとある秋の朝、ＪＲ小海線の信濃川上駅に降りた。前夜予約したタクシーで甲武信岳の登山口毛木平を目指す。

信州の最東端にあるここ川上村は、千曲川上流に沿って集落が続いている。最奥の梓山という集落には、小学校、旅館、商店などがあり市街地になっている。ここを通り過ぎると広々した野菜畑が広がる。この辺は標高一二〇〇ｍ～一三〇〇ｍの高冷地。キャベツ、レタス、セロリなど高原野菜の有数の生産地で、首都圏だけでなく全国に出荷されていると運転手さんが自慢する。収穫が終わった農場を過ぎ、紅葉した雑木林の中にある毛木平に着く。

秩父への道と分かれ、源流に沿ってカラマツ林の遊歩道を歩き出す。運転手さんが教えてくれたベニバナイチヤクソウの群生地は見つかるが、花は散って葉だけ残っている。

登山道は、ありふれた谷川の姿になった千曲川源流とつかず離れずの距離をとっていて、絶えず谷川の音が聞こえてくる。渓谷は広く、明るい。樹相はカラマツ、ダケカンバ、リョウブなどの若い樹木ばかりなので深山幽谷の趣は全くない。緩やかな登り道がずっと続く。

渓谷がぐっと狭まり、左岸につけられた道を谷川近くまで下ると、大きな岩の間で流れが白く噛み合い、瀞（とろ）や滝を作っている。流れは細くなったり、大きくなったり、急斜面を滝のようにすべり落ちたり、何本もの細い流れをつくったり、自由奔放に姿を変えている。苔むした倒木が、水路といわず岸辺といわずごろごろ転がっている。流れがゆるくなる地点では浅い水底一面が緑の水草で覆われ、下流になびいている。人の手がまったく加わらない河川の原始の姿を見る。

渓谷の両側がカラマツとコメツガの生える緩やかな斜

面になり、上流方向のV字状になっている谷間の上に青空が見える。

樹林帯に入ると、谷川は次第に狭くなり、流れも細くなる。流れからしばらく離れて、急斜面の登高が続く。

と、樹林が切れ、小さな空地が現れる。「千曲川・信濃川水源地標、国土交通省」と記された太い木柱が建っていて、谷川方向に立ち入り禁止のロープが張ってある。

ロープをくぐり抜けて下りていくと、苔むした岩石の間に窪みがあり、朽ちた老木の株とダケカンバの曲がった幹の下が小さな水溜りになっている。よく見ると、木の根と岩の間から水が滲み出ているらしく、一方からせせらぎのように水が流れ出ているのが分かる。このせせらぎが全長三六七ｋｍの千曲川の源流だ。清冽な水が岩の間からこんこんと湧き出る情景を想像していたので、がっかりする。このところ降雨が少なく、地下水が枯渇した時期だからかも知れない。

わが国有数の大河千曲川は、この朽ちた老木と落ち葉の沈んだ水溜りから始まっているのか、と感慨を深くする。

源流と別れて山頂を目指す。ツガ林の中の急なジグザグ道を登りつめて山梨県との分水嶺に達する。さらにシャクナゲの群生する尾根道を東に進み、小さな岩稜を登り切って標高二四七五ｍの山頂に着く。「日本百名山甲武信岳」という標識が建っている。

東と北側は樹木が生えているので眺望ゼロだが、西と南の方向には八ガ岳、金峰山、甲斐駒ガ岳と北岳など多くの名峰を望むことが出来る。手前の深い渓谷が登ってきた千曲川の源流域で、見事に紅葉している。

甲州、武州、信州の三国がこの山頂で接して、同時にここは、日本海に注ぐ千曲川、東京湾に注ぐ荒川、駿河湾に流れる笛吹川（富士川）の三河川の源流という特別な地点になっている。

山頂から潅木に挟まれた急坂を下って山梨県側に建つ甲武信小屋に着く。昔の雰囲気が漂う古い山小屋で、寒さと煙と狭さに悩まされながら一夜を明かした。

私の怨霊史観（その二）

大野　昱

昨二〇〇五年末から、日本海側に降り続いた記録的な豪雪は、一月中旬には、大量の降雨によって全層雪崩の危険があると報じられています。新潟県は昨年の大地震に続く、今年の豪雪です。江戸時代より昔の祖先なら、つまり明治維新前の人々は、このような天変地異をどのように解釈してきたのでしょうか。

梅原隆の『法隆寺』によって明治以降の眠りから覚め、丸谷才一、井沢元彦によって再評価されつつある怨霊史観をこの二十一世紀に投影すると、何が見えてくるのでしょう。縄文以来の正常な日本人の感覚に照らせば、これは祟り以外の何物でもありません。ロッキード判決後に、田中角栄に二十二万七百六十一票を投じて、田中金権支配構造を作った新潟県民の子孫に対する天の成敗としかいいようがありません。この一年を振り返って見ると、最も印象に残った出来事は、流行語大賞にもなった『小泉劇場』による自民党の総選挙での圧勝だったと思います。郵政民営化を争点とするこの争いは国民にいろいろのことを教えてくれました。最初は抵抗勢力と呼ばれる郵政民営化反対の勢力が衆議院では僅差、参議院では逆に郵政民営化法案を廃案に追い込みました。

参議院で決定的な役割を果たしたのは中曽根元首相の息子でした。ここで国民は田中曽根内閣といわれた中曽根首相誕生の時の、特定郵便局長を総動員した田中角栄の総裁選での働きを思い出しました。中曽根父子はこの権益にどっぷりとつかっていた政治家なのです。

昔の政治家ならここで内閣総辞職でした。しかし、小泉さんは違いました。「国民の真意を問う」と衆議院を解散しました。そして、衆議院で反対票を投じた議員は公認から外して、欠席議員との間を分断しました。さらに、反対議員の選挙区には刺客と称して対立候補を立てたのです。

ここで国民新党を作った綿貫民輔と亀井静香は致命的な誤りを犯します。五人目の議員として民主党の田村参議院議員の名を連ねたのでした。彼は昔からの小沢一郎

の股肱の臣だったはずです。国民の眼にはっきりと映ったのは、自民党の抵抗勢力と民主党の小沢一郎を結ぶ地下水脈でした。綿貫も小沢も元はといえば、田中派から竹下派と常に利権の中枢にいた議員です。

この一年で国民が率直に感じたのは、官、財、学まで巻き込んだ抵抗勢力の利権に対する執念だったのではないでしょうか。

『小泉劇場』は、そういうコケにされた国民の怒りの表現だったのです。与党が三分の二を取ったということは、参議院が反対しても、郵政法案は国会を通るということです。もっといえば、盲腸みたいな参議院はこの際潰すか、半分にしたらどうか、という国民の気持の表現だったと思います。

もう一つ憲法改正の可能性がでてきました。

政界の勢力図について、別の角度から見てみましょう。今回も旧橋本派と小沢一郎との間の地下水脈が見えましたが、かっての竹下七奉行の行方を見てみましょう。

他界したのが梶山静六、小渕恵三、奥田敬和の三人です。橋本竜太郎が今回の選挙で引退して、自民党から七奉行が消えました。しかしです。民主党にはまだ小沢一郎、羽田孜、渡部恒三と三人も昔の名前で出ているではありませんか。これを見て、国民は民主党を清新で、何かを期待できる政党と思えますか。もう少しいえば鳩山由紀夫も岡田克也も田中、竹下派だったのです。

この民主党を旧竹下派支配から開放する手だてはあるのでしょうか。ウルトラCがあります。総裁任期の切れた小泉さんを代表に迎えるのです。経済界では前例があります。デンマークのカールスベルクとツボルクという相争う二つのビール会社は、カールスベルクの父が作った会社です。抵抗勢力排除のために、小泉さんにもう一度働いてもらいましょう。

最後に「じゃあ島根県に祟りはないのか」という質問が出るかもしれません。

一昨年島根県議会は「竹島は日本の領土」という決議をしました。これを怨霊はよしとしたのだと思います。新潟県民も何らかの誠意を示さないと災害はまだ続くかもしれません。

（文中敬称略）

母の決断

大平　忠

私の母は、何事も決めるのが早く、また決めたことを行うのも速かった。その母が、私の記憶ではただ一度決めかねて迷いに迷ったときがあった。それは、昭和十九年から二十年にかけて、食料不足が深刻化し空襲も始まり、東京から故郷の四国へ疎開をしようかすまいか、したいけれどもできないと悩んだときであった。

当時我が家は東京の杉並にあり、四国には母の祖父母、父の兄がいて、あるとき「そろそろ戻って来てはどうか」との誘いがあったようである。昭和十九年といえば、私は国民学校の一年生で、ときどき母の食料品買出しにもリュックサックを背負ってついて行ったことがあった。夏には八王子の方へカボチャを、秋には多摩川を越えてサツマイモとか梨を買い出しに行き、背中に担いでくたびれきって帰ってきたことを覚えている。しかし、その年も冬になると、カボチャ、サツマイモのストックも底をついてきて、すいとんの具にも事欠く毎日になった。母は、中学生の次兄と私の栄養不足をもういかんともし難い状況に陥っていた。警戒警報から始まって空襲警報も頻繁となり、私は防空頭巾を被ってB29を気にしながら学校から走って帰ることもあった。

その頃、軍人であった父は外地スマトラにあって消息不明、ただ無事を祈るばかり、長兄は陸軍士官学校在学中で、母は二人に相談することもできない。父の従弟が大蔵省にいて、「姉さん、四国へ帰らないと危ない、この戦争はもうだめだ」と助言してくれた。母はそれでも疎開をする決心がつかなった。父と長兄のことを考えれば、軍人の妻であり母である立場から、東京から四国へ疎開することは、非常事態なるが故にいよいよできないと感じていたからである。母はときどき、「四国に帰ればおなか一杯御飯が食べられるのに。でもお父さんのことを考えるとね」と私に呟いていた。あの頃が母の一番辛かった時であろう。私は、空腹の毎日がたまらないのと、四国ではおじいちゃん、おばあちゃんと暮らせるので、「早く四国へ行きたい」と、口から出そうになる。

しかし、母の態度には何かしら、そう言ってはならないような気配があり、子供心に言うことをはばかられた。

ところが、辛抱に辛抱を重ねた母の決意を覆す出来事が起こった。昭和二十年に入って間もなく、一月のある日のことだった。東京の一月は晴天が多い。その日も快晴、ひとかけらの雲も無い青空だった。午後何時頃だったろうか。空襲警報中であったので母とふたり家の庭に掘った防空壕に入っていた。突然どかんと途方もなく大きな音と振動が全身を襲ってきた。防空壕は地下なのに激しく揺れ、私はもうだめかと頭を抱えた。家から百五十メートルのところに一トン爆弾が落ちたことが、しばらくしてから判明した。杉並、中野の付近は、工場地帯への爆弾投下が終わったはずの米軍機が、残りを落としていくことがときどきあり、どうもそれだったらしい。

さすがの母も、この爆弾が至近距離に落ちたことは大変なショックだった。翌日四国への疎開を決断した。

祖父母に連絡を取り、父の従弟に次兄を預かってもらうことにして、四国行きの切符の手配も頼み、引っ越し梱包屋もどこからか探してきた。この一連の動きを、あっという間にやってしまった。ひょっとしたら、疎開の場合の段取りはひそかに考えてあったのかもしれない。

家財道具を梱包し始めると近所にも知れる。あるとき、門の前に退役軍人らしき男が立って、大きな声で怒鳴っていた。母に聞いたら、「軍人の妻が疎開とはけしからん、非国民だ」と言っていたそうだ。心配顔の私に、母は、「何と言われてもいいの、食べる物も無いし、爆弾がもっと落ちてきて死んでしまうかもしれないのだから」と、このときは迷いも吹っ切れ、はっきりとした口振りであり表情だった。

しかし、母の心には痛みがあったはずで、男の言葉に更に傷口に塩をすりこまれる思いがしたことであろう。

母と私は二月十日過ぎには、四国の祖父母の家にいた。それから一カ月もしない三月十日の東京大空襲で、杉並の我が家の周辺が全焼したことを知った。

終戦六十年、軍人の妻としての「道」と、生きるための「現実」との間で揺れた母を、無性に思い出す年であった。ようやく、母の気持が分かってきたからかもしれない。

去年今年

木下　洋介

今や師走の慣習になっている喪中はがきだが、以前は「父何某……」あるいは「母何某……」が死去したのでだったが、いつの間にか「夫何某……」と主役が私と同世代へと交代してきている。特にこの年末はなぜかこれが多かった。そんなはがきを手にして、彼奴も逝ったかと、しばし無常の世界の感慨に浸る。と同時に、「次はお前の番だぞ」という声がどこからともなく聞こえて来るのである。

喪中とは知らずに賀状を出すと、やがて「喪中だったので失礼しました」というはがきが届く。そうこう考えているうちに「皆々様のご多幸をお祈り申し上げます」などと印刷された「一見無味乾燥に見える賀状が、実はこれはこれで生存証明になっていることに気づく。賀状が生存証明になっているならばと、賀状の送り先リストを改めて見ると多彩であることに気づく。中には人体、風貌が即座に浮かんで来ない人がいる。

かれこれ六十年前、受験のため上京したとき世話になった人に毎年出してきた。はじめは世話になった礼を兼ねての挨拶だったが、そのうちに近況報告を添え書きするようになり、やがて年賀状の交換をやめる理由がなくなってしまい、現在も続いているというわけである。このままでいくと私か、先方かのどちらかが死ぬまで続けざるを得ないのではないかと思いながら、今年も賀状を書いた。

年賀状といえば思い出すことがある。学校の先生が教え子から来る賀状に返信を書くのは卒業した年だけにしているという話である。毎年何十人いやそれ以上の教え子から届く賀状に応対していては大変である。そこでそのあとは例外なく出さないことにしている。例外を作ったらまた整理不能になってしまうというのだ。

あるとき電車の中でこんな会話をしているグループがあった。年賀状についての会話である。年賀状の交換をやめるには三年かかるというのだ。まず、この人には年賀状をやめようと思ったら出さないことだという。出さ

ないと決めたら絶対に出さない。先方から届いても絶対に出さない。こちらが何かの手違いで出さなかったのではなく、ある意思によって出さないということが伝わったら先方から来なくなるというのだ。だから途中で気が変わって三年目にでも思い出したように出そうものなら、賀状交換が再開してしまう。聞いていてなるほどと思いながら、最近はパソコンに任せている人もいるだろうから、果たしてどんなものかと思った。

さて、私もその気になってリストを見るとやめてもいいと思えるものは数枚しかないことに気づく。親戚筋とか友人関係とか迷うものが多い。私の死んだあとこのはがきの束を見て家族はどう処置するだろうか。そもそも亭主はこのはがきの束とどういう付き合いをしていたのか、知らない者が多くて困るだろうと思う。そのためにもいつかは整理しなければならない。

と、そんなことを考えて迎えた正月、あらまし次のような決意をこめた賀状が届いた。

私も古稀を過ぎ、また新たな気持ちで今年を過ごしたいと思っているが、年々予定通り事が運ばなくなり、今年から生活を単純にして充実した日々でありたいと考えた。それで年賀状は今年で終止符を打ちたい。長い間ご厚誼を頂き本当に有難うございました。然し、何かの折には今まで通りお知らせ頂きたい。勝手な申し出をお許し頂きたい。

この人は年賀状全部をやめたわけではないかも知れないが、とにかく自分の意思で年賀状を拒否したのである。賀状の束を見ながら、私もこの人のように、友人知人の年賀状に終止符が打てるだろうか。

しばらく考えた。

この賀状の束の一枚々々は、私の半生になんらかのかかわりあいがあった人からの生存証明である。それを今更「都合によりやめます」ではないだろうと思い、また、袖触れ合うもなんとやらというではないかと思い、結局、長十年あっていないあの人をはじめ、多くの人と今まで通りの付合いをするだろうと思った。

日中友好めでたしめでたし

黒崎　昭二

中国は国共内戦が終わった後、しばらくしていわゆる五人組の専横が始まった。大学の教授や研究者など知識人といわれる人は、農業などの現業労働に従事させられることもしばしばだった。しかし、一方で技術を高め、経済を興して国力を向上させようという動きも出始めて、科学技術の勉強が見直され、海外への留学も奨励された。

ほぼ十年前、西安大学を卒業したホウマレイさんとチャンシャオジンさん夫婦は一人娘を祖父母に預けて日本にやって来た。東京農工大と東京都立大学の大学院にそれぞれ合格し、より高度の勉強をした。よい研究成果がまとまり無事卒業が出来た。ここで彼等は考えた。中国に帰るか日本に残るか。日本に留まって仕事をすれば、より高い内容の仕事が出来るし、好みの仕事も得られやすい。仮にもし将来中国に戻ってもよい就職が出来るらしい。日中両国の懸け橋になるような素晴らしい仕事にも就ける。そこで身元保証の日中友好交流協会幹部に日本での就職を頼んで来た。その副会長の大崎介蔵君が走り回り、二人に格好の仕事を見つけた。私はこの時日中友好交流協会の人間ではなかったが、小学時代からの親友の大崎君に頼まれて協力した。

この中国の向上心の強いエリートと親しくなったのは、ありがたいことだと思っている。

旦那のチャンさんには精密機器製造会社の研究室を世話したし、奥さんのホウさんにはＩＴソフト制作会社のシステム作成の仕事が見つかり、二人の生活の基盤が出来た。あとは一人娘を中国から呼んで一家で暮らすために八王子に住居を構えた。生活は安定した。娘さんは八王子で中学から高校まで学んだ。この子はよく勉強して、なんと東大文２類に合格した。将来は経済学科に進みたいといっている。

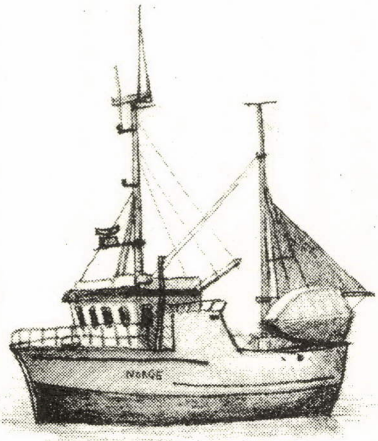
平成十五年正月、一家は日本への帰化を申請し、認められた。現在日中は政冷経熱の関係にある。政治の世界では歴史認識をめぐって対立があり、靖国問題で揺れて

いる。しかし、この一家とは全く関係がない。話せばわかるのである。特に日本は満洲事変とか支那事変だとか中国本土に軍隊を派遣して戦闘状態を引き起こし、民衆の生活を荒らしたことは事実であり、反省の必要もある。

もっと遡れば西欧諸国のアジアへの植民地政策に対して、日本は大国清国に代わって断乎として戦ったのだともいえる。東アジア諸国へ侵略したのではない。米英の経済制裁により資源の乏しい日本は自衛のために立ち上がったのである。戦争に敗れたが、結果として欧米の植民地だった地域がほとんど独立した。

中国の卓球選手やソフトボールの選手は、その世界の一流であり、日本人を刺激し指導するためと便利な生活のために日本国籍をとるが、この一家の場合は頭脳の中国からの流出である。日本は優れた技術を得たのである。IT情報システムならびに高度の自動制御技術の頭脳である。実際チャンさんもホウさんも現在の仕事では高く評価されて会社に貢献している。

さてこの一家の日本姓は「国川」となった。国川久さん。国川馬麗さん。国川雨那（イイナ）さん。いろいろ考えたらしい。十年前は単に勉強の手助けをしただけだったが、本人たちの努力もあったが、高いレベルの日本人として今後対中国だけでなく国際的にも活躍してほしいと思っている。



ノルウェーの漁船

インドネシアの友人たち

荘　司　忠　志

第二次大戦が終わり、インドネシアが共和国として独立して、スカルノ大統領は賢い選択をした。日本からの賠償金を使って多くの若者を一九五三年頃から日本に留学生として派遣し始めた。留学生は東京柏木にあった国際学友会館に寄宿し、半年ほど日本語を学び、それぞれの希望する大学に進学し、インドネシアが当面必要とした医学、水産、電気、機械、農業経済などを学んだのである。一部留学生は運輸省の船舶研究所で造船工学を学んだ。最初の半年教室で学び、次の半年は東京近辺の造船所で実地研修する課程を繰り返し、五年で修士号を得た。インドネシア政府が修士号相当と認めたのだ。

当時の私は、今でいうフリーターのような日々だった。しばしば学友会館を訪れ、時には彼らの日本語勉強の手助けをし、時にはインドネシア語を学んだ。やがて私は大検を経て東京外国語大学に入学してインドネシア語を専攻し、卒業後重工業会社の造船部門に職を得たので、特に造船工学を勉強した十五人の留学生達との交友が深まった。

私の結婚披露宴には留学生の多くが出席してくれ、芸達者な彼らはインドネシアの歌や踊りで質素な披露宴を盛り上げてくれた。彼らが帰国するとき、私は妻と横浜港に見送りに行ったが、生涯の別れかと寂しい思いがした。しかし、それはやがて杞憂に終わった。翌年早くもインドネシア向けの新造船の引き渡しで、私はジャカルタに出張し、友人達との再会を果たした。

彼らは後に政府高官となり、ヨーロッパ出張の途中、当時ギリシャに駐在していた私を訪ねてくれたり、さらにシンガポール駐在時代にも頻繁に会うことが出来て、彼らとの親交は続いた。

一九八二年のある日、私は駐在していたシンガポールからジャカルタを訪れ、ヒルトンホテルで開かれた友人のお嬢さんの結婚披露宴に妻とともに出席した。新婦の母親は日本人である。披露宴には、かつての日本留学生

が多数出席しており、その晩は元日本留学生の同窓会のようでもあった。披露宴が終わり、友人たちが私のホテルの部屋に集まった。私は二次会を予想し、贅沢なスイートを予約してあった。部屋に集まった七組の夫婦のうち五人の夫人が日本人だった。そのため二次会での会話はほとんど日本語だった。夜明け近くまで続いた懇談の最後は、「有楽町で逢いましょう」の合唱で盛り上がった。

日本女性と結婚した友人たちも、何人かは不幸な離婚をしている。A君やB君の東京での結婚式には私も出席したのだが、A君の場合、夫人ともども故郷に帰り数年すると、婦人は離婚して日本に帰ってしまった。A君は回教徒であり、日本留学以前に故郷には、インドネシア人の奥さんがいたのだ。それでも夫人は、他の奥さんがいるとも知らず、次々と三人の子供をもうけた。しかし、やがて彼女も他の奥さんがいることが分かり、怒り狂って三人の子供をインドネシアに残したまま帰国してしまった。B君の奥さんは、インドネシアに着いてみて、生活苦や文化の相違に驚き離婚し、半年もしないうちに日本に逃げ返ってしまった。こうした、インドネシアに嫁した日本人妻については、上坂冬子著「二つの祖国に生きて」に詳しい。

留学生たちが帰国したスカルノ時代は、インドネシアの経済も発展しておらず、インフレも激しく、元留学生たちは、ほとんどが役人になったものの生活は苦しかった。しかし、その後彼らも急速に出世階段をのぼり、各省庁の幹部や局長になり、個人の生活も向上した。私が仕事でインドネシアを訪れると彼の家に招待されることもあったが、そのたびに驚きばかりだった。豪邸の新築、数台の新車、中には役人の収入で息子四人をアメリカに私費留学させていた。スカルノ、スハルト大統領の時代、元留学生たちの多くは〝汚職〟を十分に享受?していたのだ。私は彼らと会うたびに〝お金持ち〟の彼らを見て複雑な気持ちだった。

ともあれ、元留学生たちは、多くの子供や孫たちに囲まれ、幸せな老後を楽しんでいる。彼らは国家の要請に応え〝賠償留学生〟として日本に学び、留学の成果を十分上げ、その勤めを果たしたのである。

医療データベース作成と公開を

杉浦　右蔵

健康保険財政健全化に向けて、患者側からの提案です。

日本の医療の仕組みを考えて変だと思いませんか。老人医療費の負担増など財政は限界にきて、公平負担の名目のもと負担増ばかりを検討しています。その前に医療制度の仕組みを改善することが先決だと思います。まず患者の重複検査を止めることです。

我々人間は体の具合が悪くなるとお医者さんに診てもらいに行きます。お医者さんに行くケースはいろいろですが、分かり易く初診の場合を取り上げて提案を論じます。

初診の場合、通常医師は新規患者として、血液・レントゲン・胃カメラ・薬事治療などを行います。ここが問題なのです。成年患者の場合、過去にどこかの医療機関の世話になっているはずです。健康診断もしています。診療に当たり医師が「医療データベース」にアクセスすれば、患者の過去の病歴が直ちに分かり、迅速適切な検査処置・治療処方をすることが出来ます。

1医療データベースを実現するには、

・国民全員の背番号が必要です。背番号はすでにあります。平成十四年八月「住民票コード交付通知」が全国民に、各人十一桁コードで通知されています。（住民基本台帳ネットワークシステム・平成十五年八月より第二次サービス開始）

・各医師は自分の医療機関のコードとともに、住民票個人コードをカルテに付けて個人医療情報を医療データベースに登録する。この登録作業は国が行う。

・各医師は医療データベースに接続して患者の住民票コードを入力すれば、該当個人の診療履歴とデータが瞬時に閲覧できる。さらに、高度なCT、MRI、胃カメラなど画像システムの閲覧も含める。高度な画像システムの閲覧は閲覧課金の方法もある。

・医療データベースと入出力は、国家管理のe-Japanの

一環として実施するもので、個人プライバシーの保護法に関係するので、厳重に国家管理し、乱用を防止し罰則を設けて運用を法制化する。（政府専門審議会で検討する要あり）

2国・患者・医師・薬、のメリットとして、

・医師は患者の病歴が瞬時に分かり、確度の高い患者診療が期待できる。

・患者は医療検査の苦しみの重複負担が軽減される。

・健康保険の給付や負担について重複検査を回避することにより、財政の節約健全化に大きな経済効果が期待できる。健保財政の健全化が期待できる。

・経済効果が期待出来ることで経済効果余力を、医師の診療手当てアップ、薬の値段適正化などの改善に使用し、余計な医療出費行為を禁止する。

3患者側からみた現状の医療について

・医師は国家試験資格を持っている。専門以外の知識技量の融通性を高める。

・大学系列というメリット・デメリットの垣根を超越してすべて融通性を持たせる。

・診療機器は大同小異、あまり差がない。例えば、医療機関の血液検査などは、外注している現状。大病院の自前検査も、使っている機器・試料はあまり変わらない。レントゲン機器、ＣＴ機器、ＭＲＩ機器なども、国産、外国製とも製造会社は限られている。機器運用も資格者が操作している。従って、検査結果データは、どこの医療機関が相互に利用しても信頼できる。

・診療患者の検査項目は、患者の最新の病状診断するために必要な医師が判断する最小検査項目だけに減らすことが可能である。

最近のＩＣＴ技術の進歩は著しい。医療データベース公開共通化は実現可能です。問題は、政府の政策と医師側の協調です。早期実現が望まれます。

（筆者：技術士・電気電子部門）

私のプロジェクトX・梅毒の内服薬

玉山　和夫

梅毒はコロンブス隊員が新大陸から持ってきて急速に全世界に広がった。日本にもすぐ伝わり加藤清正、結城秀康など大名の何人かが梅毒にかかり苦しんで死んだと言われている。梅毒は特異な細菌の感染によって起きる悪病で治り難く、一九八〇年ごろまでは治療にはサルバルサン、ペニシリンなどの注射薬が必要とされていた。しかし、注射薬は医者に行かなければ打ってもらえず価格も高く、しかも大部分の人には耐え難い副作用がでるので嫌がられる。また医者に通い継続して治療を受けさせることは容易ではなかった。そのため低所得者層・売春婦や開発途上国において梅毒が蔓延(まんえん)しており、これの改善は遅々として進まず社会的な問題となっていた。

そのころ私が社長をしていたビーチャム薬品株式会社の学術部長・古武弥久は同社で販売していた抗生物質アモキシシリンが、他の抗生物質に比べて人体内の組織への浸透が格段に優れているので、梅毒治療に有効である可能性があると考え、これについて各種の実験を行うことを提案した。医薬品はひとつの効能を表示するについても細かい試験研究データを添付して厚生省に申請しなければならず、かなりの費用と時間を要する。

このことを、アモキシシリンを日本で共同開発した大手の藤沢薬品と協議したが、こんな研究をやっても労力と費用の無駄使いになるだけだとして協力は得られなかった。内服で梅毒が治るわけがないと思っていたのである。また英国の親会社も薬理作用などを示す動物実験に犬を使うことに難色を示した。当時英国では製薬会社は犬を実験動物として多量に使い甚だしい苦痛を与えていると動物愛護団体から激しく非難されていたのである。しかし、日本の厚生省の許可は、犬に梅毒を感染させる実験を行わなければ得られない。

この対策をいろいろ検討した結果、社長・玉山和夫の決断で、許可の可能性の見通しがつくまでは、親会社や

社外に秘密として試験研究を行うこととした。古武は性病専門の診療所の小野田医師に依頼して、梅毒患者にアモキシシリンを経口投与した。最初の数例は一日三回二百五十ｍｇのカプセルを投与して一カ月で完治した。それで見通しがついたので臨床治験を続け必要なデータを得た。動物実験主任の幸嶋祥旦は設備の十分でない実験室で許可申請に必要な実験をやりとげた。集まったデータで厚生省はアモキシシリンの梅毒への効能追加を承認した。梅毒が内服薬で治ることが世界で初めて認められたのである。

この方法では、患者は一度医師の診察を受け、投薬されたカプセルを一日三回毎食後服用すればよく、苦しい副作用のある注射のために医者に通う必要も処置料もいらなくなった。そのため梅毒の治療はやりやすくなった。

この成果を私も立ち会って小野田医師が国際感染症学会で発表したが、外国の福祉・医療関係者は関心を示さなかった。レベルの低い人に長期間服薬を続けさせることは不可能と感じていたのであり、これには失望した。

しかし、そのうちにイタリアではカトリックの修道尼が梅毒に侵されている人を救おうとの熱意で、一月間毎食時ごとに患者を訪ね薬を飲ませてくれた。薬を渡しただけでは服用しないで売ってしまったりするので、一日三回せっせと通って本人が薬を飲むのを確認したのであった。この修道尼の献身的な奉仕で最初のグループ数人の梅毒が治癒した。これを見た梅毒もちの仲間は納得し、治りたい一心で薬を飲み続ける人が少しずつ広がった。この治療法はさらに国境を越えてじわじわと世界中に広がり、各国ともに梅毒患者が激減した。梅毒を注射でなく内服薬で完全に治療できることをはじめて確立したのは玉山・古武・小野田チームの世界に誇り得る成果であった。しかしこの治療法をじわじわと普及している間に競争会社が価格の低い製剤を積極的に売り込んだので、我々のアモキシシリンの内服は梅毒治療の世界標準とはならなかった。それにエイズの蔓延に社会の関心が向けられたので、梅毒の経口治療法の開発は注目されることもなかった。それでも私は「社会の役に立つことをした」と満足している。

斎宮

中洲　靖雄

冬至も過ぎた去る慌しい日、尼崎市の園田学園女子大学シニアコース研究科「万葉の旅」グループが、大学のバスを活用、「万葉集」の指導教授と共に伊勢路は松阪市に近い三重県多気郡明和町にある「斎宮歴史博物館」と「いつきのみや歴史体験館」を訪れた。

この企画、参加申込みはしたもののお恥ずかしきことながら、これまで浅学非才の私には「斎宮」って何なのか全く知識がなかったが、この日参加した面々は、年末近いというのにシニア世代の男女で四十三名を数えた。当然のことながら、参加表明と同時に何の知識のないのも恥だとばかり、インターネットを通じ、この斎宮とは何なのかについて大急ぎであれこれと調べてみた。そのお蔭で、斎宮とは天皇が即位するたびに選ばれて伊勢神宮に仕える斎王（「いつきのひめみこ」と呼ばれ、天皇に代わって伊勢神宮に仕えるため、都から派遣された未婚の皇女）の宮殿と、斎宮に仕えた官人達の役所である斎宮寮を指すのだということを知った。

しかも、この斎王を選ぶ方法としては、公平を期するためなのだろうか、未婚の皇女の中から占いで人選をしたとされる。そして選ばれた皇女は宮中の野宮（ののみや）などで足かけ三年間の潔斎生活の後、多気郡明和町一帯に存在した斎宮へと旅立って行ったのだという。また赴任に際しては、近江から険しい鈴鹿の山々を越えて伊勢に至るルーをとり、五泊六日の厳しい旅路だったようだ。

この旅立ちを群行と呼び、七世紀後半に天武天皇により定められたとされるこの斎王制度は、およそ六百六十年間も継続され、十世紀から十一世紀にかけて隆盛を極めていた。が、その斎宮もさすがに十四世紀半ば南北朝時代の動乱の内にその姿を消したという。

以上は三重県立の斎宮歴史博物館が出している斎宮に関する諸資料から抽出した概略であるが、この博物館はその建物自体はもちろん展示物等も実に立派なもので、恐らく国内でも有数の歴史博物館ではないだろうか。展

示品は当時の斎宮の代表的な出土遺物を中心に、斎王の暮らした内院地区の発掘現場や斎宮跡の全域など、懇切丁寧に紹介をしてくれている。

またこの博物館では映像展示室が設けられ、ハイビジョン画像による斎王の儀礼内容や、都から伊勢に向かう群行の旅を再現した画像を上映してくれる。これを見ることにより、当時の諸々の制度や行事そのものに理解がし易くなると共に、強く印象付けられるものがある。

が、率直な感想を洩らすなら、この制度は時代背景も違えばあらゆるものが全く異なる環境の中で行われていただけに、今の世の中でその是非はもちろんのこと、とやかく論ずること自体意味がないものというべきであろう。とはいうものの、斎王は伊勢神宮に天皇に代わって仕えるのが重要な務めとされていながら、当の伊勢神宮に赴くのは年にたったの三度で六月と十二月の月次祭と九月の神嘗祭だけとされていた。さらにこの斎王に仕える斎宮寮長官や女官その他の役人達が数百人に及んでいたといわれるだけに、現代に生きる我々には容易に理解し難いものがある。

都の生活をそのまま反映したような雅やかな生活と神に仕える神聖な斎王の存在は、「伊勢物語」や「大和物語」など古典文学でも取り上げられ、その華やかな面影の一面が窺い知れる。斎宮跡といわれる土地は、東西二キロメートル南北七百メートルという全国屈指の広大さが確認されているし、この博物館に程近い「いつきのみや歴史体験館」では、当時の斎王の乗り物や貴族の衣装を展示し試乗や試着をさせている。さらに盤双六や貝覆いなどの遊び道具もあって、かつてこの地で斎王をはじめとする王朝人が繰り広げていた平安時代の生活文化の一端を体験できるようになっている。斎宮とその所縁の地を巡り、有意義で楽しい一日だった。

「ふらんす物語」と荷風

古川　さちお

永井荷風の「ふらんす物語」は明治四十二年（一九〇九）に発禁処分を受け、昭和二十七年（一九五二）まで四十三年間、日の目をみなかった。

晩年、文化勲章まで受けた大作家の作品が、若かりし頃とはいえ、発行禁止の憂き目を見たとは、にわかに信じられないことである。そこで、岩波文庫二〇〇四年版で、当初の原文を読んでみた。

発禁の理由は容易に推測できる。「自分」と称する横浜正金銀行のリヨン駐在員が、仕事はいい加減にして夜遊びにふける姿。フィクションと思われる日本帝国外交官が、パリの娼婦との暮らしにうつつを抜かす話。それは、明治の検閲当局の目から見ると怪しからぬ著作となったのであろう。

そのようなことよりも、この本が私の心をひき付ける要素は別のところにある。

先ず驚くのは、若い頃の荷風は大へんな勉強家だったこと。四年間のアメリカ滞在中に、フランス語とフランス文学を熱心に学んだようだ。東京の外国語学校は中国語科中退で、フランス語に縁はなかったのに、フランスに入る頃は、モーパッサンの小説、ボードレールの詩などを原語で完全に読みこなす力を持っていた。

「ふらんす物語」に引用しているボードレールやヴェルレーヌの詩には自らの翻訳文を併記しており、それは後に出る上田敏、鈴木信太郎らの翻訳に優るとも劣らないものである。日本ではあまり知られていない詩人の見事な翻訳もあり、詩人・永井荷風の鬼才を感じさせる。

ただ、アメリカで学んだ彼のフランス語のうち、発音だけは感心できない点がある。片仮名で表記するのに、パリを「パリー」、セーヌ川を「セーン川」、ブーローニュの森を「ブーロンユ」、リュクサンブール公園を「リュキザンブルグ」と書くのは、いささか興ざめだ。

にもかかわらず、ル・アーブル港に上陸するところに始まる鉄道沿線や町々の情景描写はユニークで実に美しい。リヨンやパリの夜の情景、娼婦の部屋の描写などを

読むと、あたかも一幅の絵を見るような心地よい錯覚に陥るのである。その描写によって、荷風の滞仏時と七十年後に私の住んだパリの街は、自動車の出現を別にすれば、ほとんど変わっていないことも分かる。お陰様で懐かしいパリの思い出が鮮明によみがえってくる。

前述の発音違いのことは論外として、まだまだ日本に外国文化が浸透していない時代、名詞、固有名詞で荷風の書く片仮名言葉が極力フランス語的となっているのも面白い。

ワルツは「ワルス（Valse）」と書かれ、プラタナス（鈴懸けの樹）を「プラターン（Platane）」、マロニエを「橡の樹」としている。今では日本語化しているマロニエ（西洋栃の樹）でも、当時は表現に苦労したことだろう。国名のモロッコ、ポルトガルは、フランス語読みで「マロック（Maroc）」、「ポルチュガル（Portugal）」とあり、荷風のフランスかぶれ振りが見られる。

「カンデラブルに照らされ」とあるので、初め何だろうと思ったが、現在のシャンデリアのことだった。

荷風は、文学、演劇、音楽を愛したが、絵画にはさしたる興味を示していない。しかし、一年足らずのフランス滞在中に学んだものが、他に一つあるようだ。それは時代が少しずれるとは言え、ムーラン・ルージュに入り浸った画家ロートレックの生活模様だ。

花柳界での遊びを卒業した後、晩年の荷風は、浅草かいわいの踊り子たちに囲まれて、余生を面白おかしく過ごしている。「ふらんす物語」に書かれた若き荷風のリオンやパリの生活もさることながら、帰国後も金に困らない大尽の生活は、われら男どもの羨望の的である。

それにしても、四年間をパリで過ごしながら、毎日を商社業務に追われたために、一年間の荷風にも及ばない私の貧しいフランス文学知識は情けない限りである。

荷風は、滞仏中に多くの文豪の墓地や記念館を訪ねている。彼の尊敬するモーパッサンに至っては、モンソー公園にある記念碑を訪れては、その著書を読み直したといわれる。私など、時折散歩したモンソー公園に、かかる記念碑が存在することも知らなかった。

手作り旅行の楽しみ

松谷　隆

年金生活に入っても、相変わらず手作り旅行を続けている。毎年二回、アメリカへの里帰りには、飛行便、ホテル、さらにレンタカーも必要。インターネットのお陰で他人の世話にならずに手配できるのがよい。

「パック旅行なら、すべてお任せで楽チンだ。なぜ、苦労して自分で手配するのか」とよく聞かれる。「余計なお世話だ」と思いつつも、次のように答えている。

一。自分で手配していれば、毎回新発見があるので、ボケ防止に役立つと思っている。

二。同じホテルや航空会社を使えば、特典が累積され、無料宿泊やアップグレードが可能となる。パック旅行ではこの特典がほとんど無い。

三。自分の金で旅行するのに、集合時間や見学時間の制限や、お仕着せの食事はたくさんである。

思い返せば、手作り旅行は学生時代、制限の受けようのない貧乏旅行の延長かも知れない。なにせ、学割を最大限に活用し、一筆書きの日程が普通で、どこに行くのも乗るのは鈍行のみ、往復には夜行列車を使い、宿賃の節約などなどだった。このため、駅に常設の時刻表には随分お世話になったものである。

海外旅行については、仕事の延長線だった。東京に転勤直後の一九六九年十月上旬、上司から「ＡＢＣ時刻表」を借りて来い」と言われ、子会社のエージェント部門で初めてそれを見た時が、のめり込みのきっかけである。

この時刻表は、電話帳より分厚く、国際航空運送協会（ＩＡＴＡ）加盟の航空会社のフライトが網羅されている。これは、これはと思い、その後、一カ月遅れの時刻表をもらい、時折眺めたものである。そして、「いつかは自費旅行」はこれを使って計画しようと考えていた。

話題をアメリカに戻すと、「なぜ、アメリカばかり旅行するのか」との質問もよく受ける。シリコンバレー時代には、大学生の子供二人が日本にいたので、休暇旅行はほとんど日本で、アメリカ国内は西海岸がいつしか中心になってしまった。従って、次のような原則を作り、

旅行を楽しんでいる。

一。駐在時代に行けなかった所と、行ってよかった所に交互に行く。

二。アメリカ国内のフライトは、できる限りマイレージでファーストクラスにアップグレードする。

三。シリコンバレーの窓口、サンノゼ空港着のフライトとする。サンノゼ着の国際便が少ないので、到着時入国審査が短時間ですむことと、私が会員である航空会社のラウンジが利用できるからである。

四。シリコンバレー、ラスベガスおよびリノには、必ずポイントが使える定宿に泊まる。特にラスベガスとリノは家内の精神安定剤なので、避けられない。

さらに、財布の中、ペンクラブの行事日程、太極拳と家内の学習日程を考えると、旅行期間は二週間が限度である。これらの原則を満足させるパック旅行はなく、自分で楽しみながら日程を組んできた。

昨年五月、オーランドのディズニーワールドに初めて行った。三日しか滞在できず、友人の「一週間滞在しないと楽しめないよ」というアドバイスどおりにすべきだったとの悔いが残った。しかし、再訪の楽しみもできた。

十月には、かつて、よく行ったサンディエゴ郊外のラフォイアに泊まり、二十年ぶりにメキシコのティファナにまで足を延ばした。当時十一歳の娘が到着早々、「怖いから早く帰ろう」と泣いた、あのティファナの町並みがきれいになっていたのにはびっくりであった。

外見はよくなっていても、土産物屋の売り子の「社長さん、社長さん、田中さんでしょう。埼玉から来たの。これ安いよ、お買い得」との呼び込みを聞いて、家内と思わず、顔を見合わせ吹き出した。二十年前もそうだった。こんなことも手作り旅行ならではの楽しみといえよう。

「えっ、なんですって。私の原則が制約そのものだと言われるのですか。うーん、そうかもしれませんね。しかし、家内を連れて行っていない土地は、まだまだ多いんですよ。元気で長生きしている間は、手作り旅行を続けますよ。まぁ、あと何年できるか分かりませんがね。」

一輪車では走れない

小島　博志

A　一九四五年八月、広島、長崎上空で「ピカドン」が爆裂した。第二次世界大戦は終わり、平和が甦った。だが、パンドラの箱から躍り出た妖怪が地球上を我が物顔に走り回っている。原子の火を盗んだプロメテウスに怒ったゼウスの仕返しだろうか。

B　今世紀になってイラクでは、ありもしない妖怪の物影におびえて殺し合いが始まっている。北朝鮮やイランでは、核兵器を「持てる国」と「持てない国」が覇権と国益を賭けて激しい駆け引きを演じている。核で手を汚した世界唯一の国が他の「持てる国」と語らって「非核国」の核の封じ込めに躍起になっている。

A　核拡散防止条約（ＮＰＴ）には「持てる国」の「誠実な核軍縮交渉」の義務も規定されているが、その努力は見られず、核独占体制の強化としか言いようがない。核不拡散と核軍縮は両輪のはず。一輪車では走れないよ。

B　北朝鮮の核疑惑は根が深い。十五年も続いている。

A　一九八九年十一月、日本外務省が「北朝鮮で原発以外の核開発が行われている兆候がある」と発表し、その翌年七月には米偵察衛星が平壌付近で建設中の原子力施設を探知して、疑惑は一気に広がった。

B　この間、北朝鮮は国際原子力機関（ＩＡＥＡ）による査察を拒否、ＮＰＴ脱退を表明したのに対し、ＩＡＥＡ理事会は国連安保理への付託決議を繰り返してきた。

A　一九九三年四月、翌年三月、二〇〇三年二月の三回も安保理付託を決議しているが、安保理が動いたという話は聞かないが・・・。

B　問題が起きるたびに北朝鮮は米国と直接交渉に持ち込んで点数を稼いでいる。在韓米軍の核抜き、朝鮮半島の非核宣言、軽水炉二基の供与、重油の供給、核の不使用、攻撃の意図なしと、数々の約束をとりつけている。「悪の枢軸」とまで言われた金正日体制はいまや安泰だ。

A　昨年九月、北京で発表された米朝日韓露中の六カ国協議の共同声明は中国が仲介役になって難航の末まとめたもので、六カ国共同という点に重みを感じるね。

B　北は本気で核を廃棄するだろうか。まず軽水炉を提供せよと主張しているのに、米国は核廃棄が先だと反論している。まだまだ曲折があるよ。

A　一方のイランの疑惑は二〇〇二年八月、「ナタンズとアラクで大規模な原子力施設の建設が秘密裏に進められている」という反体制派の告発から始まった。

B　IAEAの検証の結果、イランは申告をしないままウラン濃縮やプルトニウム分離を長期間繰り返していたことがわかった。これに対し、イランは翌〇三年十月、すべての原子力活動は平和目的であると主張し、過去の活動の申告書を提出、ウラン濃縮を一時停止した。そして英仏独との交渉にも同意した。

A　EU三国の提案を待つうち、イランでは昨年選挙があり、「イスラム革命理念への回帰」を主張するアフマディネジャド新大統領が八月三日に誕生した。そして九月、国連で「原子力の平和利用は奪いえない権利である。核兵器を使った国が生産、貯蔵、実験を続け、他国の核エネルギー生産技術の獲得を妨げている」と演説した。

B　EU三国は、新大統領就任式の二日後に包括提案を行い、軽水炉建設への協力、核燃料の供給を約束しながら、核燃料サイクルの断念を迫り、ウランの転換や濃縮の研究開発は認めないとした。イランはこれを拒否、今年一月十日「ナタンズなど三カ所の研究施設の封印を査察官立会いの下に解除し、研究を再開する」と発表した。

A　膠着状態が続く中、イランの原発を支援しているロシアがウラン濃縮を引き受ける案を出しているが、自前の核燃料サイクルを堅持するイランとの調整は容易ではない。中国も安保理付託には消極的だったが、一月十六日EU三国と米露中の六カ国がロンドンで会合、IAEA理事会での安保理付託決議に同意した。ロシア、中国は三月までは安保理討議はせず、ロシアとの交渉に期待している（追記、二月のIAEA理事会は安保理付託を決議）。イランの場合、外交取引とは違って一国の権利を旗印に開発を進めており、解決の見通しがつけにくい。

A　ところで、核兵器国の軍縮交渉は進んでいるのか。

B　結論から言えば、ゼロだね。包括的核実験禁止条約（CTBT）もまだ発効していない。一九九六年九月、ジュネーブ軍縮会議で作成された条約案が国連総会で圧

倒的多数で採択されたものの、もう十年も店ざらしのまま。これまでに百七十五カ国が署名、うち百二十カ国が批准をしているのに、発効要件国がダメなのだ。

A　発効要件国？　それ何のこと？

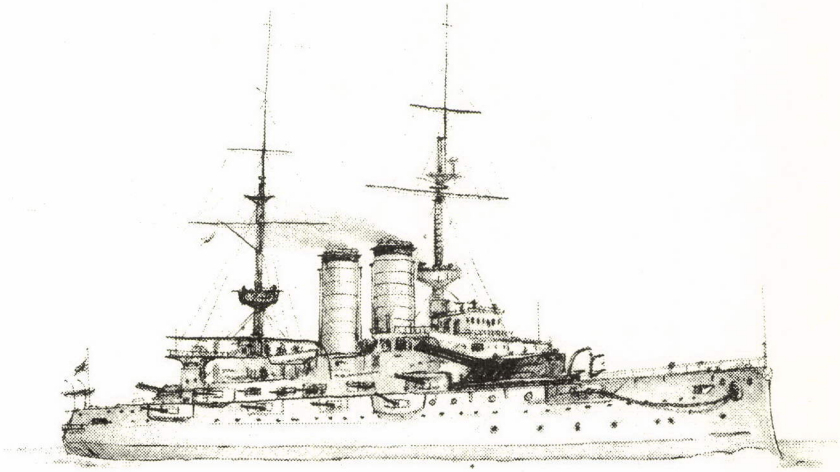
B　条約議定書に規定されている四十四カ国が批准しないと発効しないことだ。核保有国や核開発能力ありとみなされた国が挙げられている。昨年三月現在、このうち三十三カ国は批准まで済ませているが、インド、パキスタン、北朝鮮の三国は署名もまだ、米国、中国、イラン、イスラエルなど八カ国は署名したものの批准が済んでいないのだ。米国に至っては、クリントン大統領時代の九九年十月、批准案は上院で否決されており、ブッシュ共和党政権になってからは、たびたびCTBT不支持を表明している。中国は前向きの姿勢を示しているが、米国がこんな調子ではお先真っ暗というしかないね。

A　部分的核実験禁止条約で抜け穴になっていた地下までを含め、あらゆる空間での核兵器の実験的爆発の禁止は、核廃絶への現実的な第一歩のはずだった。

B　NPT条約成立後四半世紀たった一九九五年、条約延長を審議したときCTBT条約の発効促進を条件にNPTの無期限延長を決めた経緯がある。両輪だからだ。

A　複雑な国際情勢の中で、非核地帯条約の動きが進んでいるのは心強いよ。六八年に中南米核兵器禁止条約（三十三カ国加盟）が発効した。この領域内での核兵器の実験、使用、生産、取得、貯蔵、配備が禁止され、議定書は核兵器国が域内で核兵器の使用や威嚇を行わない消極的安全保障を規定している。肝心なのは米英仏露中の五国とも批准済みなのだ。このほか南太平洋（十六国・自治領）東南アジア（十カ国）アフリカ（五十四カ国）でも同じような非核地帯条約が進められている。直接、核廃絶には結びつかないけれども、世界に広がっていけば力となろう。

B　日本に関して言えば、日韓両国のNGOが「東北アジア非核地帯」モデル案を作って活動を始めているが、まだ政府ベースとはなっていないね。モンゴルは国連総会決議によって一国の非核地位を認められている。今夜は、日韓にモンゴル、北朝鮮、台湾まで含めた東北アジア非核地帯出現の夢でも見ることとしよう。



戦艦「三笠」

ペン俳句のこの一年 これよりの一年について

平間　真木子

ペン俳句会の句会報は、平成十八年一月にて百五十号となる。すでに十有余年の継続ということにて、会員の方の推移もあるが結構楽しく回を重ね、辛口の批判・議論をつづけている。「早春の葛西吟行」「初夏の葛西臨海公園吟行」と二回の吟行にて自然の中に歩を進め、句を作る悦びを共にすることが出来たと思っている。半年前より句会場が神田の学士会館となった。文教の地の歴史ある建物の一室で、苦吟する一と時は味合い深い。今年も元気に明日を希求する楽しい俳句を作ってゆきたい。

四季抄

あらたまの白きマフして中華街
三月や水のふくらむ小名木川
林立のヨットに闇の濃くなりぬ
観音をこころに汲めり岩清水
路加病院秋風に灯のふえてゐし
浅草や路地を曲がりて月見草
秋澄めり山湖に釣りの一人の坐
爪を切る音して年の港かな

シェーバーの音軽やかに年明くる
生きめやも病窓を打つ飛花落花

石川素屯

思いがけぬ大患をされたが見事に恢復、いまはすっかりお元気のようである。「生きめやも」と飛花落花に呼び

初年兵たリしかの日の花思ふ
戦後六十年摩文仁の海暑し
とんぼうの影と石段登りたる

かけられた日はすでに遠い。「初年兵」「戦後六十年」の句には作者の来し方が秘められていると拝見した。「とんぼうと石段登る」このお元気をいつまでも。

工事用足場のとれて夏の星
とんぼうの群れをり選挙掲示板
薄紅葉はじまる母のケア・ハウス
秋刀魚食ぶ甘き大根おろしかな
恙なく古稀を迎へし師走かな

大泉子泉

俳句の表現のむずかしさ、ということを何時も話題にされているが、昨年の作品と見比べれば格段の相違があきらかである。それに「工事用足場」「選挙掲示板」など語句の選択が新しい。「秋刀魚」の句にはご家庭の和やかな雰囲気も感じられ、楽しい句作の背景が窺える。

池の面に火屑のこぼれ花篝(かがり)
空手着の子等の掛け声風薫る
予報士の表情厳し厄日前
枯れ枝を払ひて迎ふ文化の日
高原や触れむばかりに夏の星

亀井弘次

愛犬の死、という大事件に意気消沈の日を過ごされた、と伺っていたが、その後はかなり充実した作品を示されている。句の内容の良さ、句の形のよろしさなどなど。家族の一員であった愛犬の死を通じて、深層心理に何かを得られたのであろうか。

コーヒーに砂糖ひかへめ夕桜
手作りの絣のアロハ海の旅
氷菓食ぶ一望にして銀座の灯
信楽の狸の見上ぐ木守柿
カーテンに遊ぶ鳥影冬うらら

北田純一

長らくOBペンクラブの要職を務められて、このほど身軽になられた。従来の軽妙洒脱の境地と社会風刺に満ちた作品が、今後どのような変化を見せてくださるのであろうか。掲出五句はそれぞれ明るく楽しい日常句。平和な生活の中より新鮮な句が生まれることであろう。

薄氷を突きつつ登校せしことも
花冷や法王悼むミサの鐘
眉太きサッカー少年氷菓手に
十三夜屋根より猫の声のして
白壁や夕日の中の吊し柿

岸本義生

ふるさとは播州とのこと。少年の日の記憶の「薄氷」は生涯忘れられない想い出と拝見。句会に出された「法王悼む」の句は、法王という存在の大きさを実感させられたのであった。吟行をして、そこからより良き作品をと心掛けておられることにいつも賛同している。

水槽の亀に睨まれ春寒し
散る花に八幡殿を偲ぶなり
梅雨寒や動くともなき観覧車

関谷裕彦

俳句入門より二年、と言うのに急速の進歩である。学識の深さのせいであろうか、多方面に亘る作品を見せてくださる。「水槽の亀に睨まれ」「八幡殿を偲ぶ」とは意外

街角の西日を避けて氷菓売
後の月煉瓦倉庫の灯の消えて

性のある楽しさに満ちている。「煉瓦倉庫」の句には船に関する仕事をされた方の心情を垣間見る思い。

鬼やらふ幼なの声のよく透り
波郷句碑春の光のかがよへり
航跡の重なり合へり夏の海
赤とんぼ浅間の山に雲流れ
昏るるには間のある海や野水仙

中村雅道

こちらの苦言をいつも快く聞いてくださるので、言う甲斐のある方。お若いことを頼りに何かと雑事などもお願いしている。この間、作品は長足の進歩で、明るい感性は何よりである。葛西吟行の折り、始めて「波郷句碑」と対面の一句。「春の光」の季語が効いている。

首都の灯を橋もて繋ぎ熱帯夜
子供等の手脚の長し梅雨晴間
薄氷や火伏の神の御手洗に
冴返る板絵の禽の眼の光り
あしかびや光の跳ねし池の面

西川知世

句集上梓の話が進んでいるようで、楽しみである。句作を始められてほぼ十年。結社「田」の幹部同人の一人として、着実に足跡を伸ばしておられることは嬉しい限り。「首都の灯」に「熱帯夜」を配した句には若さと感性があふれていて好ましい。作者の今年に期待したい。

三年目の「川柳勉強会」

世話人＝平　尾　富　男

川柳の素人が勉強会の世話人になってから三年が過ぎました。当初は当クラブの長老会員で、小説も物される小林正憲氏を宗匠に仰いで勉強を続けてまいりました。当初の投句による会が、一昨年六月からは新橋の割烹「森田」で「兼題」の作品を当日二句発表して腕を競うようになりました。

小林さんも毎回欠かさず出席して指導的役目を続けられていますが、昨年の夏以降、ご本人の強いご意向で宗匠役を降りられました。現在は、各人が持ち寄った兼題川柳を匿名で詠み合って、出席者全員がその場で楽しく批評しながら毎月の優秀（？！）作品を互選しています。これらの句は、毎月クラブの会報に俳句とともに掲載されています。

昨年四月には、メンバーの西川武彦氏の提唱で、毎月の互選作品を中心に、作者がその川柳に小話（笑話）やエッセイを書いて、勉強会として集大成を計ろうということになりました。もちろん、その心はペンクラブらしく、できれば出版を目指そうというものでした。早速、西川氏と世話人の平尾がプロマネとなって出版社回り、作品の編集・構成・校正を地道に始めました。結論から言えば、その筋では知られている老舗文藝出版社である「青蛙房」社が取り上げてくれることになったわけです。今年の三月、四月には出版にこぎつけるべく同社が専門的な立場で再構成・校正の作業に入ってくれています。

こうなったら、「のり」の良い勉強会の面々のことです—出版記念パーティーの手筈やら、続編に挑戦することなど、少しはしゃぎ過ぎの感さえ否めません。要は、勉強会のメンバーが楽しく一つの目的に向かって心を合わせて、「青春の血」を再び甦らせていることです。クラブとは、そもそも多少排他的でも気の合う仲間が楽しく語り合える場のことです。いかにも企業ＯＢペンクラブの勉強会らしい仲間作りができたのではないかと自負しています。

当ペンクラブでも、俳句と川柳をともに勉強されている会員の方がおられます。そこで両者の違いについて…

俳句が、自然を対象とした客観的な見方で叙情性を重要視する自然諷詠であり、一方の川柳は、人間や社会を対象として主観的に、あるいは客観的に詠み、人情の機微や人生の哀歓を表現する人間諷詠とか社会諷詠であることを、基本的な認識のベースとすべきともいわれています。

川柳と俳句は、発生の時点でも全く性格を異にした文芸でした。しかし、時代とともにそれぞれが表現方法や題材の取り上げ方を拡張してきて、特に最近では作品を見ただけでは川柳と俳句の区別のつかないこともあります。口語表現の俳句、無季・自由律俳句が現れてきていると同時に、現代川柳の世界でも、文語表現をしたり叙情性豊かに自然を詠ったり、切れ字を用いることがないわけではありません。善悪の問題ではなく、このような両者の傾向を無境界現象と専門家は称しているようです。この傾向を無視することはできませんが、やはり初心者、一般者は、可能な限り基本に忠実を旨とすべきと考えます。

そこで、当勉強会ではこれまで勉強したことがらを中心に、以下の「心得」を当面の内規として掲げることとします。この内容は、今後勉強会の発展に伴って、また勉強会のメンバーからのご意見も組み入れながら変更・追加・発展させるようにしたいと思います。ただし、当会では何にもまして「楽しく詠み・読み合う」ことが原則です。

【心得】

① 五七五はリズムで

五七五は文字数ではなく、声に出して詠んだときの音が五七五になっていることが原則です。

② 中七、下五の字余りは禁忌？！

一方で、句を作る際に、五七五の十七文字に納まりきらず、「字余り」な句になってしまうことがあります。しかし、川柳では中七(中句の七音字)、と下五(下句の五音字)を字余りにすることは避けます。

どうしても中七、下五の句が字余りとなる場合は、その句を上句に移動させ、上六、上七と字余りさせ、中、下句は七、五音字に整えるよう工夫をします。

③ **口語体で表現**

現代川柳は原則として、口語体で作りますから、文語体や俳句でよく使われる「や」や「かな」「けり」などの切れ字は、通常は使用しないと決めています。

俳句や短歌に慣れた人なら、自然と文語体が口に出てきますが、そうすると、狙うテーマも自然と固いものになってしまいます。ただし、これも原則論ですから、必要に応じて臨機応変に。

④ **駄洒落は禁句**

川柳は、日常の中にある折々の情景を日常の言葉で、十七文字に置き換えるものです。(駄洒落や品性を欠くものは禁句ですが)ユーモアや風刺なども川柳のジャンルとして、立派な地位を築いています。笑いやもの哀しさは川柳でこそ表現されるものと考えます。当勉強会では、余りに下品に陥らなければ、人生の機微や実相を艶やかに笑いの化粧で表現することは大いに奨励されています。

⑤ **時事を詠む注意**

時事川柳は必然的に、読まれる「賞味期限」がある場合が多いので注意すべきです。「詠んだ」時には新鮮で面白くても、その句が「読まれた」頃に、読者の興味が薄れている題材になることがあります。時事川柳は風刺とエスプリが効いていることも条件となります。

⑥ **当たり前のことを詠まない**

一見面白くても、当たり前のことを詠んだのでは川柳になりません。例えば、「千鳥足はしごの末にベンチで寝」は読者に何の感銘を与えません。

「降る雪が砂糖になれば嬉しいな」のような事実を詠んだ句も、同じです。一般的に自分の感情をストレートに表す言葉、前述の「嬉しいな」等の日常的な形容詞を使わない工夫が大切です。

⑦ **説明文付きの句**

詠んだ句に説明文を付与することは一見親切ではありますが、説明がなくても句の意味が読者に分かるようなものでなければなりません。句会や投句では、説明文は

読まれないし、選考の対象とはなりません。一方、論理的に説明が付かないような句を詠むことは、絶対に避けましょう。例えば、雪原に残る[真っ赤]な血痕、これは本来黒々としています。

⑧ 言葉を飾らない、特定の語句に頼り過ぎない工夫

思い浮かんだ言葉を五音字、七音字と繋ぎ合わせるような句作りは、空虚で内容が乏しく、作者の感動や思いが伝わりません。

これに対して、平易な言葉で、しかも全体から容易に想像できる言葉を省くことで余韻を生み、言葉を凝縮することで句が引き締められます。例えば岸本水府の句、「ぬぎすててうちがいちばんよいという」はその典型です。脱ぎ捨てるのは服であること、外出から自宅に戻ったことを、「ぬぎすてて」の一言に凝縮しています。

最近の勉強会メンバー十三人の代表的川柳を、世話人の独断と偏見で選句ご紹介します。

①「兼題＝当たり」チルドレン当り外れが目立ちだし　（井蛙）

②「兼題＝当たり」当て馬が本命になる色の道　（閏）

③「兼題＝指」老いてなお指がまさぐる夢の中　（酔雅）

④「兼題＝指」札数え親指痛い夢を見る　（しん）

⑤「兼題＝指」あせらずに指相撲よと女将いう　（周帆）

⑥「兼題＝浮く」あいつまた歯が浮くようなオレ自慢　（安兵衛）

⑦「兼題＝浮く」沈む兵見殺し将は浮き上がり　（西貢）

⑧「兼題＝枯れ」芸枯れて国宝指定余命なし　（零門）

⑨「兼題＝男」ゴミ袋下げて男の立話　（微酔）

⑩「兼題＝雨」また雨か家でゴロ寝の濡れ落ち葉　（だし）

⑪「兼題＝尻」敷かれてる憎いお尻を愛（め）でている　（酔深）

⑫「兼題＝風」東風吹くなうなぎの香り尿酸値　（不言）

⑬「兼題＝馬鹿」親バカの心子知らずフリーター　（昴）

杉山修一さんを偲ぶ

杉山修一（すぎやま・しゅういち）二〇〇五年三月六日がんのため死去。七十五歳。
東京都出身。一九五三年大阪大学工学部卒。東芝に入社。東芝グループで活躍後、東芝プロセス・ソフトウェア会社社長を務めた。企業ＯＢペンクラブのＩＴ活動に貢献。「悠遊」の表紙に画筆を振るった。

さようなら、心の友よ

岩崎　洋一郎

すさまじい闘病戦争の末、ついに三月六日に、君は旅立っていった。基礎体力が抜群であったため、がんとの戦いも凄まじく、また長期にわたった。諦めない人、杉山君に相応しかったといえる。

君と最初に会ったのは、昭和十八年四月だったね。満開の桜が、教室の窓のすぐ傍で、たわわに咲いていた。君は、有名な進学校の誠之から、七年生高校の成蹊学園の尋常科に入学してきた。入学試験のために勉強してきた君は、よく出来た。そして目立った。それが裏目に出て、ある事件が起こった。これが君との、本当の出会いだったね。以後、何も言わずとも、心が通い合う同志となった。そして成蹊の七年間ずっと同じ組に居て、お互いに安心して心底から話し合える仲間として、その後六十年を過ごした。

君の当時のキーワードは、柔道とドイツ語であった。いずれも抜群に強く、学年のみならず、校内で鳴り響いていた。

僕の誘いで、企業ＯＢペンクラブに入会してくれて、嬉しかった。コンピューターに強い君は、クラブのＩＴ普及に不可欠な戦力となった。メンバーの自宅まで出かけてゆく姿は、僕の知っている優しい君の真髄を見た。また、学生時代には、表に出なかった画才に驚嘆した。「悠遊」の第十号、十一号、十二号は、君の繊細な風景画の表紙で一層引き立った。

がんに侵されたと聞いて、君の

強固な体力なら乗り切れると信じていた。君もそう思い込んでいたよね。苦しい闘病も、前向きに取り組んでいたね。一応、治療コースが完了したと明るい顔をしたのを覚えているよ。しかし、再発したと聞き、暗澹たる気持ちになったのは、昨年末であった。一月十二日に見舞いに自宅を訪れた際に、衝撃を受けた。ご夫人を遠ざけて、「君だから、聞いてもらえる。ホスピスを探してくれ」と言う君の発言にだ。

これも、君らしい決断だった。回復の見込みはない。自宅にいたら、結局、奥さんに迷惑をかける。予後否定と医者から聞き出して、君の心は決まった。ホスピスでは、治療はしない。ただ、痛みを緩和してくれるだけの、一方通行の選択である。頭脳明晰で、気持ちの真っ直ぐな君を知っているだけに、僕は、頷いて「分かった。探すよ」と約束した。君は笑顔で「頼むよ。時間がない」と。僕も、笑顔で辞去した。家に帰ってから、泣いた。涙が止まらなかった。

それから懸命な聞き込みを始めた。幸い同級生の医者で、伝手(つて)があり、入院することができた。需要が多いのか、普通ならウェーティングなのに、友人も「杉山のため」と最大の努力をしてくれた。

見舞いに行くと、「岩崎の家は、遠いのだから、来なくてよいよ」と最後まで気遣いをしてくれる。どんどん痩せて行く顔を見るのは辛い。太腿に触れと言われ、触ると、大腿骨に皮膚が張り付いている。「もう、駄目だよ」と君は寂しく笑った。「柔道の授業で、先生が稽古始めと言った次の瞬間、お前は、俺を払い腰で投げ飛ばした。痛かった」と僕。君は、遠くを見る目をして、「そういうこともあったね」と笑ってくれた。その笑顔を見たかったのだ。

「もう帰れ」と促す君に、僕が言える言葉は一つ。「君を忘れない。君と会い、友達になれたことは、嬉しかった」。彼も、「俺もだよ」と返してくれた。

彼を、抱擁して、骨ばかりの体でなく、がっちりとした昔の姿に思いを馳せつつ、心の中で別れを告げた。

（二〇〇五年十二月記）

浅野正春さんを偲ぶ

浅野正春（あさの・まさはる）二〇〇五年八月五日心不全のため死去。七十一歳。
東京都出身。一九五六年東京外国語大学卒。日立製作所入社、ニューデリー事務所勤務、日立化成へ転籍し、ニューヨーク事務所長。退職後、ルルギ社（ドイツ）日本支社長を務めた。

苦労いとわぬ責任感

中村　爽

浅野正春君の訃報を聞き、信じられぬ思いだった。正月に年賀を兼ねて彼の家に見舞いに行き、夕方まで愉快に話し込んだ。足が少し不自由に見えたが、帰りは駅までの道を途中まで見送ってくれ、別れ際に「また来いな」と手を振っていた姿が目に残っている。その後も電話で消息を知らせ合い、病状は落ち着いていると聞いていた。このように突然逝ってしまうとは思ってもいなかった。遠慮なく本音で話し合える長年の親友を失った寂しさは大きい。

浅野君とは中学、高校、大学を通して一緒だった。最初の出会いは、一九四六年、旧制の都立城南中学に入学し、同じクラスになったときだ。小柄だった彼は教室の前の方に座っていた。坊主頭で人懐っこく、いつもニコニコしていた。戦後の物資不足で校舎内ではみんなはだしで、通学は下駄ばきが多かった。小さな彼が朴歯（ほおば）の高下駄を鳴らして来るのをからかうと、向きになって怒ったのを覚えている。当時から負けん気が強かった。

途中で新制高校に変わった学校で私たちは共に中高一貫の六年間を過ごした。柔道を始めた彼は高校生になったころには背も伸びて、たくましくなった。部活では「英語クラブ」に属し、彼ともうひとりの友人を加えた三人組が中心になって活動した。何年か前、その友人が亡くなり、浅野君も去った今、あのころのことを語り合える

相手が誰もいなくなった。

大学二年の夏、山岳部のチームで北アルプスを縦走し、槍ガ岳を経て上高地の涸沢に下りた。折からの強い風雨で、二日間狭いテントに閉じ込められたままで過ごした。東京への帰途、彼の田舎の長野に立ち寄り、野尻湖まで足を延ばして湖畔のホテルに泊まった。なけなしの財布をはたき切り、電報で家からの送金を頼む破目になった。彼の生前、この懐かしい旅の思い出話をいつも繰り返し語り合ったものだ。

彼はスペイン語を学び、ラテン音楽と酒を愛したロマンチストだった。歴史や言語学にも一家言を持ち、よく議論もした。横浜でアルバイトをして懐が暖かくなると、酒場に誘われた。いつの間にか酒飲みになっていた。

卒業後、私は海外勤務となり、帰国すると入れ違いに彼がインドへ赴任した。互いにそれぞれの場所で忙しく働き、時折の便りで健在を知り、エールを送り合った。彼は在職中、海外の技術提携契約ではエキスパートとして社内で知られていたと聞いた。直情の故に、周囲の誤解を受けることもあったようだが、決して人のことを誹謗しなかった。ルルギの日本支社長になったころ、そろそろ時間の余裕ができた学校仲間と時々会うようになった。ますます酒量が増えていたが、底抜けに明るい酒でいつもみんなを楽しませてくれた。

ある日、「海外経験おもしろ話」という一冊の本を見せられた。彼の文章がいくつか載っていた。これが「企業ＯＢペンクラブ」の存在と、思いがけなくも彼が物を書くのを知った初めだった。これがきっかけになって、後日、私はペンクラブに入ることになった。

当時、ペンクラブで彼は「何でも書こう会」のマネジャーを務め、新入りの私の手書き原稿をワープロで清書してくれた。その面倒見のよさに甘え、すっかり世話を掛けてしまった。彼はまた、事前に集まった原稿を全部プリントし、冊子にまとめて会合の席上で配付し、欠席者には郵送もしていた。パソコンの使い手も少なく、労力を要する仕事だったが、苦情もなしに片付けていた。いつも会合の

後、いっしょに東京駅地下のレストランで一杯飲むのが楽しみだった。話題は尽きず、思わず遅くまで居残ったりしたことを思い出す。

そのころ、血糖値が高めだと聞いた。結局はそれが健康を衰えさせることになってしまった。「何でも書こう会」の方も体力的に次第に重荷になったが、手抜きはできないと頑張りを見せ、夫人付き添いで出席したことも何度かあった。クラブの会合を休むようになってからも、毎回電話で会の様子を熱心に聞いてきた。責任感の強い男だった。

九月の晴れた日、浅野正春君は心から愛した家族に見送られ、戸越の行慶寺の墓地に葬られた。最後に別れたときのように、「またな」と手を振っている姿が見えるようだった。ご冥福を祈る。

（二〇〇五年冬）

企業ＯＢペンクラブのあゆみ

＝平成十七年（二〇〇五年）＝

年表（会員への敬称略）

一月例会（十三日）

・新入会員＝大平忠

・会員講演＝黒崎昭二

「ミクロネシアへの旅」

・新年パーティー＝本年より、年末の忘年パーティーは新年パーティーに変更された。

二月例会（十六日）

・ゲスト講演＝弘中百合子女史

（ロゼッタストーン・代表）

「人と人とのコミュニケーション」

三月例会（十六日）

・退会会員＝杉山修一（逝去）、佐藤穣、泉洸、刀

年史

一、役員人事（任期二年目の体制で改革・前進に臨む）

会長	北田　純一
副会長	都甲　昌利
副会長	中村　爽
副会長	金京　法一
理事（運営委員長）	松谷　隆
理事（ＩＴ担当）	中村　将陸
理事（事務局長）	平尾　富男
監事	児玉　忠雄

二、新年度の方針

・「基本方針」として、新規会員の確保と活動の活性化を目的に、クラブ体質の改革と強化を強力に推し進める。

弥館正久、

・会員講演＝野瀬隆平

「写真の楽しみ方」

四月例会（二十日）

・「月例会」及び「理事／運営委員会」の会場が新日鐵代々木研修所から渋谷のT's Business Tower に変更となる。

・会員講演＝松谷隆

「アメリカビジネスとシリコンバレー」

・「拡大運営委員会」の開催

「経費削減と会費収入の有効支出」等について議論される。

・お花見＝代々木公園（八日）

五月例会（十八日）

・「悠遊十二号」合評会

六月例会（十五日）

・新入会員＝清水勝

・会員へのサービス向上と財務体質の大幅な改善を目指す。

・会員のＩＴ文化レベルの一層の向上を促進する。

・クラブ自前ホームページの改善と、会員の更なる利用を最優先課題とする。

三、会員数（六十一名）

二〇〇四年末の会員数は六十七名であった。本年度中に二名の新入会員があった一方で、物故者二名を含め八名の退会者が出た。従って二〇〇五年末の会員数は六十一名となった。

・退会会員＝佐藤穣、泉洸、刀弥館正久、杉山修一（逝去）、

八木大介、浅野正春（逝去）、小川弘、羽田寿夫

・新入会員＝大平忠、清水勝

四、月例会会場の変更

・過去四年以上の間、新日鐵代々木研修センターを利用して行われてきた月例会他の会合が、新日鐵の突然の通告により、四月以降の利用が不可能と

・退会会員＝八木大介
・ゲスト講演＝石井慎二氏（洋泉社・社長）
「どのような本が売れるのか」

七月例会（二十日）
・会員講演＝大平忠
「軍人を父にもって」

八月例会（夏休み）
・退会会員＝浅野正春（逝去）

九月例会（二十一日）
・会員講演＝森田茂
「エネルギー関連」

十月例会（十九日）
・拡大月例会＝会員・ゲスト講演の代わりに、会員からのクラブ運営に関する意見を広く傾聴する会合とした。

なった。これにより、緊急避難的な対策として、渋谷の商業貸会議室、「T's Busines Tower」での会合移転を余儀なくされた。ここでの会合は今年度末まで予約が決定された。

・二〇〇六年度一月からは、代々木の「国立オリンピック青少年総合センター」で、格安な料金による会合設定への目途も立った。

五、出版プロジェクト

（一）同人誌「悠遊」第十二号が三月に発行された。（編集世話人＝小島博志・石川正達）

（二）昨年計画されたクラブ創立十五周年記念出版「サラリーマンたられば物語」は「団塊の世代へ」、更には「新年金経済学」に企画を変更されたが、洋泉社の協力を得て最終的には「年金暮らし心得帳」として十一月にペーパーバック版が出版された。クラブとしては一九九八年の『オーストラリア暮らし入門』以来七年振りの出版本となった。（プロマネ＝北田純一）

（三）電子雑誌「ベストライフ・オンライン」には前

十一月例会（十六日）

・会員講演＝高橋孝蔵

「漕艇・陸上競技の父　ストレンジの謎」

・十五周年記念行事＝十五周年記念行事として企画された出版プロジェクトが、「年金暮らし心得帖」として洋泉社から出版された。

十二月例会（二十一日）

・退会会員＝小川弘、羽田寿夫

・ゲスト講演＝昨年に引き続き「日米学生会議」の現役大学生三人

年に続き「政治・経済・社会の目」および「年金」が掲載された。好評につき来年度にも継続される。（プロマネ＝大泉潤）

（四）同「ナムコポーロ」には、同社の新サイト構築のため、当クラブとの共同企画は一時中止状態が続いている。新春には再開がなるか？（プロマネ＝西川武彦・松谷隆）

（五）同「ベストライフ・オンライン」のサークルホームページである「BL掲示板」は、当クラブ独自のホームページと併用のため、停滞気味となったが、平均十五点の掲載が続いている。（プロマネ＝中村将陸）

（六）月刊誌『Fuji Airways Guide』の旅行記欄"My Cross Road"への寄稿を継続中。（プロマネ＝都甲昌利）

（七）同人誌「悠遊」第十二号は予定通り三月に発行された。（編集世話人＝小島博志、石川正達）

六、ミーティング・勉強会

（一）「小説研究会」（プロマネ＝石川正達、小林正憲、

玉山和夫）

残念ながら本年六月を以って「小説研究会」は中止となった。このプロジェクトで懸案の翻訳出版は、来年度から始動する出版企画の中に吸収され、電子出版も含め、活動を引き継がれることになった。

（二）「英語を読もう会」（プロマネ＝村田孝四郎・中村爽）

発足以来五年目を迎え、会員の勉強の場として定着した。時事英語の講読を通じ、読解力向上と国際事情の理解に努めた。

尚、長年プロマネを勤めてきた村田氏が十一月にプロマネを辞退、代わりに野瀬隆三氏が中村氏をサポートすることになった。

（三）「何でも書こう会」（プロマネ＝村田孝四郎・中村爽）

八〇〇字の文字制限にて、エッセイ・超短編小説を勉強会の場で音読発表する。出席者全員で自由闊達に批評し合う文章力向上の勉強会は、新入会員の参加により、楽しい雰囲気の中

で発展中。

尚、十一月に村田氏のプロマネ退任に伴って、野瀬氏がプロマネを勤める。

（四）「サロン21」（プロマネ＝金京法一）

日本を取り巻く動きとして「日中関係」「日ロ関係」「日米関係」「日米韓三国同盟」を、新しい動きとして「ＢＲＩＣｓ登場」「インド」「オーストラリア」「ヨーロッパの政治不安」を、日本の問題として「教育」「コーポレート・ガバナンス」「構造改革」を取り上げ、自由な討論を行った。

（五）「ＩＴ勉強会」（プロマネ＝中村将陸、松谷隆）

本年末も、ＩＴ登録会員は全会員の八割を超えている。メールのみならず、昨年六月に立ち上がったクラブのホームページを通して、会員相互のフォーラム形式の交流の場が構築された。更には対外的にもエッセイ・コラム及び会員写真館を通じてのウェブ投稿の場で、ペン活動の広がりを経験した。

これに対応するため、毎月一回パソコン操作

の基礎的勉強、及びホームページの利用法についての勉強会を開催した。「三鷹ＰＣ教室」（世話人＝三宅昂、講師＝中村将陸）での有志によるブロードバンド、インターネット・サイトへのアクセスの実技を昨年に続いて勉強した。

（本年八月中止）

（六）俳句教室（世話人＝中村将陸）

会員でもある平間真木子先生の指導のもとに会員相互の熱心な研鑽が続けられた。四月からは、吟行以外は学士会館にて勉強会を開催している。月例歳時記のクラブ・ホームページへの公開掲載も昨年に引き続いて行われている。

（七）川柳勉強会（世話人＝平尾富男）

クラブ会員の長老である小林正憲氏を宗匠に迎えて始めた勉強会。昨年六月より新橋の割烹「森田」で毎月勉強会を開催、現在は出席者相互で和気藹々と選句・句評を行い、企業ＯＢらしい川柳を研鑽している。更に、六月には川柳勉強会独自の出版プロジェクトを立ち上げ、来年三月を目標に出版を目指し奮闘中である。

七、役員人事

十二月末で現役員の任期二年目が終了し、十一月末には来年度に向けて、会員投票により新理事が次の通り選出され、役員人事も確定された。

会　長（出版担当理事）　西川　武彦（新任）
副会長（運営委員長）　松谷　隆（再選）
副会長（事務局長）　平尾　富男（再選）
理　事　中川路　明（新任）
理　事　都甲　昌利（再選）
理　事　金京　法一（再選）
理　事（会計担当理事）　大泉　潤（新任）
監　事　山縣　正靖（新任）

八、まとめ

クラブ運営の改革を目指して様々な取り組みがなされた。年末には来年二〇〇六年度以降に向けて新たに選任された役員人事により、様々な改革の実現が期待される。

クラブの財政問題の根本的改善、クラブ運営上の

積極的な財政支出と収入のバランスを図り、より魅力的なクラブ活動を目指すことが「拡大理事会」、「拡大運営委員会」にて確認された。これらの確認事項を基に新役員人事が実現した。

当クラブとしては、今年も電子雑誌「ベストライフ」誌に複数の会員作品の長期連載を継続できた。更には「ナムコポーロ」誌への参画が来年度以降も実現できるように、ナムコ社との関係を維持してきた。会員の国際経験を生かし、来年度以降も一層の電子雑誌媒体への掲載拡大を目指す。

一方、クラブの活動の場を印刷媒体だけに頼らず、電子出版等の将来的可能性を探ることとなろう。

時代の流れと会員の意識の変革に伴い、「企業OBペンクラブ」の在り方と目的に対して、会員の総意を改めて問い直す必要性が出てきていることを認識させられた一年であった。過去に囚われず、クラブの改革と前進を、会員全員の参加によって実現するための雰囲気つくりの第一歩が踏み出せた一年でもあった。

執筆者名簿（五十音順）

氏名（カッコ内は本名）		出身会社	生年
芦刈　克	あしかり　まさる	住友生命　ニッコン	1931
阿部　洋己	あべ　ひろき	キリンビバレッジ	1937
安藤　晃二	あんどう　てるつぐ	三菱商事	1940
石川　正達	いしかわ　まささと	毎日新聞社	1921
今川　確郎	いまがわ　かくろう	兼松	1926
岩崎洋一郎	いわさき　よういちろう	三菱レイヨン	1929
上原　利夫	うえはら　としお	住友商事	1934
榎本喜三郎	えのもと　きさぶろう	三井物産　三井船舶	1914
遠藤　俊也	えんどう　としや	東京銀行　丸紅	1924
大泉　潤	おおいずみ　じゅん	三菱化学	1936
大塚　滋	おおつか　しげる	国鉄	1929
大月　和彦	おおつき　かずひこ	労働省	1935
大野　昱	おおの　ただし	三井物産	1933
大庭　定男	おおば　さだお	三井物産	1922
大平　忠	おおひら　ただし	三菱化学	1938
亀井　弘次	かめい　こうじ	キリンビール	1928
岸本　義生	きしもと　よしお	兼松	1927
北田　純一	きただ　すみかず	三菱商事	1928
木下　洋介	きのした　ようすけ	文化放送	1933
金京　法一	きんきょう　ほういち	三菱商事　三菱総研	1933
黒崎　昭二	くろさき　しょうじ	新日鉄	1927
小島　博志	こじま　ひろし	毎日新聞社	1931
小林　正憲	こばやし　まさのり	大和毛織　国際工機	1930
清水　勝	しみず　まさる	明治安田生命	1945
荘司　忠志	しょうじ　ただし	石川島播磨重工業	1932
杉浦　右藏	すぎうら　ゆうぞう	ＮＴＴ　三菱電線工業	1932
関谷　裕彦	せきや　ひろひこ	ﾛｰﾔﾙ･ﾈﾄﾞﾛｲﾄﾞ･ﾗｲﾝｽﾞ	1932
高橋　孝藏	たかはし　こうぞう	丸紅　松竹	1936
玉山　和夫	たまやま　かずお	通産省　日英協会	1919
都甲　昌利	とこう　まさとし	日本航空	1933
中川路　明	なかかわじ　あきら	ダイセル化学工業	1929
中洲　靖雄	なかす　やすお	三菱レイヨン	1927
中村　爽	なかむら　そう	日本工営	1933

氏　名（カッコ内は本名）		出　身　会　社	生　年
中村　将陸	なかむら　まさみち	富士通	1936
新山章一郎	にいやま　しょういちろう	在日米海軍基地統合人事部	1930
西川　武彦	にしかわ　たけひこ	日本航空	1937
野瀬　隆平	のせ　りゅうへい	石川島播磨重工業	1938
平尾　富男	ひらお　とみお	キヤノン	1942
平間真木子	ひらま　まきこ	日本機械輸入協会	1925
藤岡　　豊	ふじおか　ゆたか	三菱商事	1932
古川さちお(幸雄)	ふるかわ　さちお	石川島播磨	1932
松浦　武弘	まつうら　たけひろ	伊藤忠商事	1939
松谷　　隆	まつたに　たかし	富士通	1940
森田　　茂	もりた　しげる	出光興産	1930
山縣　正靖	やまがた　まさやす	三菱銀行	1937
吉嵜　清巳	よしざき　きよみ	関西ペイント	1925
吉田　邦彦	よしだ　くにひこ	安田生命	1938

編集後記

「悠遊」を手渡されて、これは面白い誌名だ、出典はどこか、図書館に出かけ、二、三の漢和辞典を調べた。出て来ない。諸橋轍次著「大漢和辞典」に当たってみると、「悠」に始まる熟語はずらり並んでいるが、見当たらない。創刊当時の様子を石川に聞くと「悠々」では遊び心に欠けるというので「悠遊」に落ち着いたそうだ。会員みなさんの心が伝わってくる立派な命名だと思う。

一昨年秋から「週刊中国悠遊紀行」(小学館・五十巻)なる雑誌が一年かけて刊行された。また「悠遊」の名を織り込んだ雑誌の新聞広告も目にしたことがある。やはり世間が真似る?ほど魅力的なのだろう。大切に引き継いでいきたい。

二〇〇〇年ミレニアムの第七号から石川の手伝いで「悠遊」に携わってから第十三号まで七年、みなさんの豊かな経験と知識に教えられ、楽しく編集してきました。今回で降板、新しい発想のもとに「悠遊」のさらなる発展を祈ります。

今号には特集二十編、自由題二十三編合計四十三編の投稿がありました。

編集世話人　小島博志(記)
石川正達

企業OBペンクラブ同人誌
「悠　遊」第十三号
二〇〇六年三月二十日発行

編集・発行者　企業OBペンクラブ「悠遊」刊行委員会
代表　西川　武彦

印刷所　株式会社　毎日新聞東京センター
東京都千代田区一ツ橋一―一―一
TEL　〇三―三二一二―五一八〇

連絡先　企業OBペンクラブ事務局　平尾　富男
横浜市青葉区田奈町三三―二一　(〒二二七―〇〇六四)
Eメール：hirao3321@t04.itscom.net
クラブURL：http://www.obpen.com

口　座　三菱東京UFJ銀行海老名支店(409)
企業OBペンクラブ　会計担当　清水　勝
(普通　1086096)

頒価　一、〇〇〇円